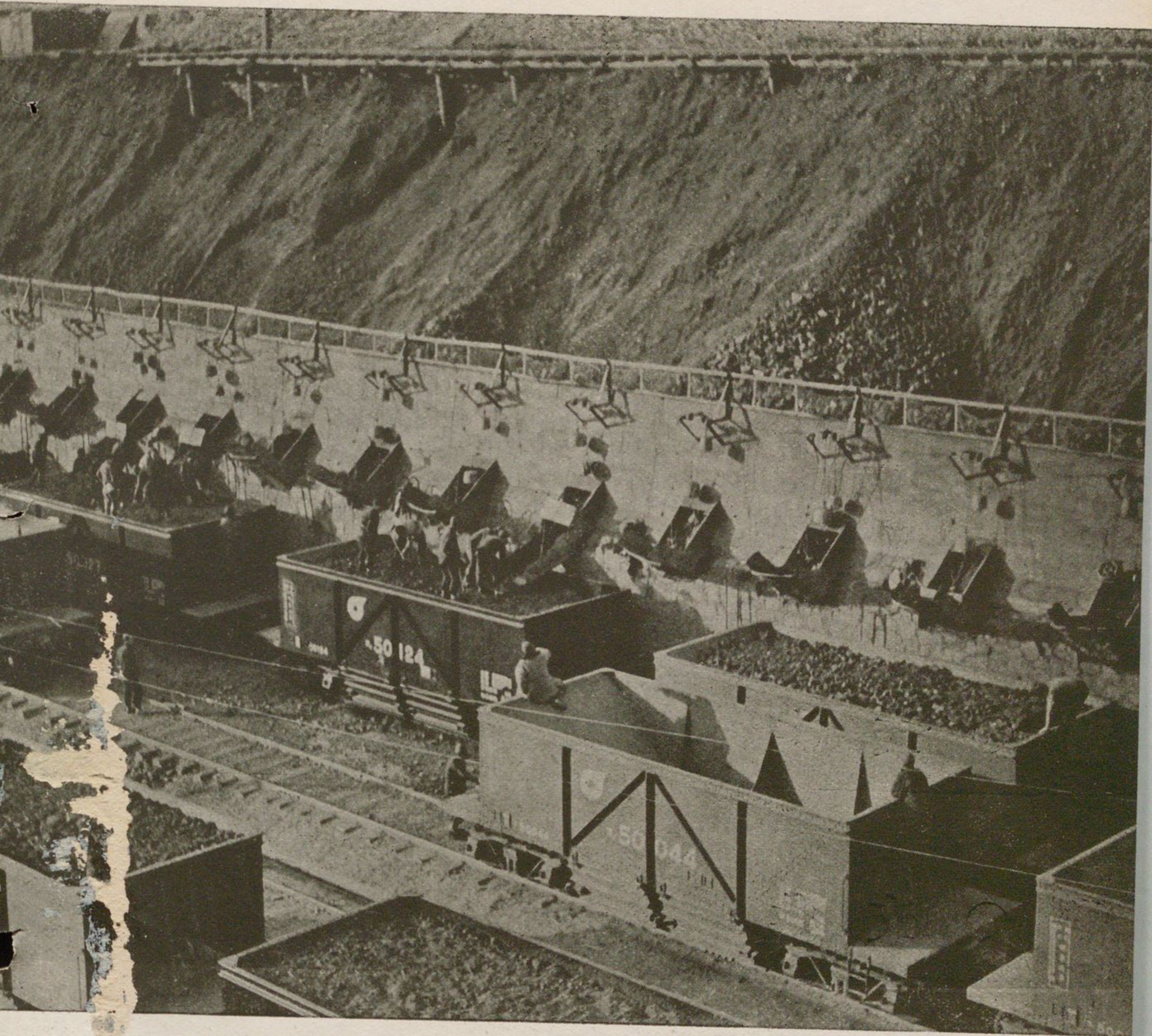
北支

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可　昭和十八年一月十五日印刷納本
昭和十八年二月一日發行（毎月一回一日發行）第四十五號

現地編輯

2[5]

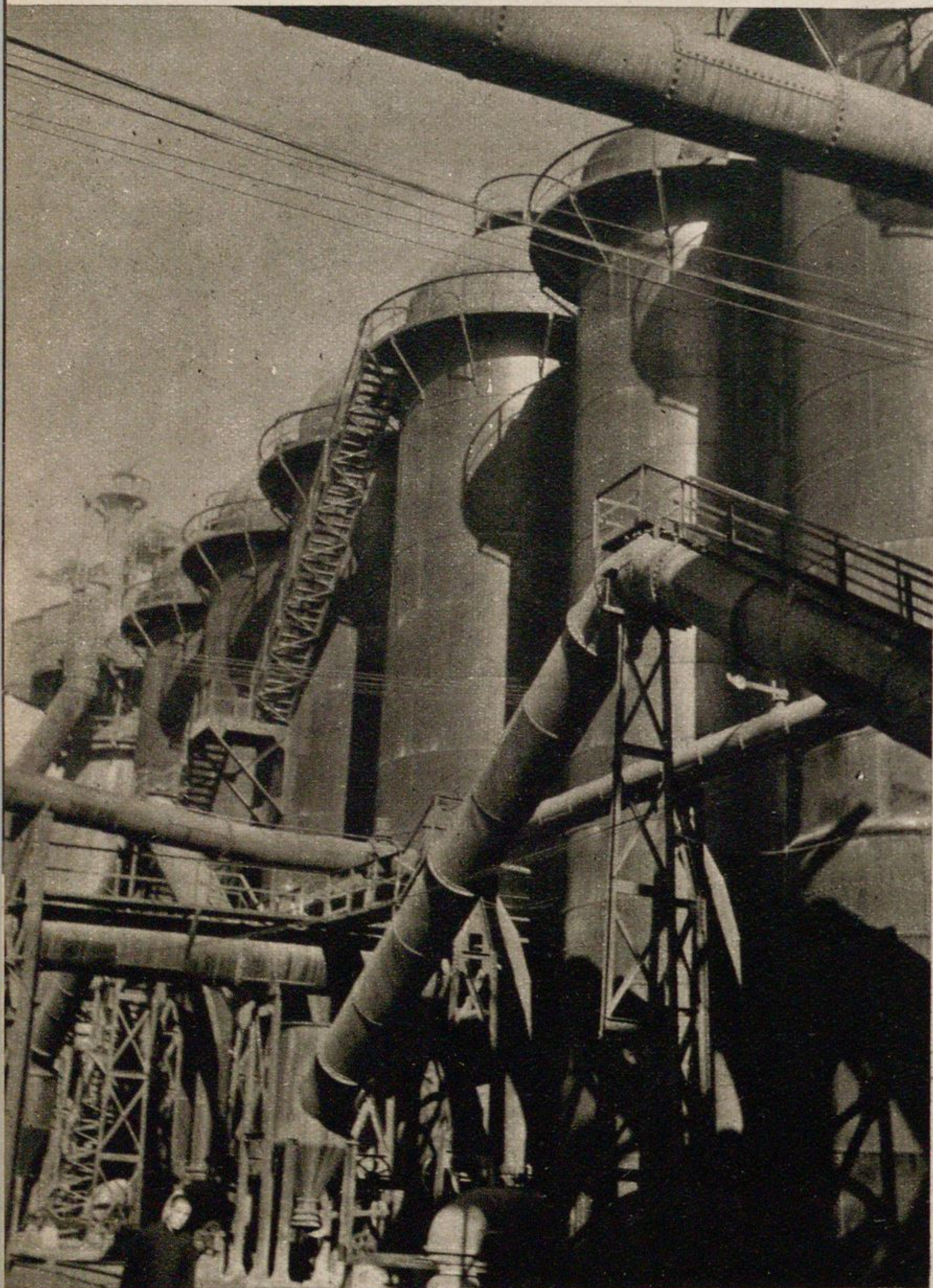
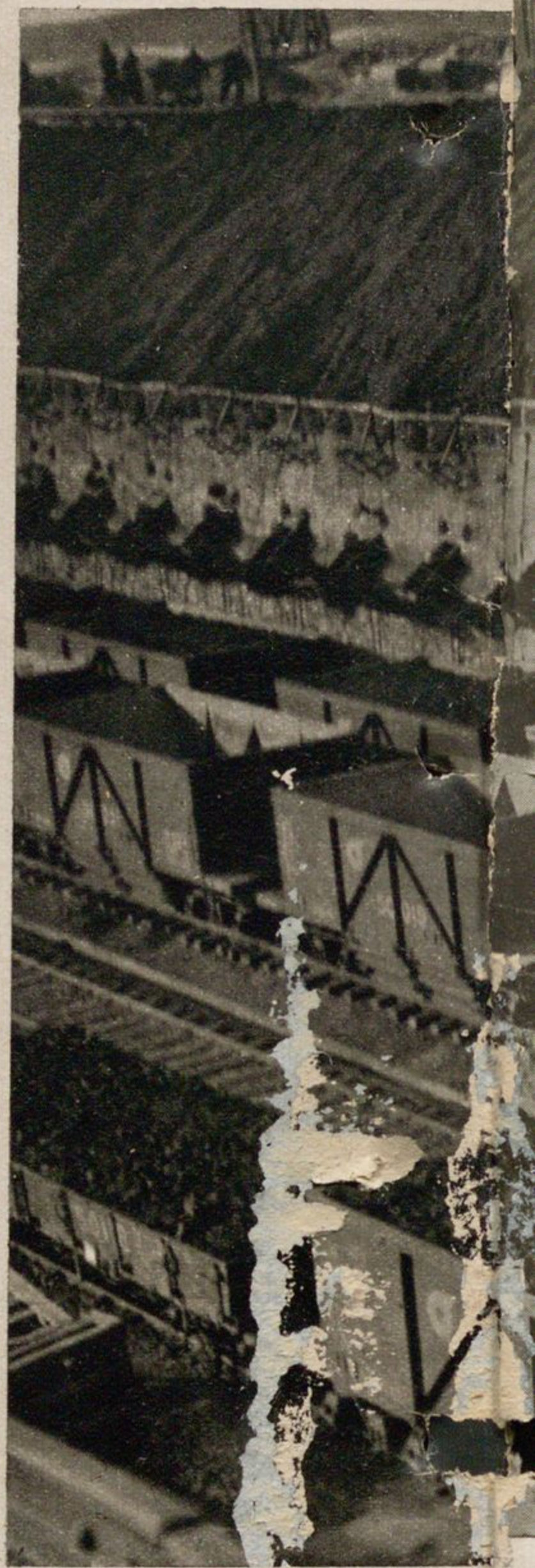
北支の鐵

東亞共榮圏內に於ける內地製鐵業の原鑛供給地を量、質、輸送等の諸條件について綜合的に考察する場合、容易、迅速且つ低廉に供給し得る點、北支の鐵は重要なものといはれる

△各鑛推定埋藏量（滿鐵北支經濟調査所調）

龍烟（蒙疆）	二億トン
涿鹿（同）	七百萬トン
白雲鄂博（同）	三千四百萬トン
金嶺鎭（山東省）	一千萬トン
冀東貧鑛（河北省）	八千萬トン

以上冀東の貧鑛を除いて品位は概ね五〇パーセント以上の富鑛である。開發の概要を見よう。

龍烟鐵鑛—龍烟鐵鑛株式會社（蒙古聯合自治政府と北支開發の折半出資）が採掘に當る北支の代表鐵鑛である。

熱風爐

龍煙鐵鑛・貨車積込

鑛區は宣化、懷來、龍門の三縣に跨り煙筒山、龐家堡、辛窰、三叉山、涿鹿等を包含する。從來煙筒山に主力が注がれてゐたが、一昨年末華北交通によつて京包線宣化站から龐家堡に至る運鑛鐵道が開通して以來、龐家堡は煙筒山と竝んで主要鑛區となり鋭意採掘が進められつつある。龍煙の鐵鑛は一部が石景山製鐵所に送られるが、大部分は對日輸送に當てられ、その量は滿洲國鐵鑛の對日供給量を凌駕してゐる

山西鐵鑛——東山、定襄、寧武の諸鑛が山西產業傘下の山西製鐵鑛業所によつて經營され、鑛石は專ら太原、陽泉の兩鐵廠に使用される

金嶺鎭鐵鑛——山東條約に基いて日支合辦の魯大公司の所有經營となつたが久しく放置されてゐた。事變後、同公司も北支開發の傘下に入り、最近採掘が軌道に乘りだしたが、質、量、輸送、青島港を控へた輸出の便等から今後を期待されてゐる

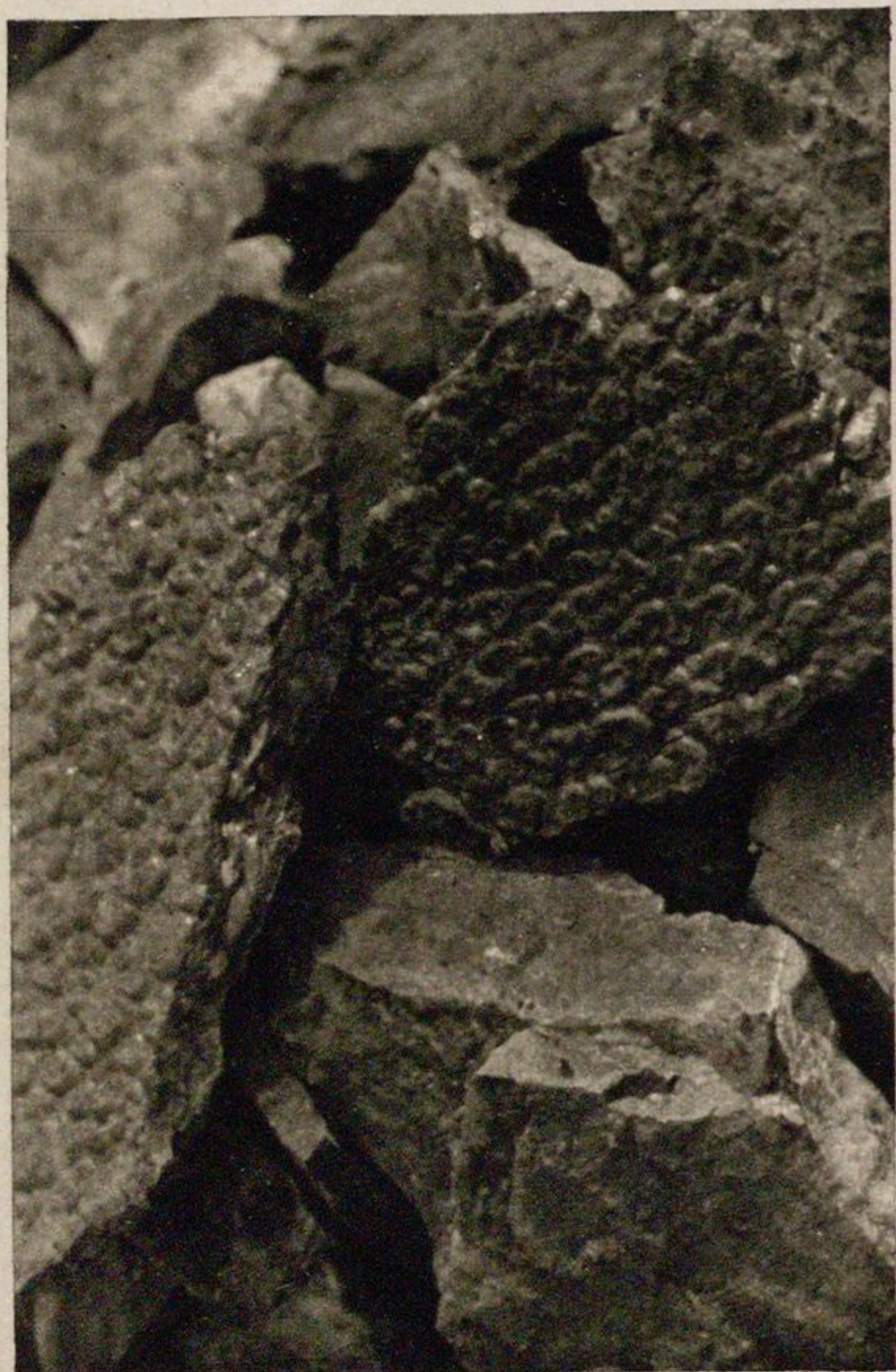
製鐵の方面は當面の對策として原鑛の對日輸送に重點が置かれてゐるが現地の極めて豐富な粘結性有煙炭を使用する製鐵計畫が進められつつある事は注目されよう。現況は次の通りである

石景山製鐵所——北京の西郊に在り北支開發傘下の石景山製鐵鑛業所が軍管理受託運營を行つてゐる

熔鑛爐から熔鐵が流れ出す

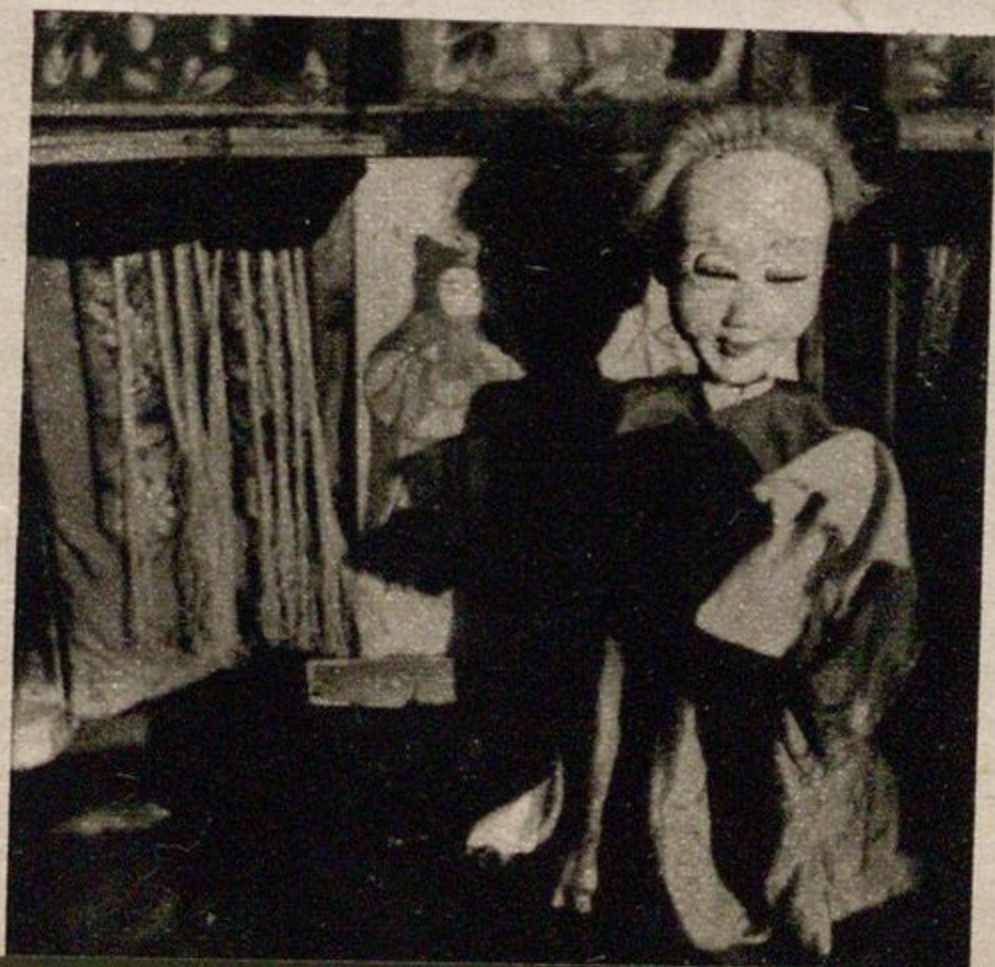
採掘

北支の鐵 2

龍煙の原鑛

太原鐵廠―山西産業に包含された山西製鐵鑛業所により軍管理經營され、銑鋼一貫作業が行はれてゐる

陽泉鐵廠―太原同樣山西鑛業所の軍管理經營。目下全能力を擧げて好成績を收めてゐる

採掘原鑛の輸送（山元―製鐵所、山元―港灣間）に當る華北交通ではその完遂に萬全の努力を拂ひ、貨車增積（三〇トン貨車に三五トンを積載する等）等の劃期的手段を講ずる等、山元增産に應へて完壁の輸送を遂行しつゝある

（詳細は本號よみもの頁參照）

傀儡戲 1

寫眞右上は、**小姑賢**（一名王登雲休妻）の一場面である

老太太（おばあさん）王張氏に王登雲といふ一男、王貴姐といふ一女があつた。張氏はおのれの女、王貴姐を愛して嫁を窘めた。果ては息子王登雲に命じて離緣狀を書かせたりする

夫の妹王貴姐は賢くて母を說き、離緣狀を撤回させ、それから風波をさまり圓滿にゆく、といふ物語である

寫眞右上は王貴姐（左）が兄嫁を慰めてゐるところ。寫眞下は張太太の登場。左下に人形師の眞劍な顏が見える

寫眞左は、**水滸傳、武松殺嫂の場**

武大郎の妻潘金蓮は富商西門慶と私通して武大郎を毒殺した。弟武松が通夜をしてゐると武大郎の靈が現れて非命に死んだことを告げる。そこで彼は嫂を殺して兄の仇を討つ

寫眞は、まさに本懷を遂げて滿足とも、恐ろしいとも云ひやうのない複雜な感情を驚くべきたくみさを以て表現してゐる

この傀儡（にんぎやう）達は眼が動き、手、足は無い、

傀儡戯 2

右は西遊記柱花礑の魚の精である。
王姑娘が腰元を連れて花見をしてゐると、魚の精は貴公子に化けて之を誑さうとする。已に危い所を孫悟空以下に助けられる

下の寫眞は**玉堂春、女起解の段**

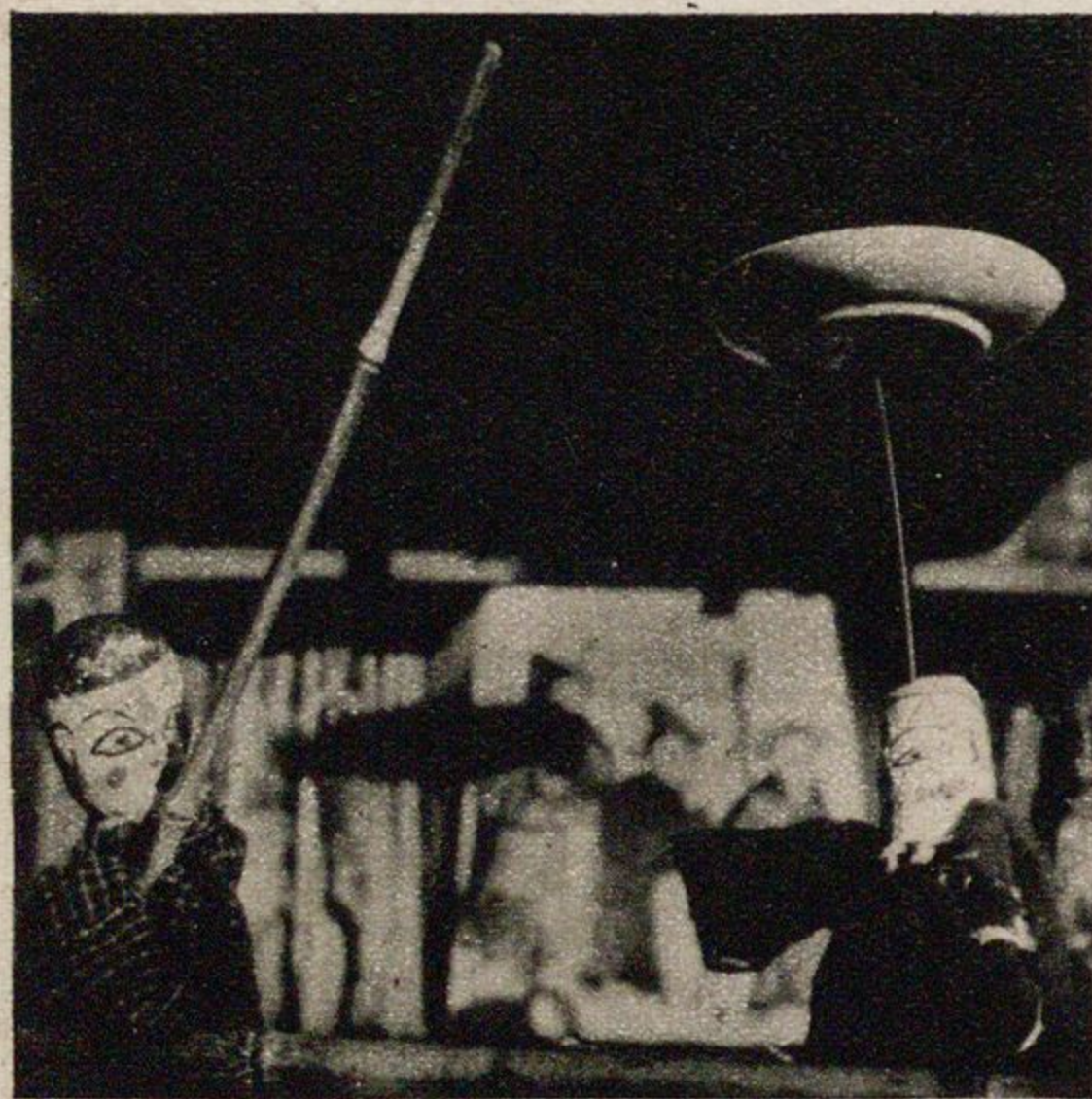
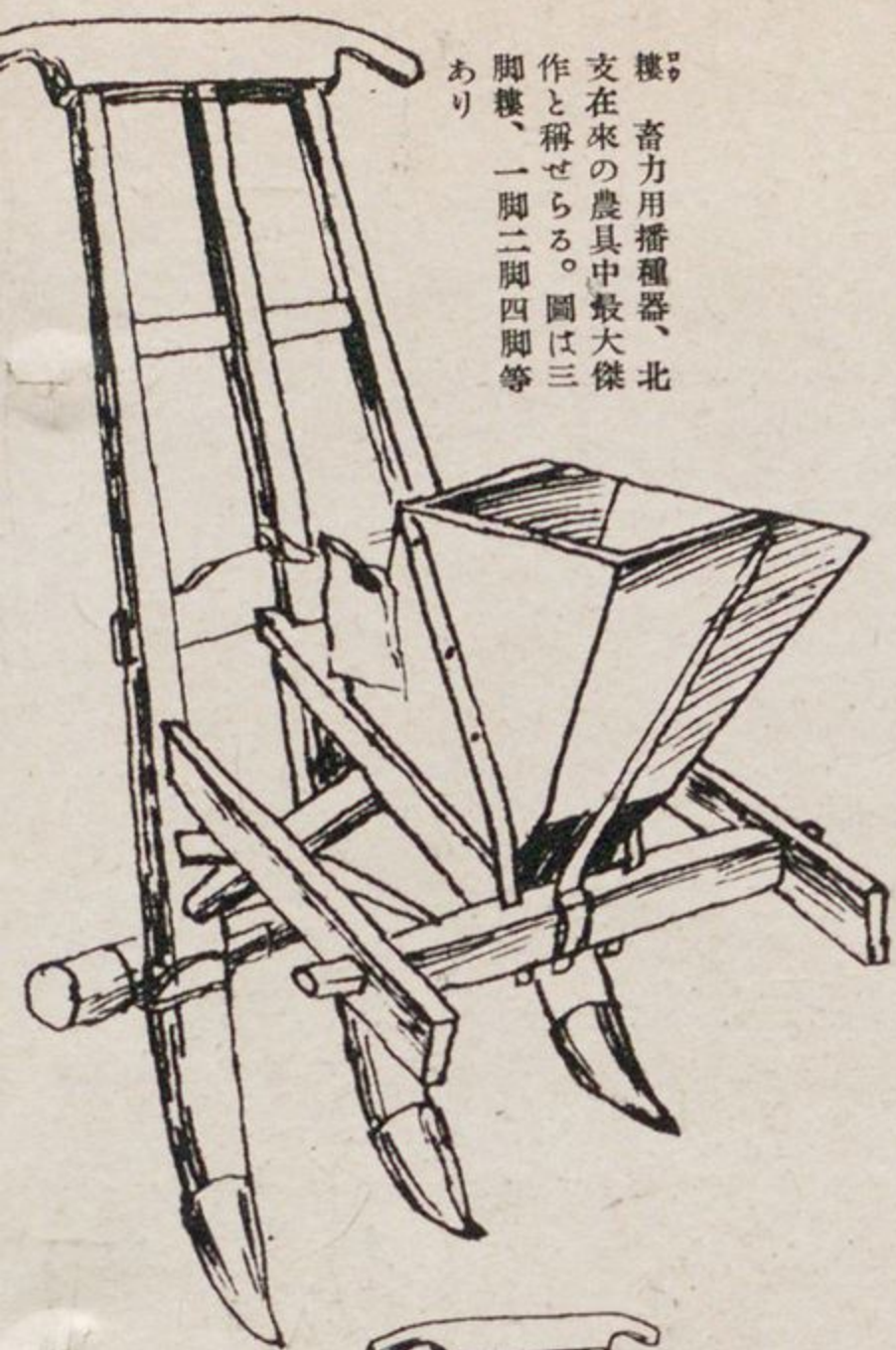
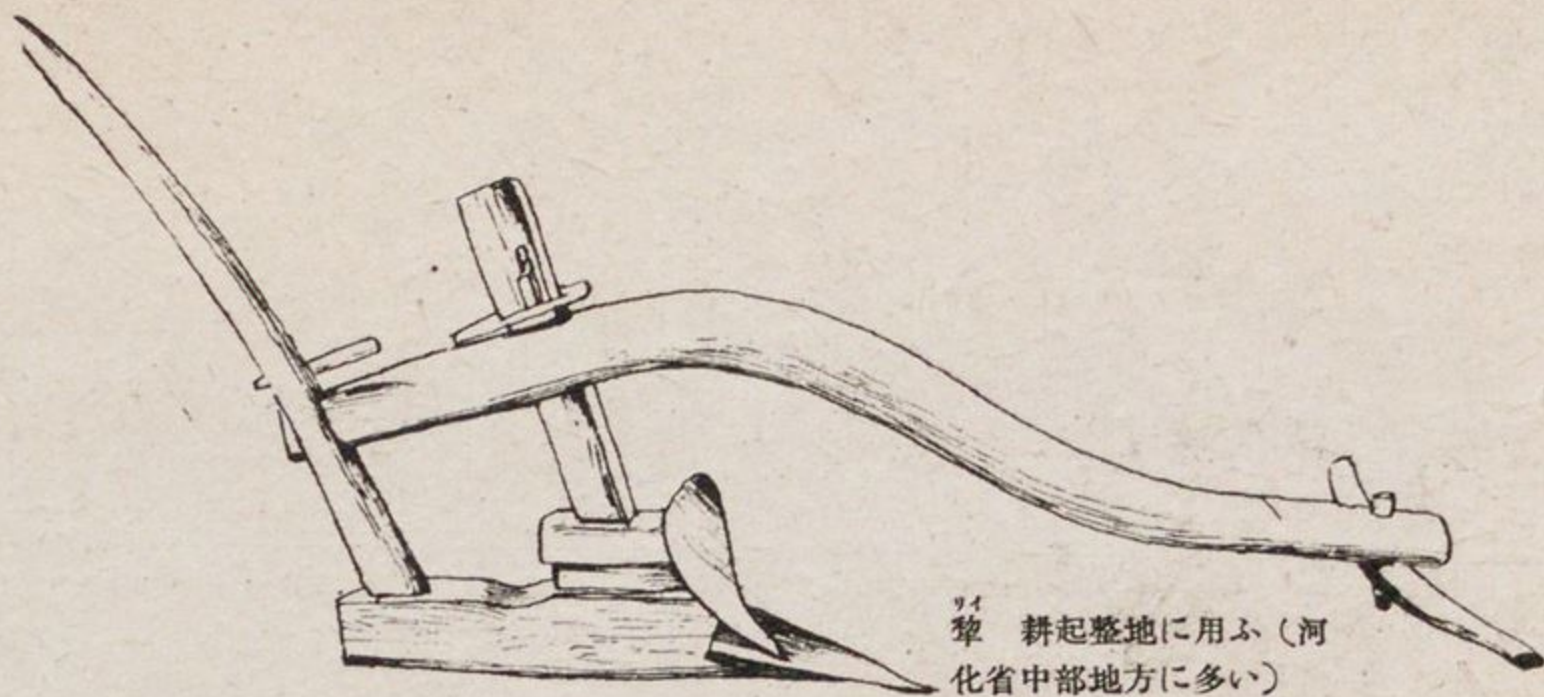
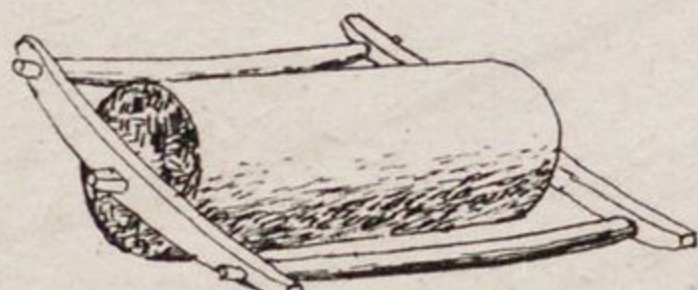
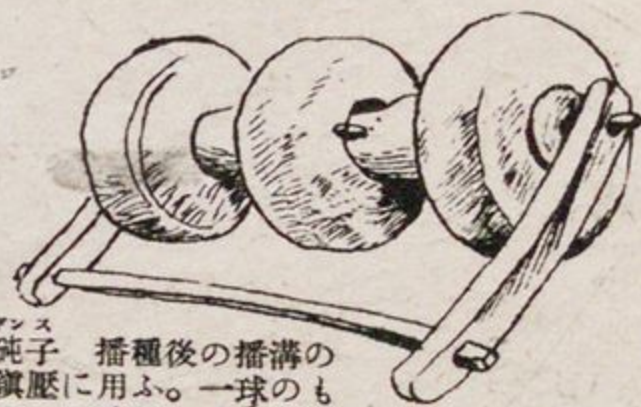
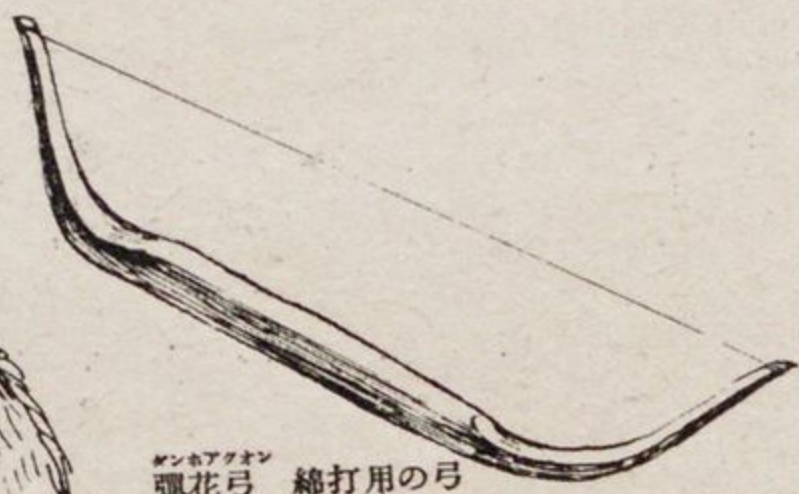
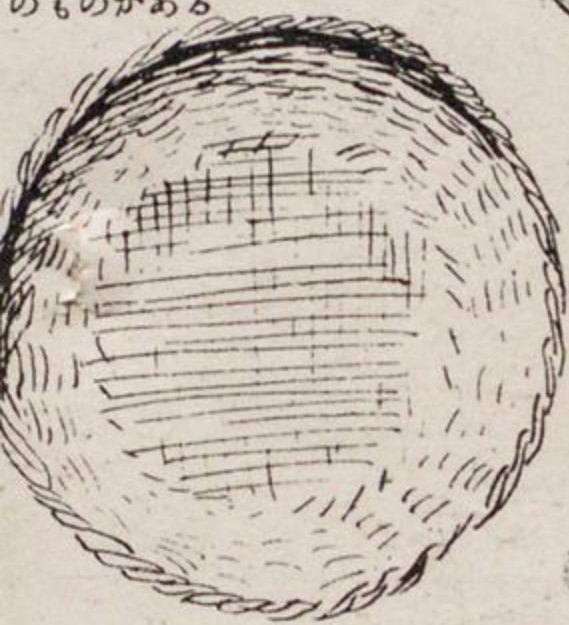
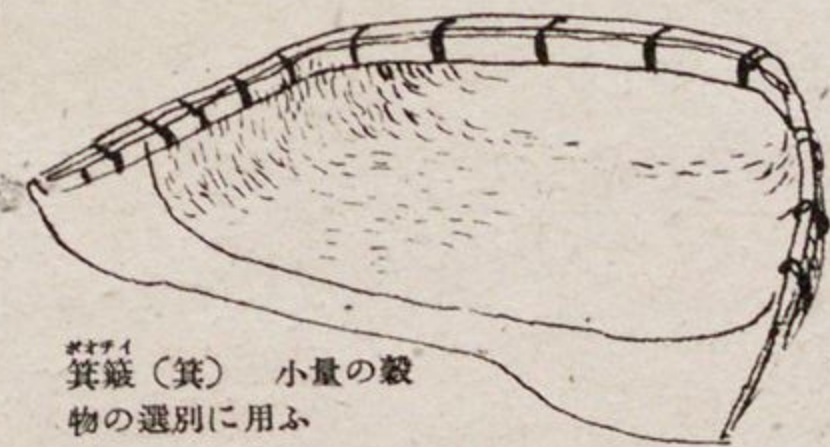
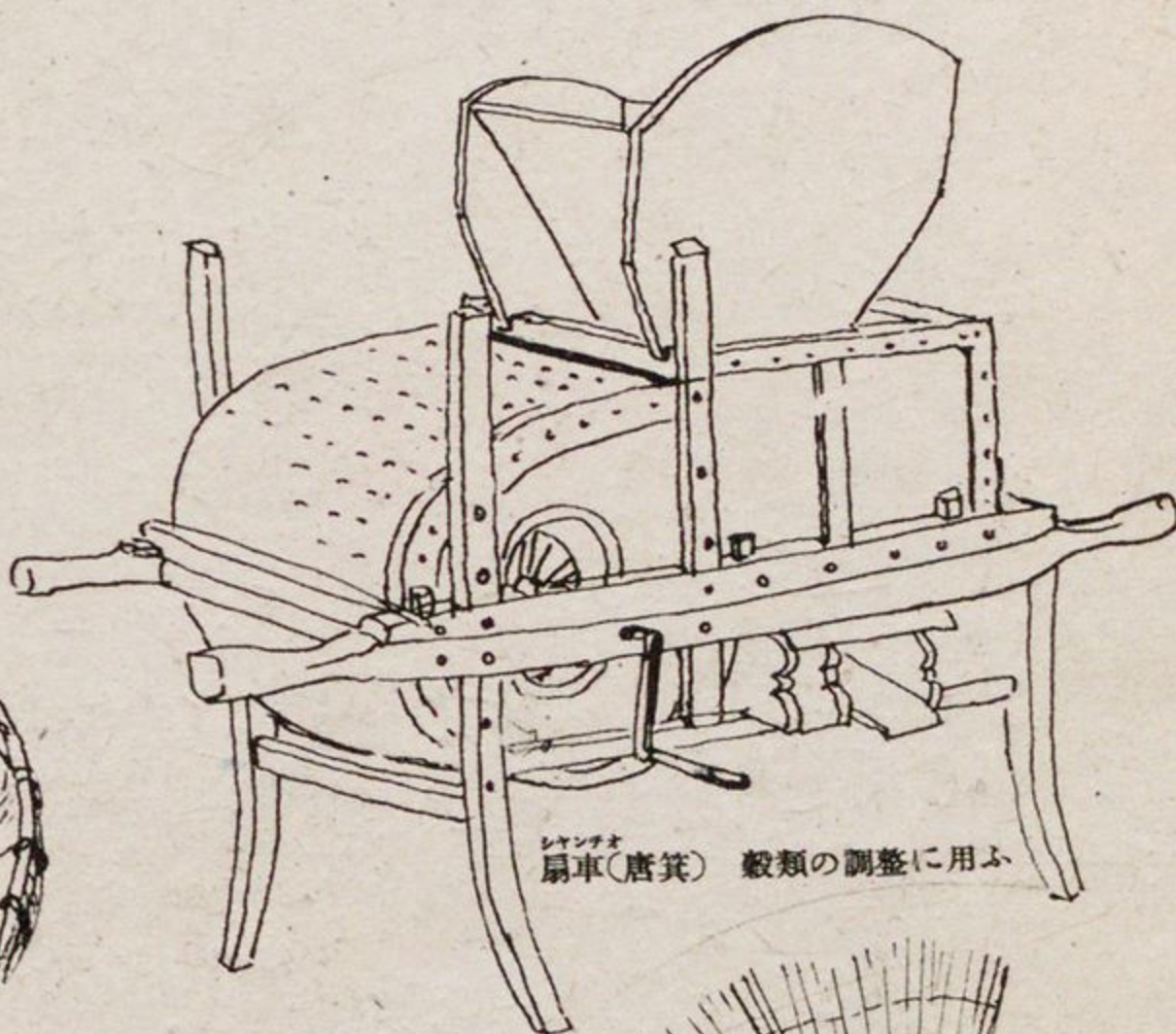
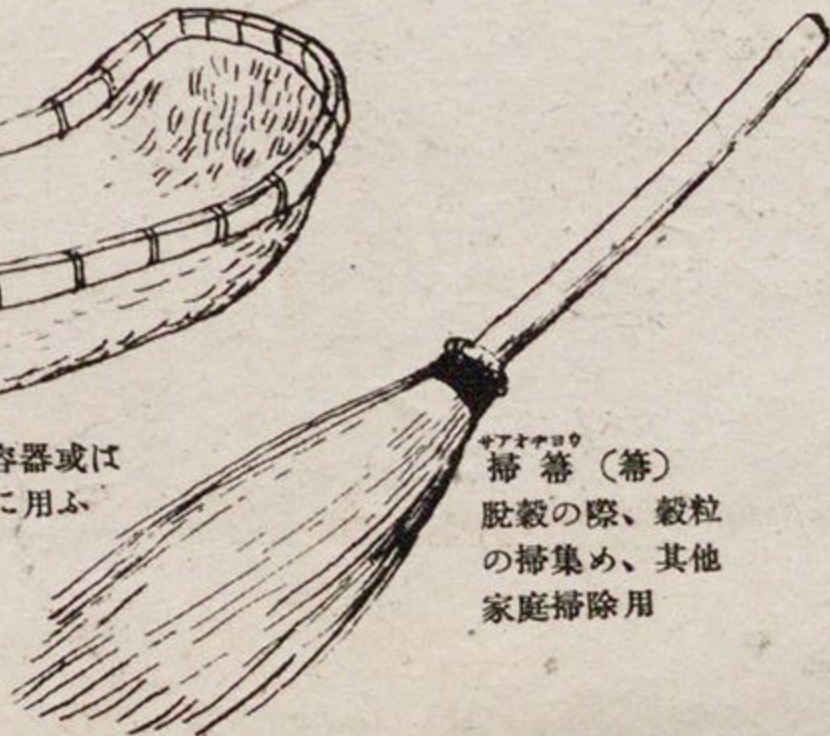
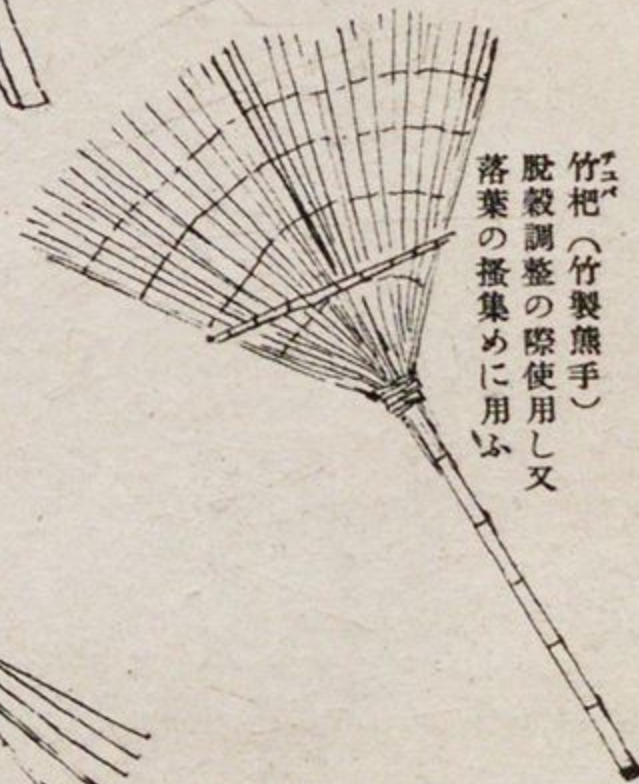
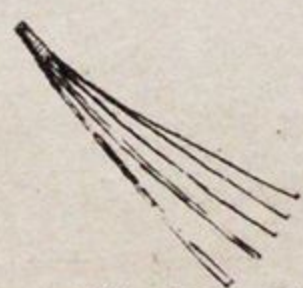
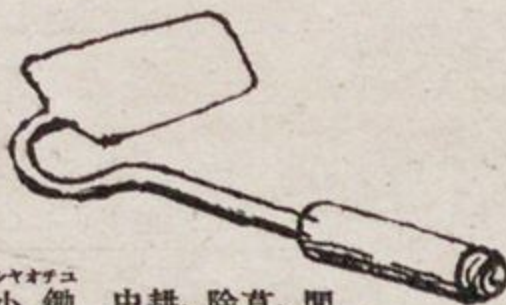
山西洪洞縣の歌妓蘇三事玉堂春は書生王金龍に學資を貢ぎ、その出世を待つ中に、沈といふ土豪劣紳に無理に落籍されて妾になつた。沈の妻は身持ちが惡く、他の男と通じ、夫を毒殺し、その罪を蘇三になすりつけて官に誣告する。寃罪を被つた蘇三は裁判を受けるため太原に護送される（芝居ではこれを女解起の段といふ）

そのみちみち、彼女は美しい聲で、愛人を想ひ、或は天に寃罪を訴へ、唄ひ且つ泣くのである。護送の役人はいたく彼女に同情し、重い枷など解いていたはりなぐさめる

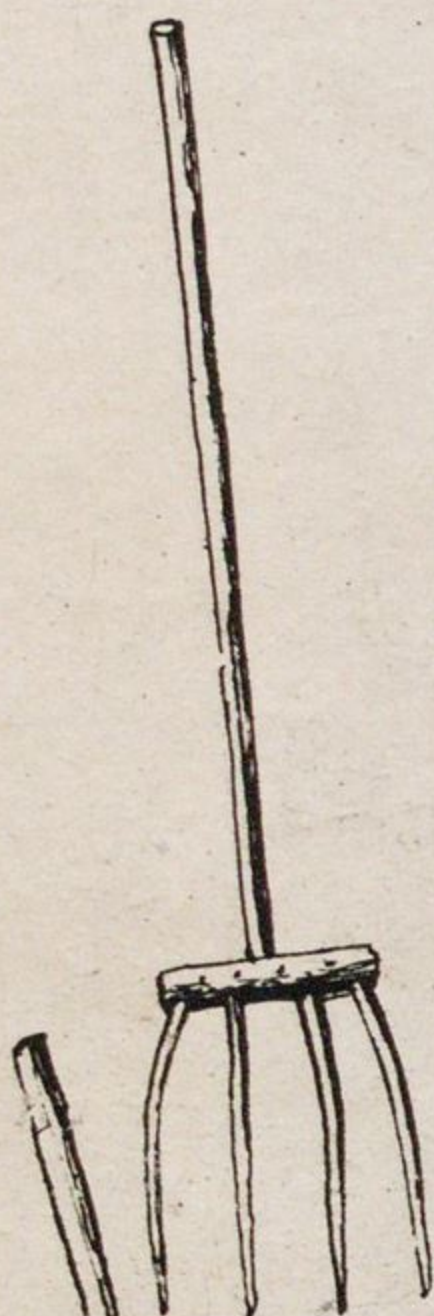
さて、太原の裁判所に來てみると、裁判官は日夜夢みし愛人、王金龍その人であつた、といふ

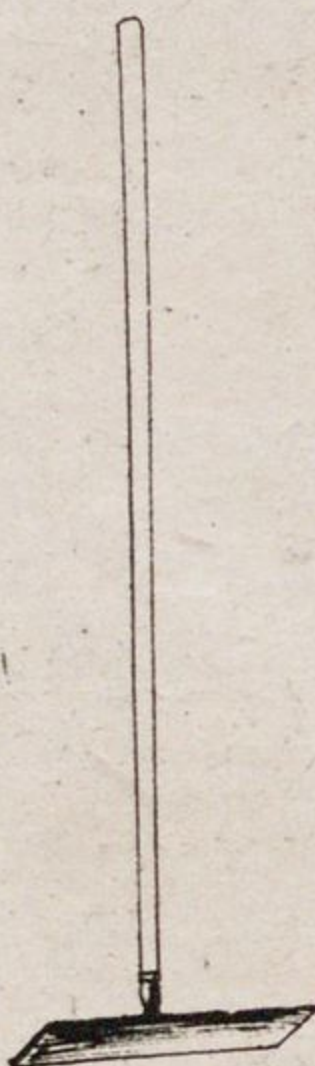
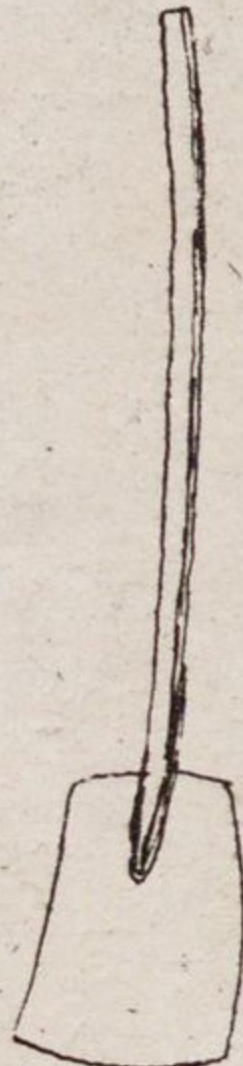
寫眞右が蘇三、左は護送の役人。手枷を附けた彼女の悲しい姿、役人の同情に堪へないやうな表情は遺憾なく感じを出して、眞に迫るものがある

院子で傀儡戯を觀る子供達

小戯皿廻し、竹を持つた人形
が皿の縁を叩いて轉廻させる

傀儡師、冬は温い中南支へ、夏は涼しい北支を巡業し
て故鄕（河北省呉橋）には年一度しか歸らぬといふ

耬 畜力用播種器、北支在來の農具中最大傑作と稱せらる。圖は三脚耬、一脚二脚四脚等あり
犂 耕起整地に用ふ（河化省中部地方に多い）
犂 耕起整地に用ふ（山東省に多い）
刮板 脱粒したる子實の集積或は子實の地乾を行ふ際均等に擴げるに用ふ 畜力を用ふ
碌碡 畜力用脱穀器
砘子 播種後の播溝の鎭壓に用ふ。一球のもの、二球のものあり
篩子（篩の一種） 子實と殼の篩分け、穀粒中の細砂の除去等に用ふ。篩子には大小樣々のものがある
彈花弓 綿打用の弓
扇車（唐箕） 穀類の調整に用ふ
簸箕（箕） 小量の穀物の選別に用ふ
竹杷（竹製熊手） 脱穀調整の際使用し又落葉の掻集めに用ふ
筐 運搬用に用ふ、糞筐、菜筐等がある
笸籮 穀物其他の容器或は家畜の飼料入れ等に用ふ
掃箒（箒） 脱穀の際、穀粒の掃集め、其他家庭掃除用
竹製 用途不明なるも竹杷の一種ならん

農具

廟會の市から農具を買つて歸る農民

小鋤　中耕、除草、間引等に用ふる手農具

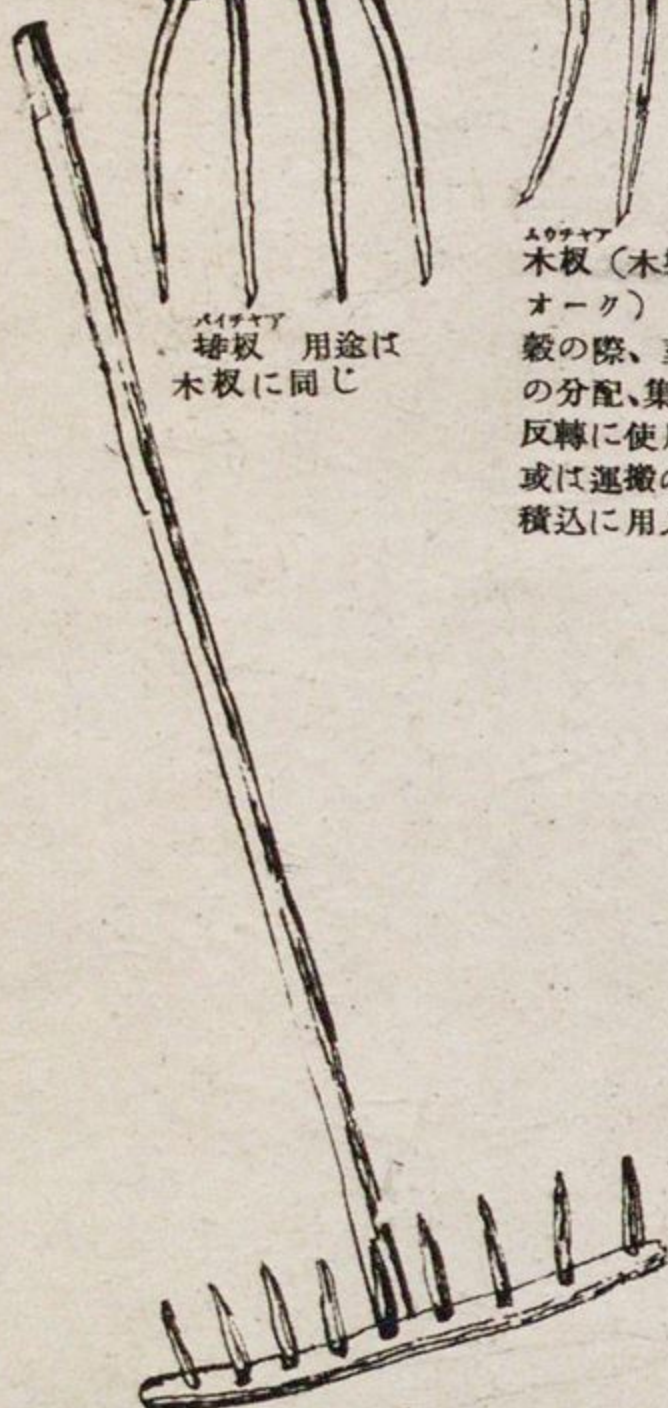
鎌刀（鎌）刈取用

莘杈　用途は木杈に同じ

木杈（木製フオーク）　脱穀の際、莖桿の分配、集積、反轉に使用し或は運搬の際積込に用ふ

木鍬　（木製シヤベルの一種）脱穀せられたる穀粒の投上げ風撰或は土糞の撒布等に用ふ

鐵扒　畑地灌漑水路の啓開水路の切替に用ふ

木鍬（木製シヤベル）　脱穀せられたる穀粒の投上げ風撰或は土糞の撒布に用ふ

條鐮　掘取土糞の切替等に用ふ

鐵鍬（シヤベル）　作溝掘取、肥料調整、土糞の撒布、其他土工用

鋤　人力用中耕除草器

木杷　脱穀場に於ける稈屑及び穀粒の掻集めに用ふ

犂を使つて耕作する

篩子（篩の一種）　穀粒精選用篩、天井から四隅を吊し腕木を以て揺り動す

鐵匠工具

鋏刀—鐵やブリキ等を剪るもの

鍣　鐵

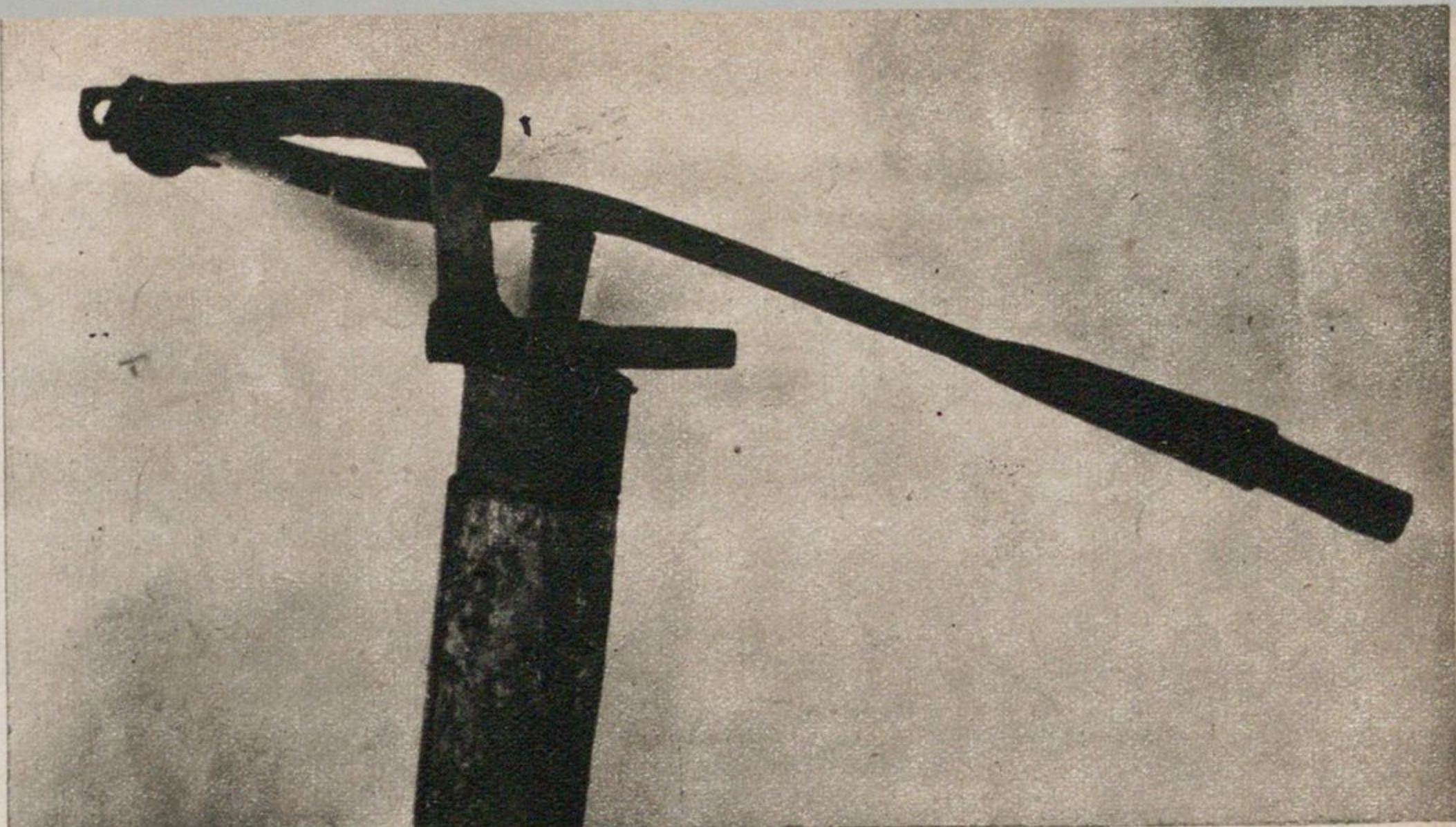
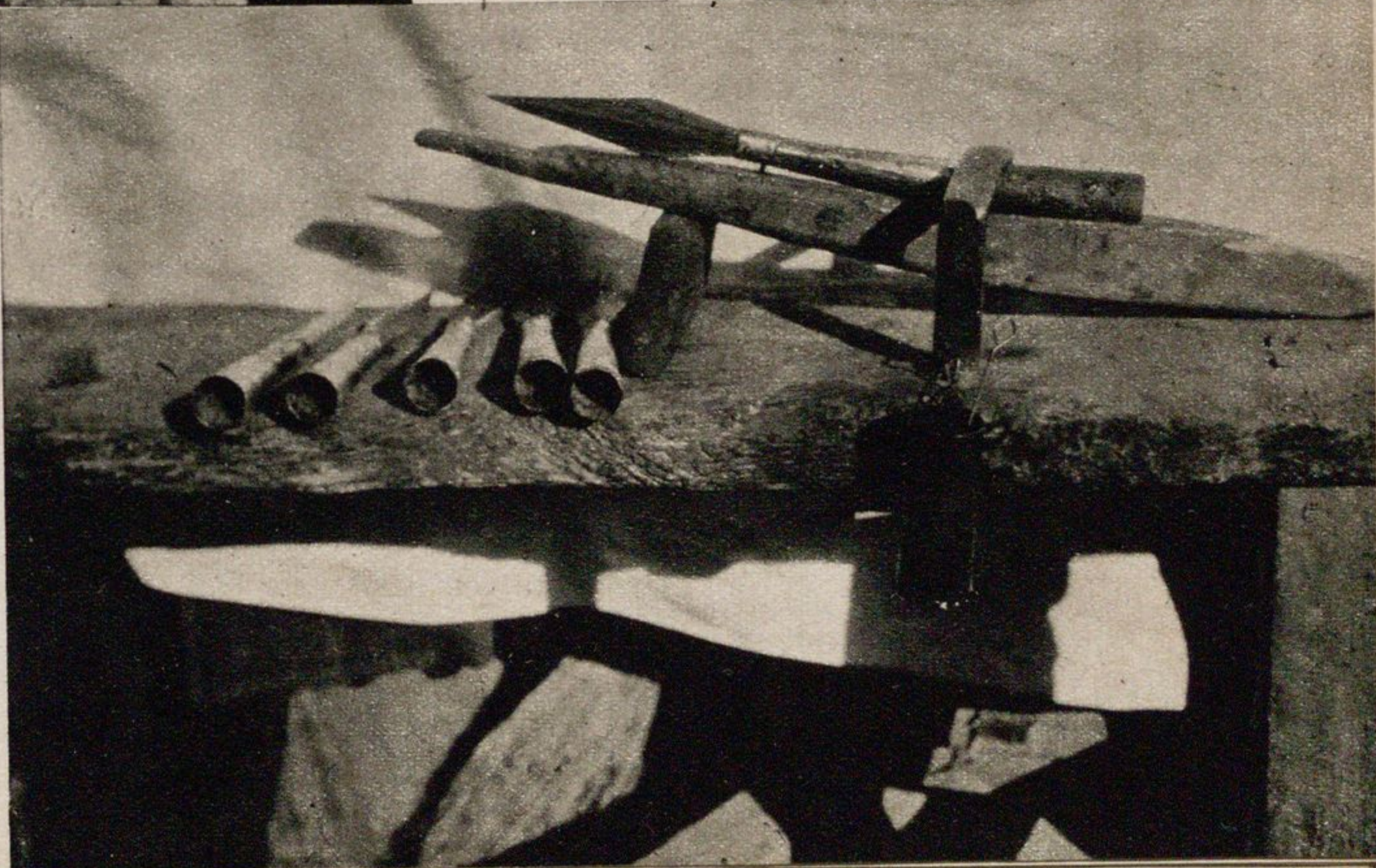
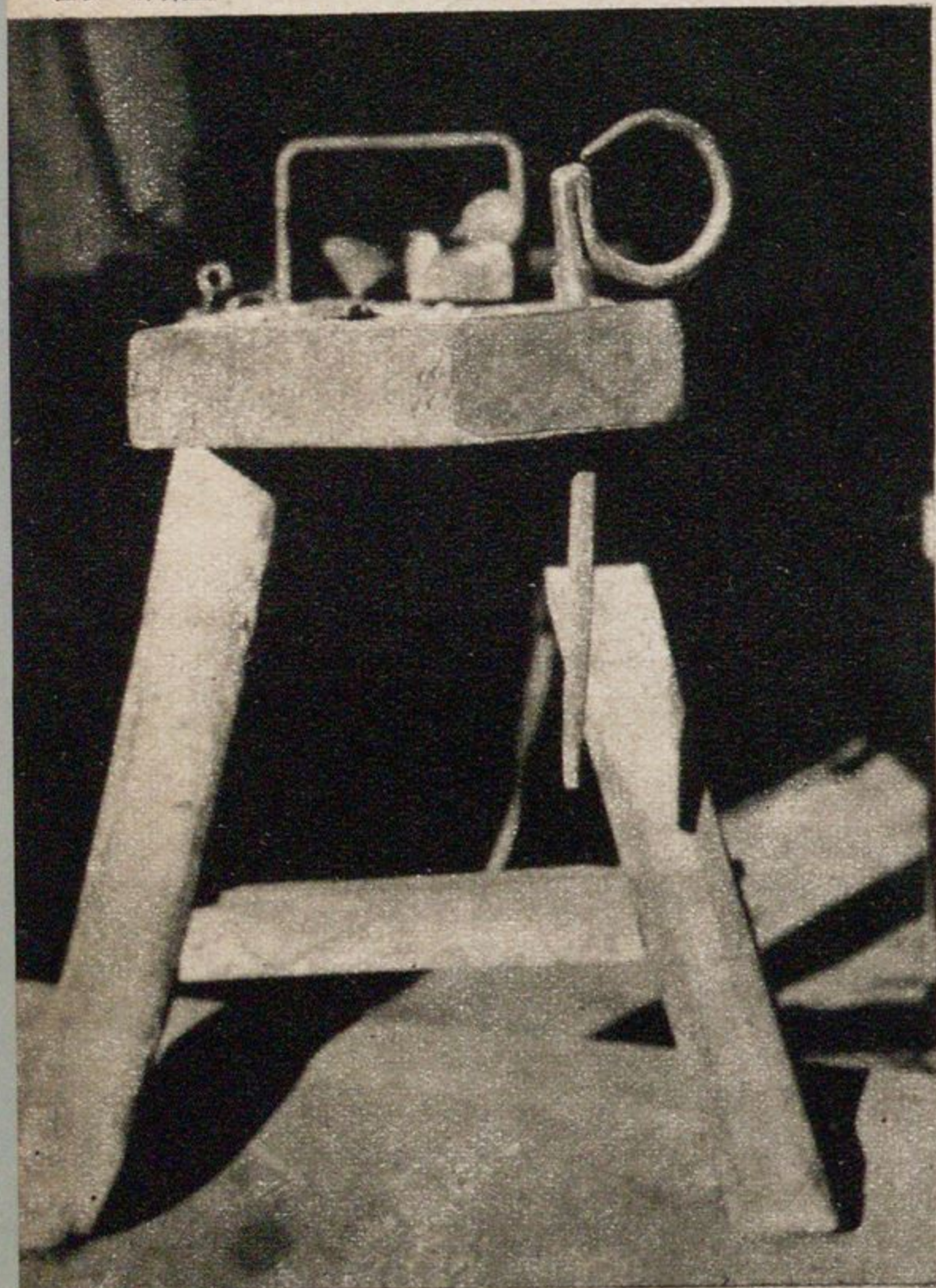
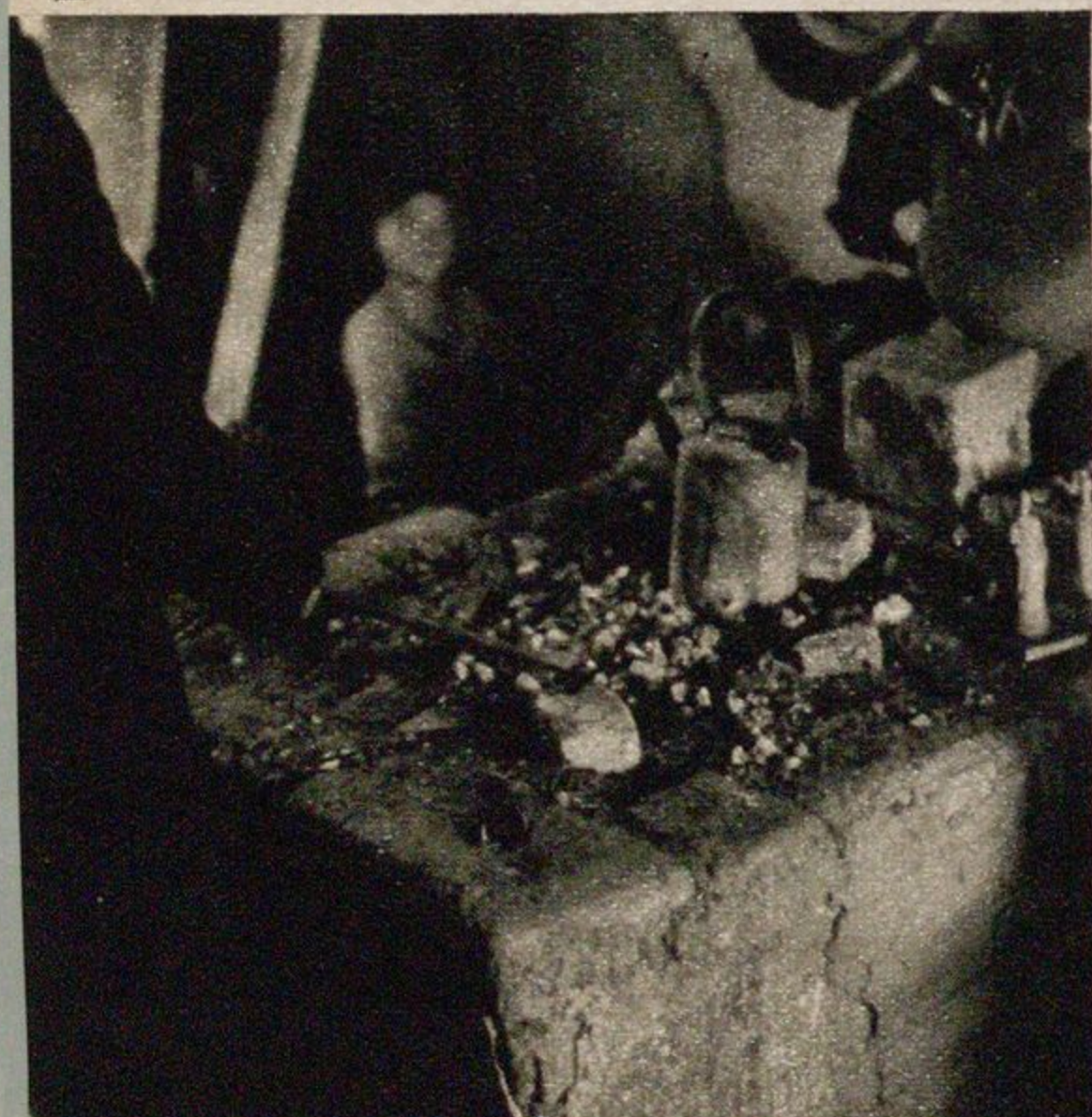
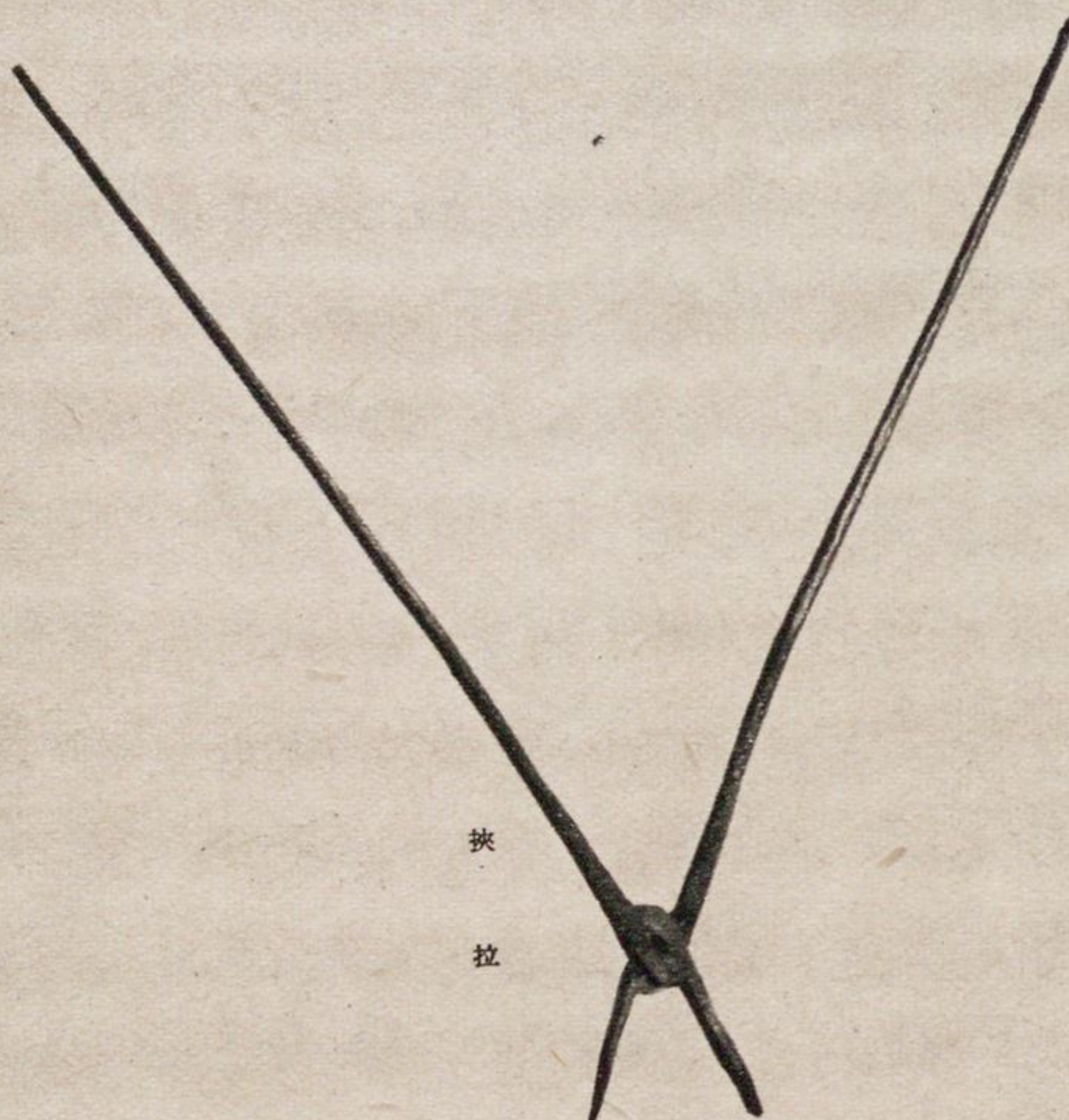
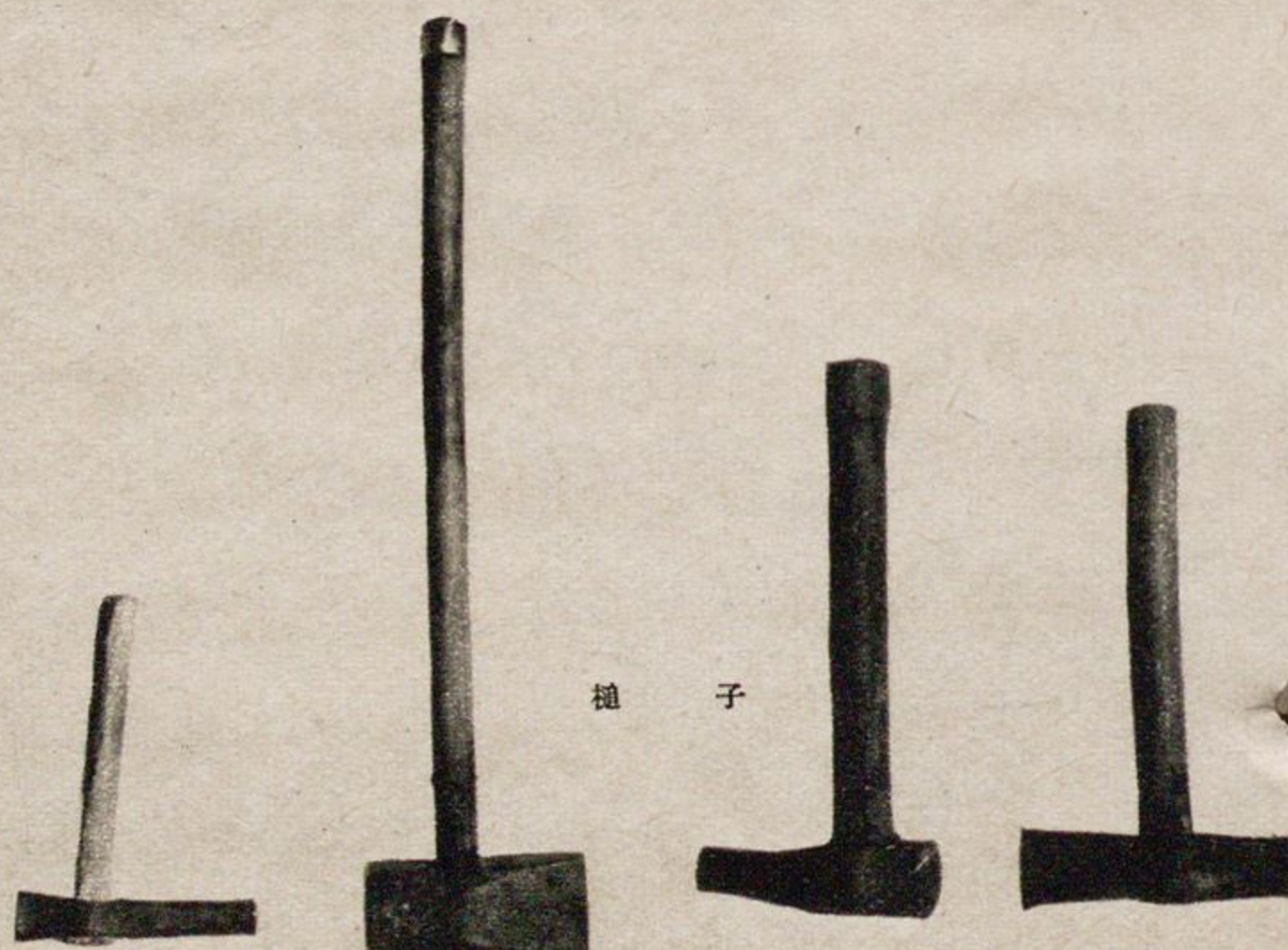
板凳（作業臺）で鉾の穗先をつくる

鉆子—鍛冶臺

印　子

槳刀―これで削つて刄物をつくる

櫈板―作業臺

爐

挾拉

槌子

鉤—肉屋等で使ふ

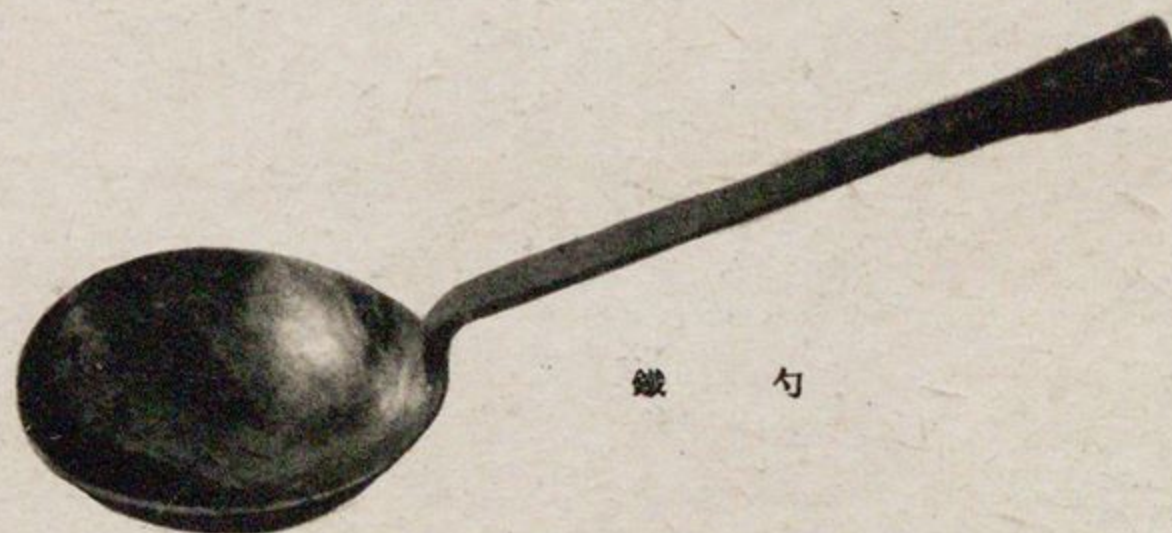
名稱使途不明（高さ一尺）

菜刀

烙鐵—アイロン

鐵鈀—農具

鏟子

鐵鍋

鐵勺

鐵匠製品

支那農民生活のことをよく「數千年前の人類の生活を見る」といふ風に書いたものを見かける。若し農民の生活がさうであるならば、支那の鐵匠(かぢや)の場合にもそれはあてはまるであらう

彼等は農民や貧民の一切の鐵に關する生活部門を引き受けてゐるのである鐵匠は何でもトンテンカンと鎚で叩いてつくる。最小限度の手間で最大限度上等のものをせせつとつくる

出來たての鎚跡のピカリと光る縁の切り口の切れるやうな鐵鍋・杓子などは南部鐵瓶を貴族のものとすれば、これはまがひもなく平民の生活具である

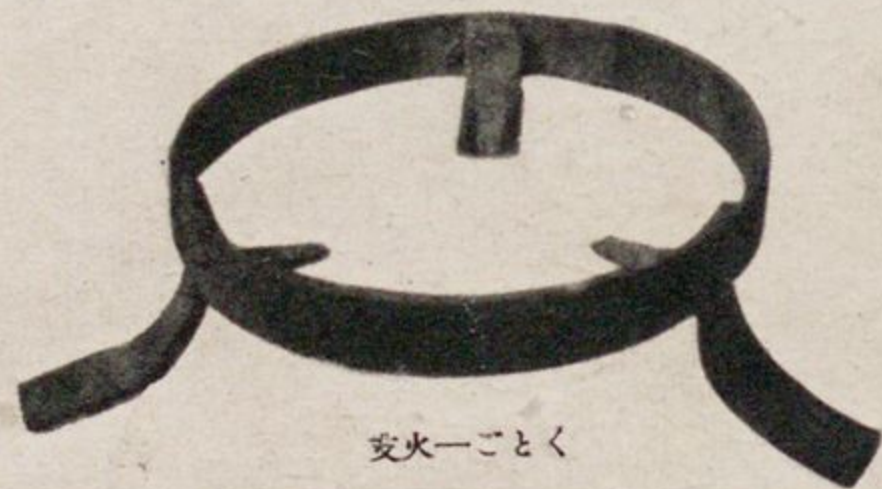
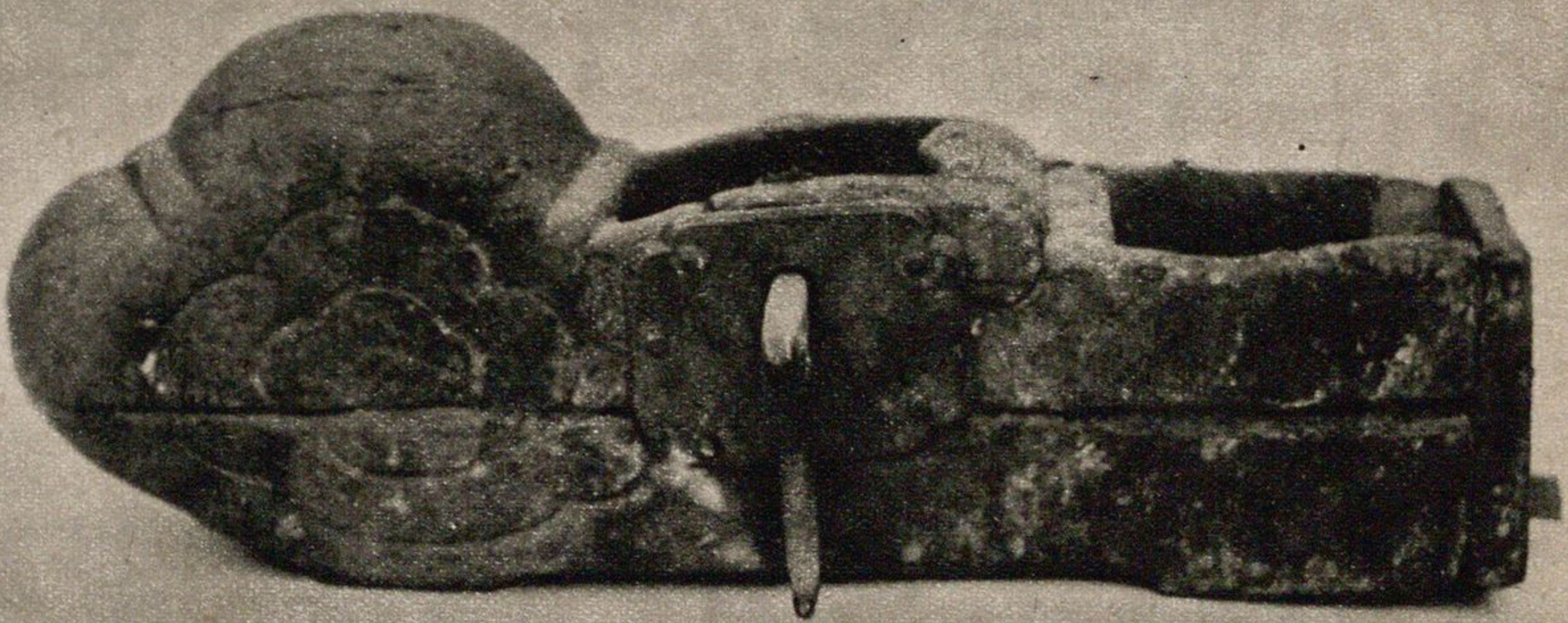
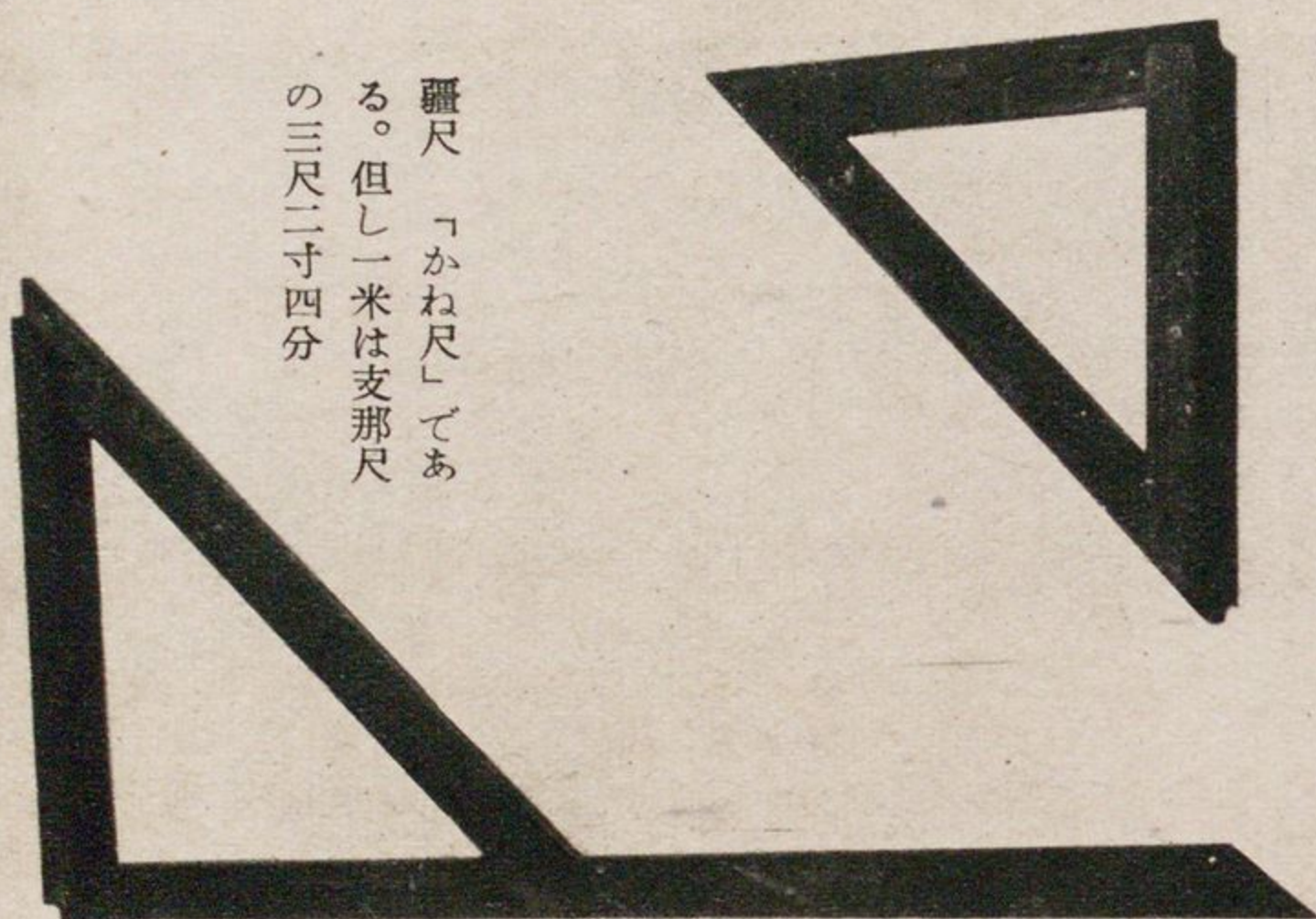
北支到る處で鐵匠の愛すべき作品にゆきあたるのであるが、將來は重工業の發展と共にこれ等は自然消滅の運命にある

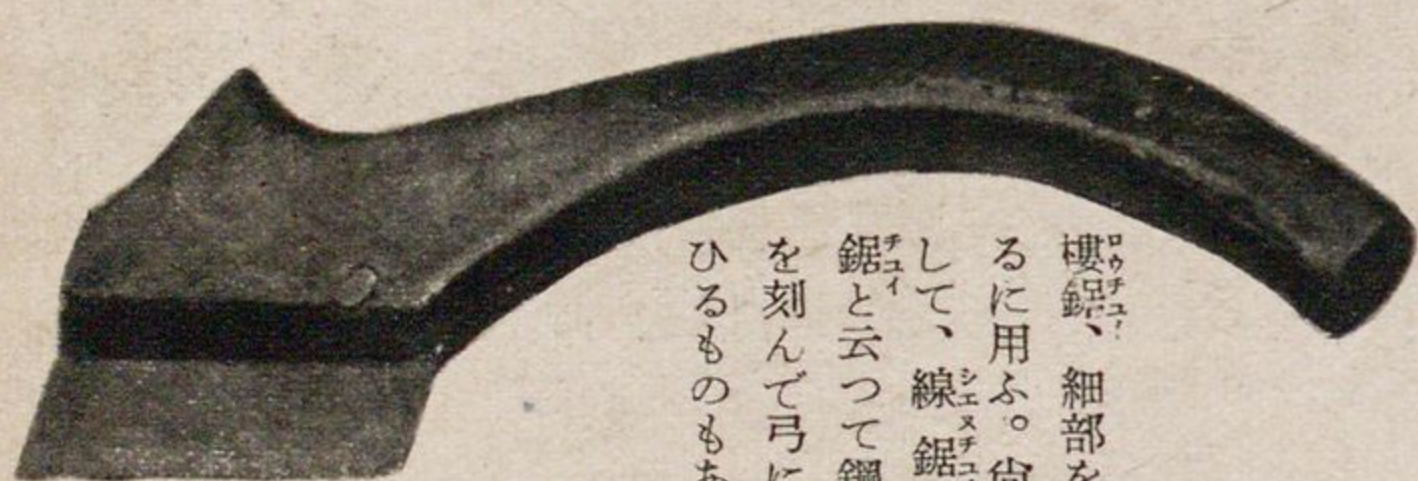
薬臼と杵（高さ約六寸）

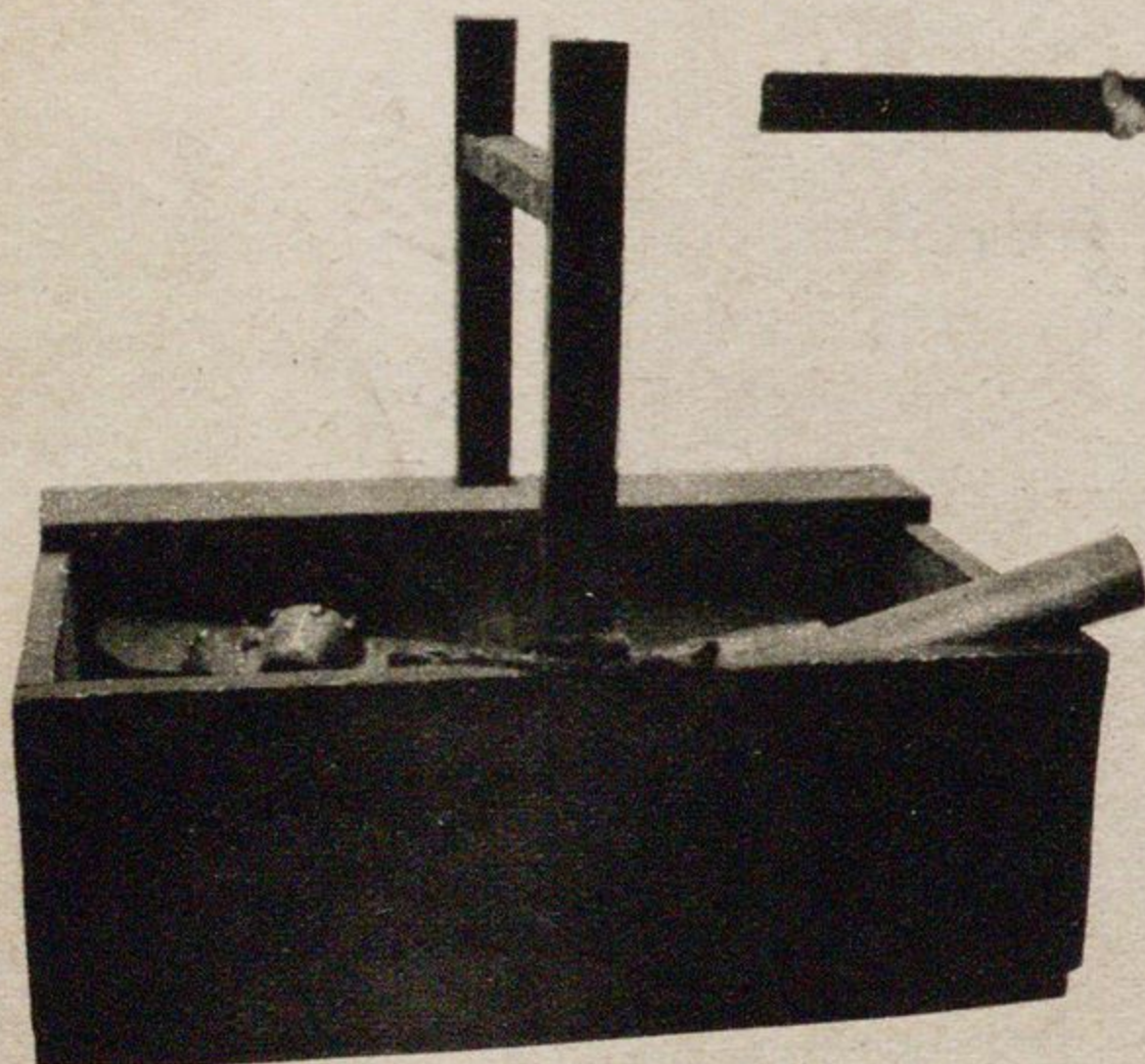
支火—ごとく

作業場

鐵圏—把の〆帶

荷葉釘—靴底へ打つ

墨斗（メイト）、「すみつぼ」のことである。我國のものと大差はないが、これはすべて木匠（ムーチャン）（大工）が自分で使ふものを自ら作るのであるから我々はこれを一つの美術品として、面白く觀賞することができる「すみさし」のことを墨筆（メイビ）といふ、竹でつくる、これは我國のものと全然異らない

木匠工具 1

彊尺　「かね尺」である。但し一米は支那尺の三尺二寸四分

銼　やすり

摟鋸(ロウチュイ)、細部をゑぐり取るに用ふ。尙細部用として、線鋸(シエヌチュイ)とか圈鋸(チョアンチュイ)と云つて鋼鐵線に齒を刻んで弓にかけて用ひるものもある

弓錐、「きり」である。一本の弓弦（皮革製）を鑽の軸にまきつけて廻して穴をあけるもの。軸の上部は把手である

木匠提盒——道具入れ

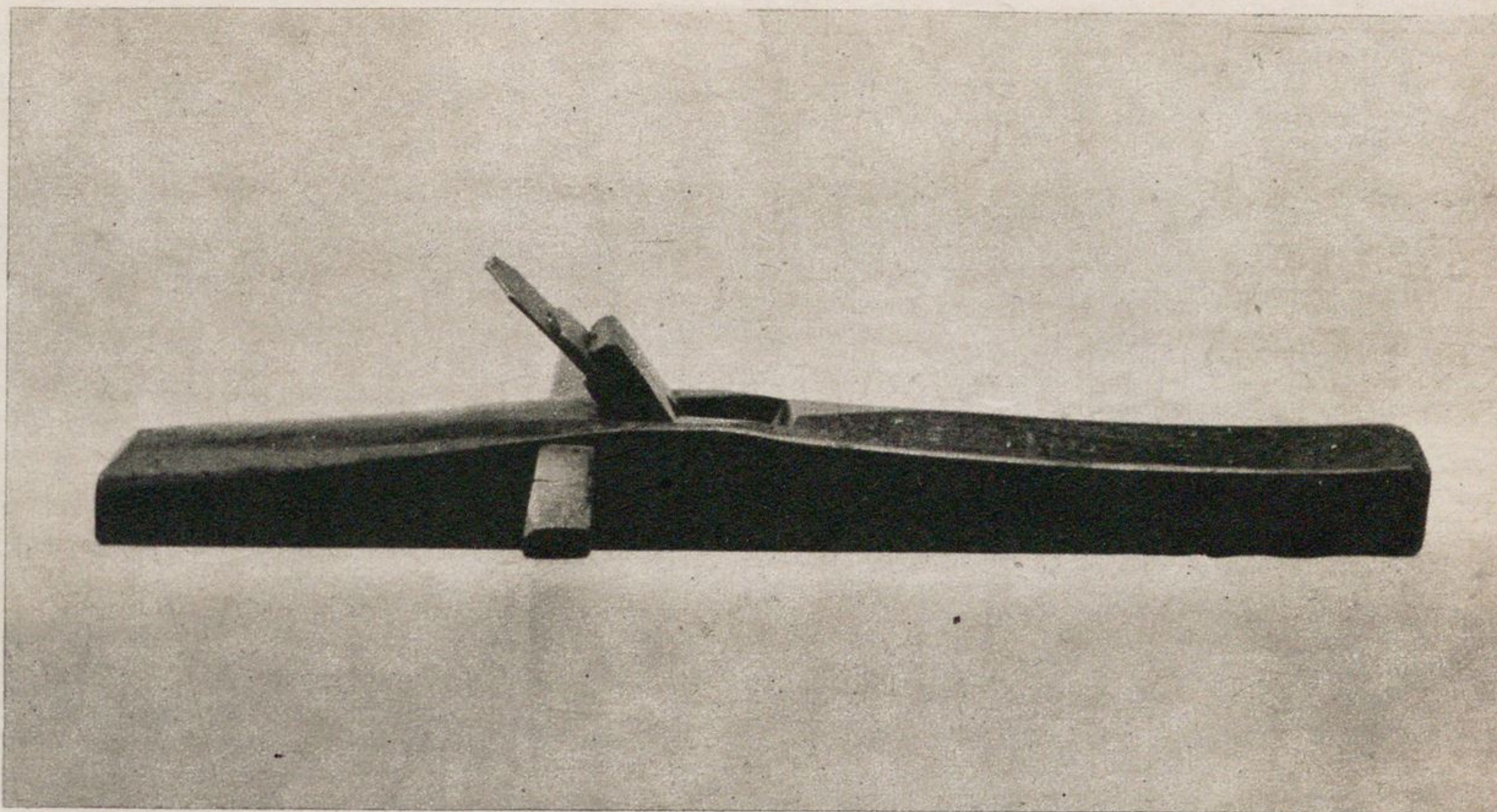
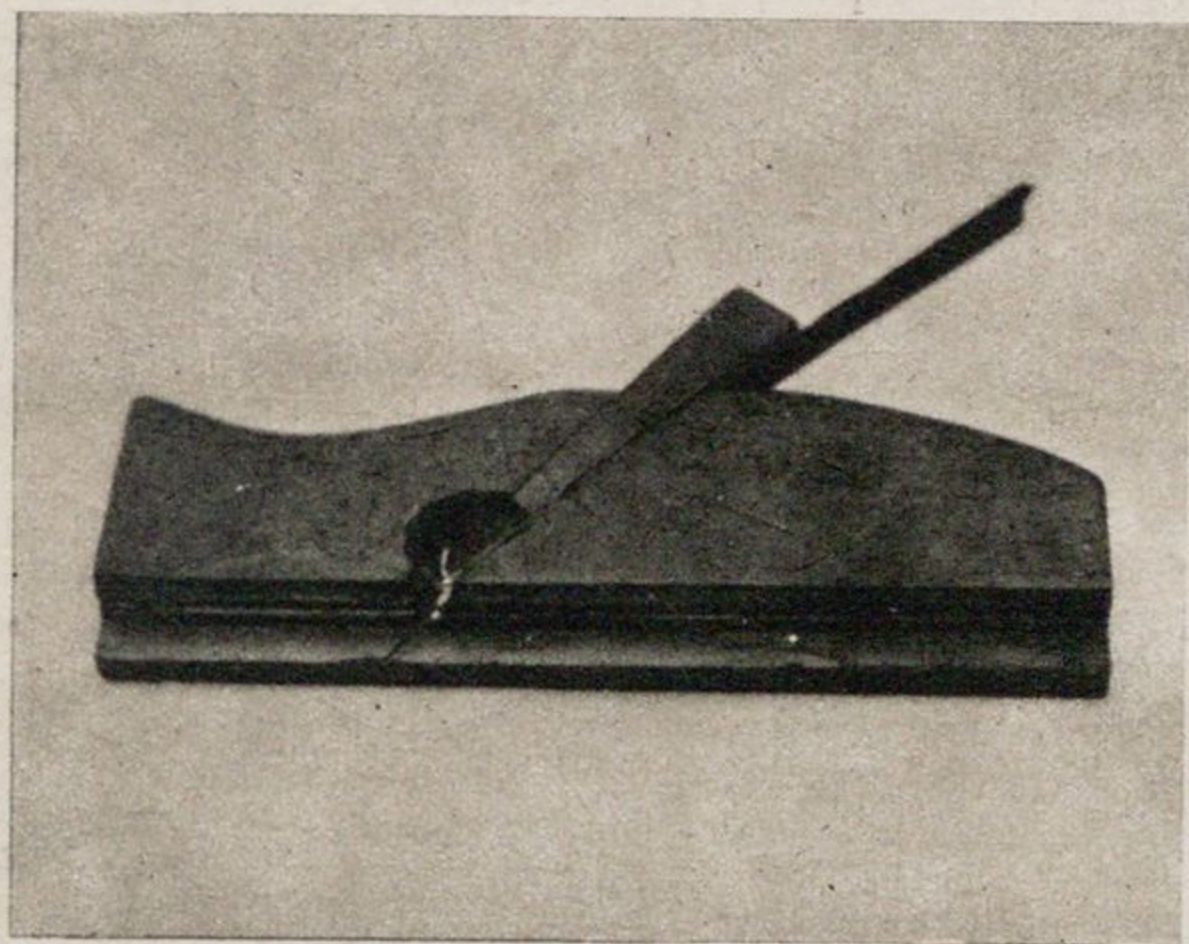
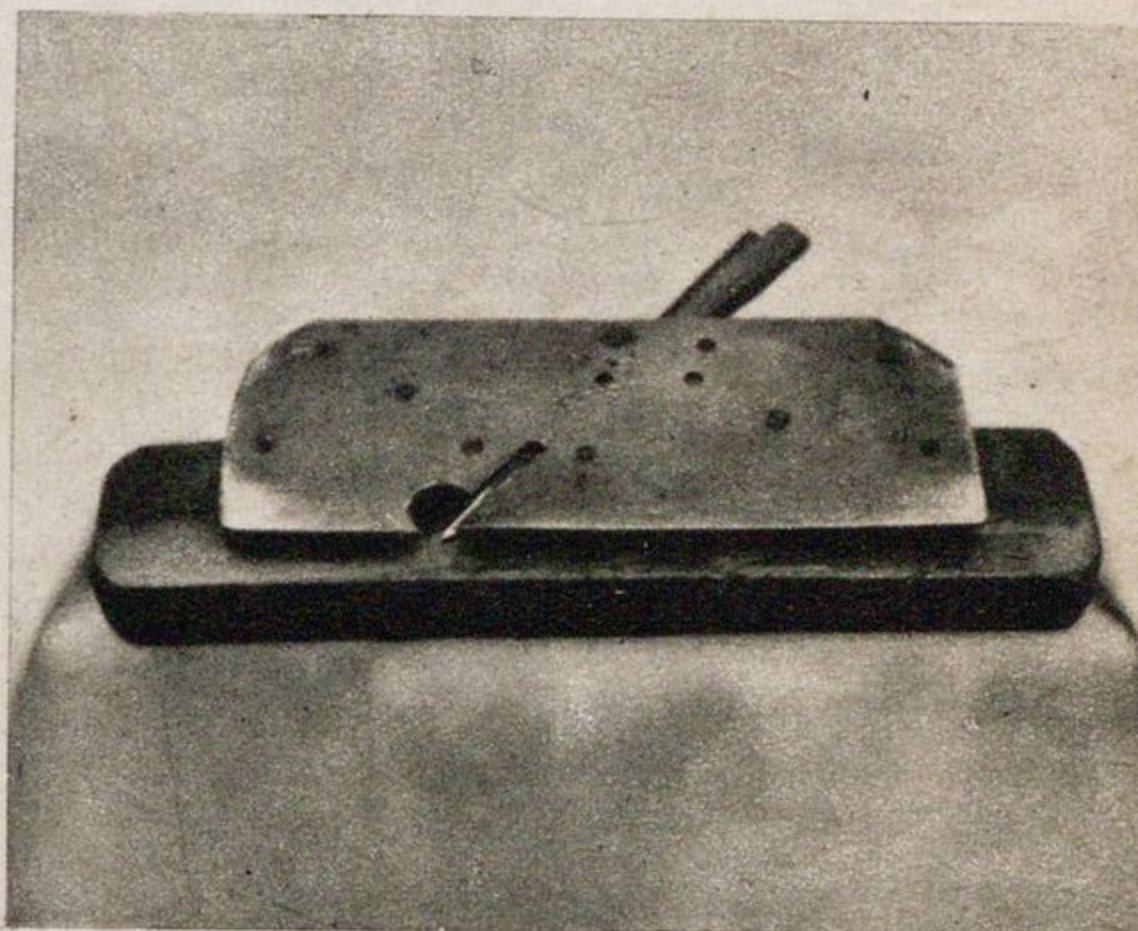
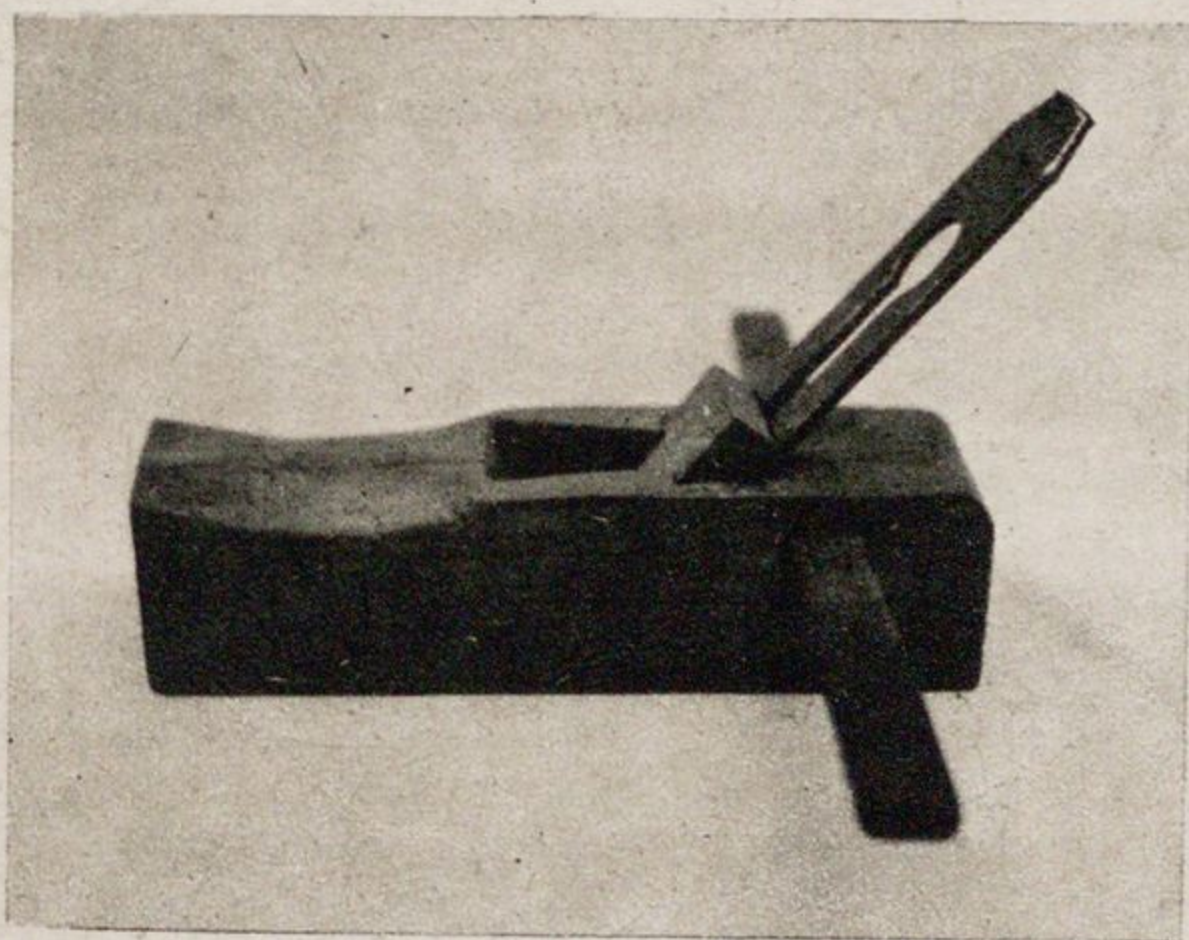
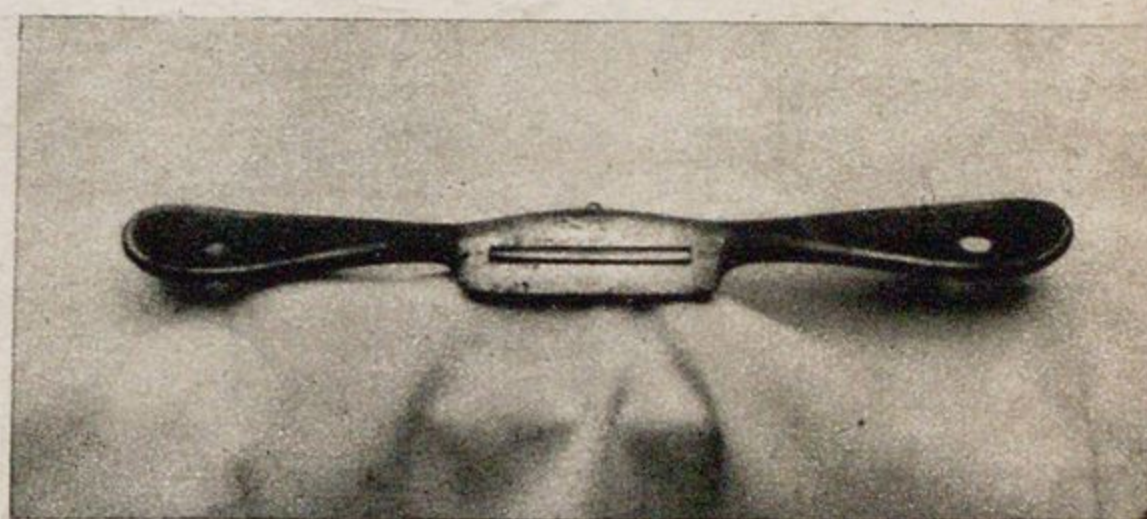
大鉋

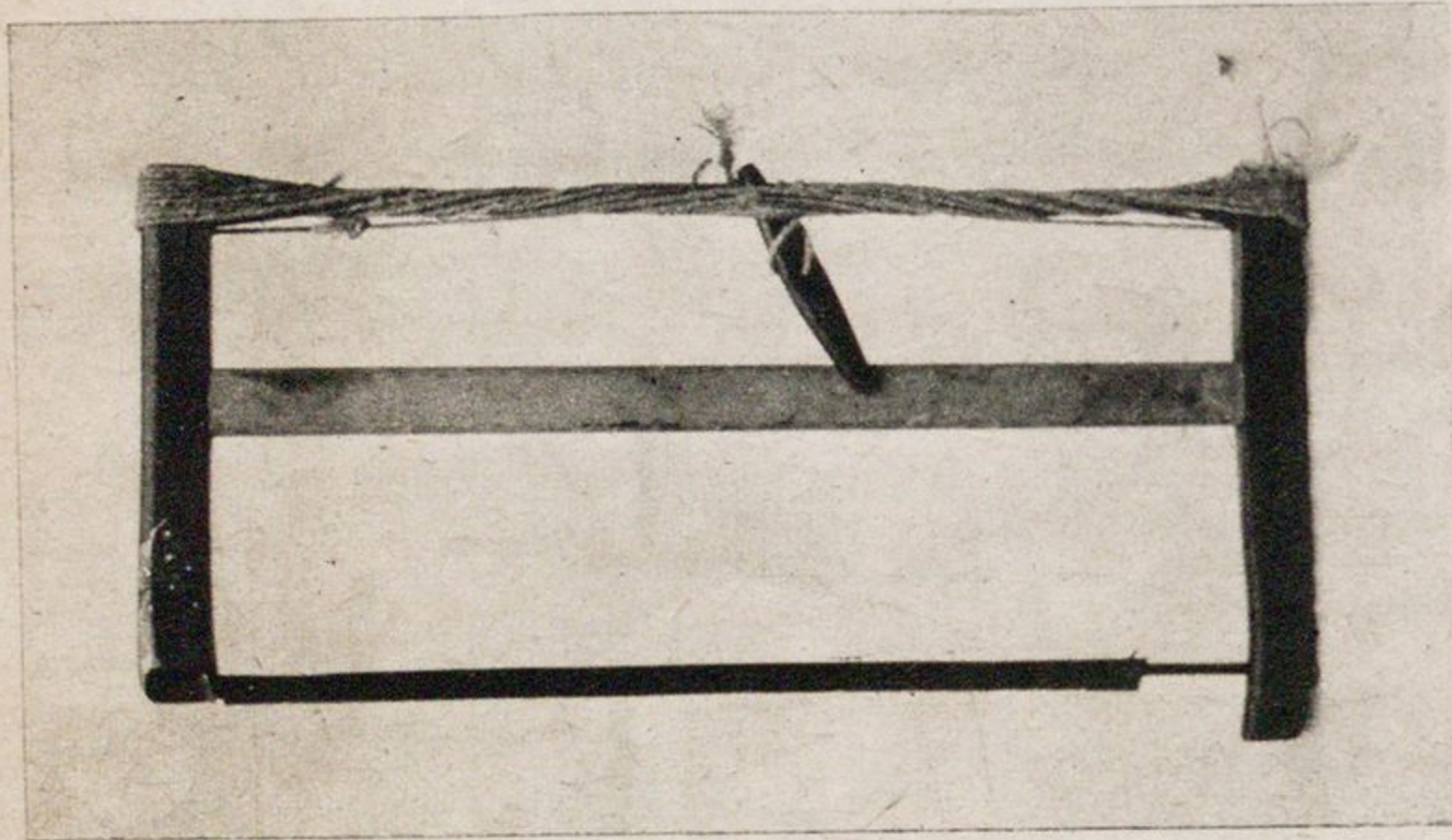
溝邊鉋

溝邊鉋

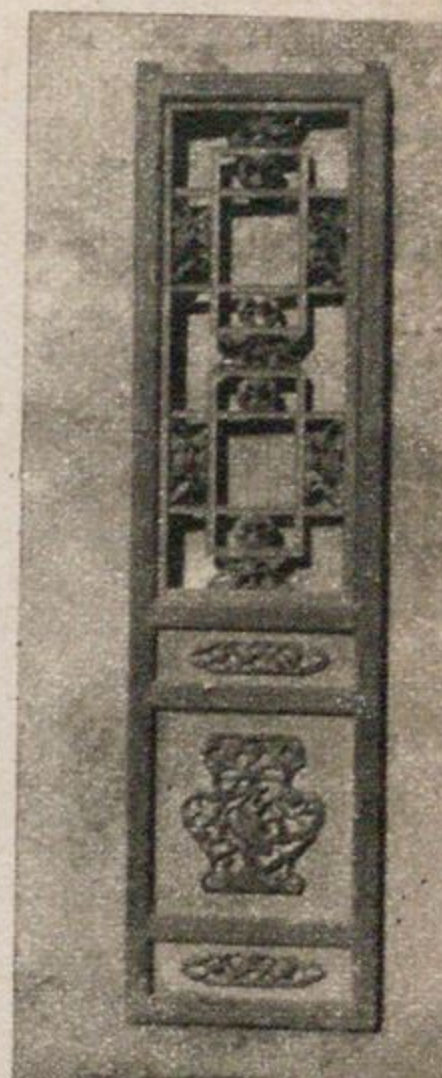
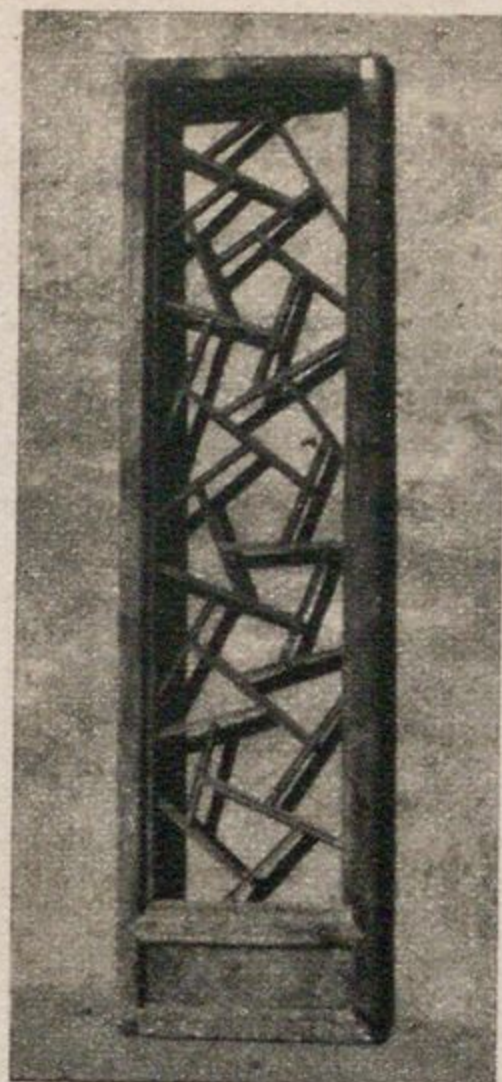
細鉋

鉋子

鏟子

木匠工具 2

鉋、「かんな」である。その原理は我國の物と異らず唯兩側に小木柄卽ち鉋把兒があつて、これを前方に推してけづるところが大いに我國と相違してゐる。形狀は、用途に從つて種々で、卽ち、線鉋、槽鉋等である。鉋の附屬物に搶、夾子、扺匙等がある。何れも鉋でけづつた後をなめらかにする小道具である

鋸、は我國のものとは甚しく異り、鋸梁と稱する木を中心として繩の捲き縮む力を利用して他端に附着せる鋸條を緊張させる。原理に於て弦鋸に近いが仲々巧に出來てゐる。大小樣々あり鋸條には木目を縱に切り割る順絲兒と木目を橫に斷ち切る橫絲兒のあることは我國と異らないが、その使用法は我國と反對に先に推すのである。但し大木を切る場合は二人で行ふ、其の鋸齒は中央を界として均齊に作られてゐる

大鋸

花　樣

門格―玄關の扉、花樣を配せるものと骨で模樣を作れる一例、窓に用ふるのを窗格といふ

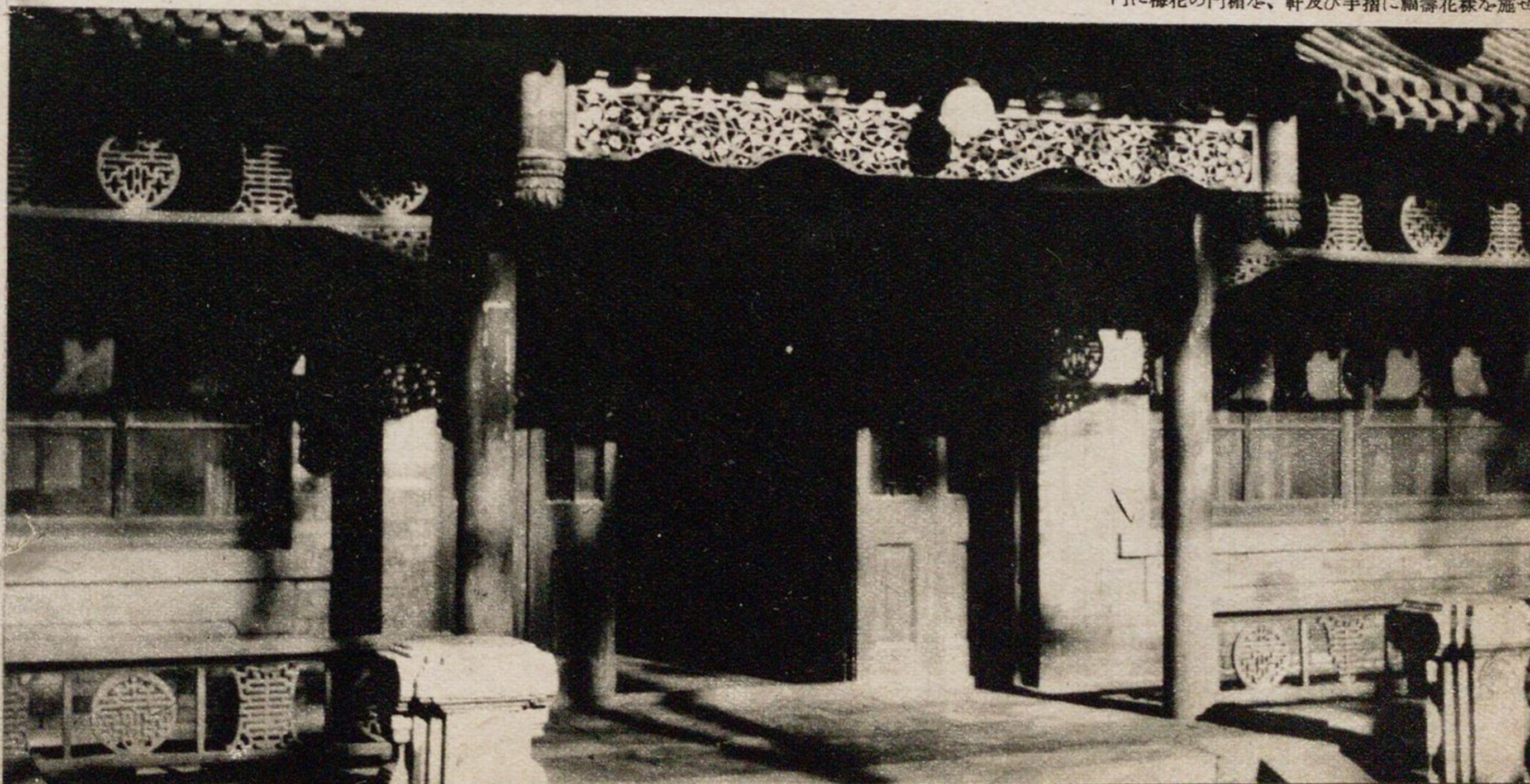
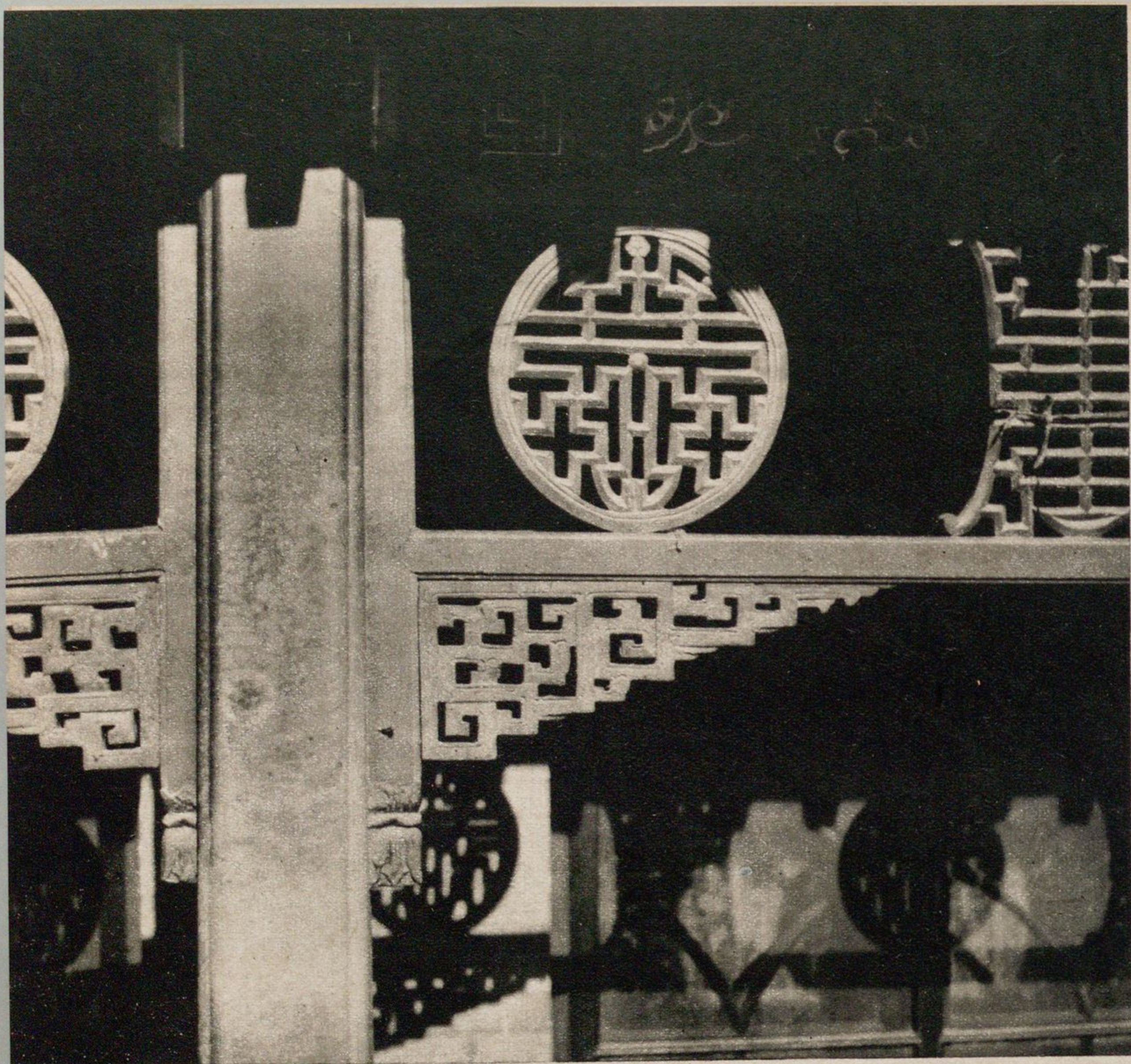
花樣とは裝飾模樣のことである。古都北京がその持つ性格の最も重要なる要素は云ふまでもなく、宮廷はじめ、清朝以來殘存する建築物である

これが旅行者のみならず、中國人にとつても大きな魅力の一つなのであるさてその建築物がかもし出してゐる支那情緒の主なものを拾つてみるなら、

門楣（門上の横はり）、匾托（額や屋號、看板等の支へ）窗格（窓や扉）等に要約することができる

門楣―宮廷では多く九龍、双鳳の模樣を用ひ、民間では梅花を用ひた

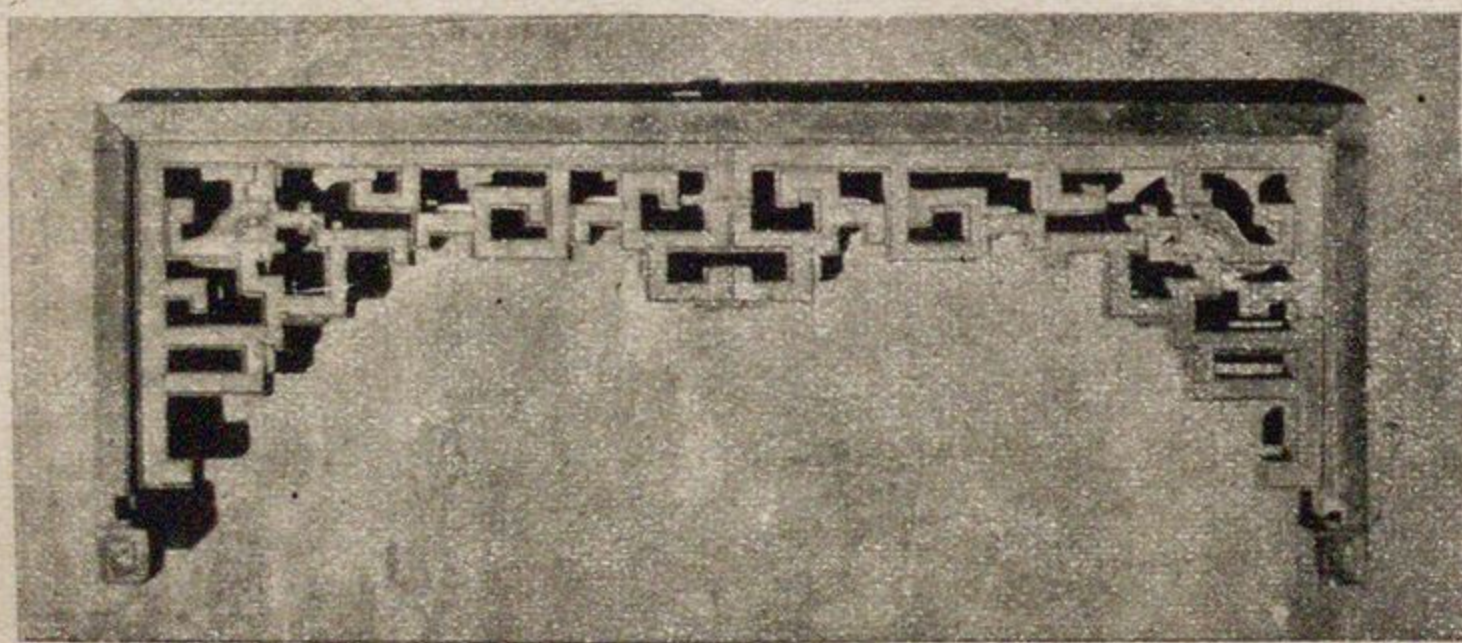
梅花の花樣

門に梅花の門楣を、軒及び手摺に福壽花樣を施せ

廊下の柱と花欅

扁托—宮廷では團龍、民間では斜卍字

窗格—宮廷ではあらゆる種類の凝つた模樣を用ひ、民間また取材豐富で意匠を凝らしたものである

宋朝の頃から宮廷造營法式といふやかましい法式などがあり、古來建築裝飾についても相當に見るべきものが有つたに相違ないが、現存するもの甚だ尠い。淸朝末には工部に雷といふ名人があり、頤園の修造にあたつては大いに用ひられたといふ

門楣

北京西城にて

缸瓦舗

雜貨攤

北京隆福寺の市の日

綿屋

（眞鍮製）金具店

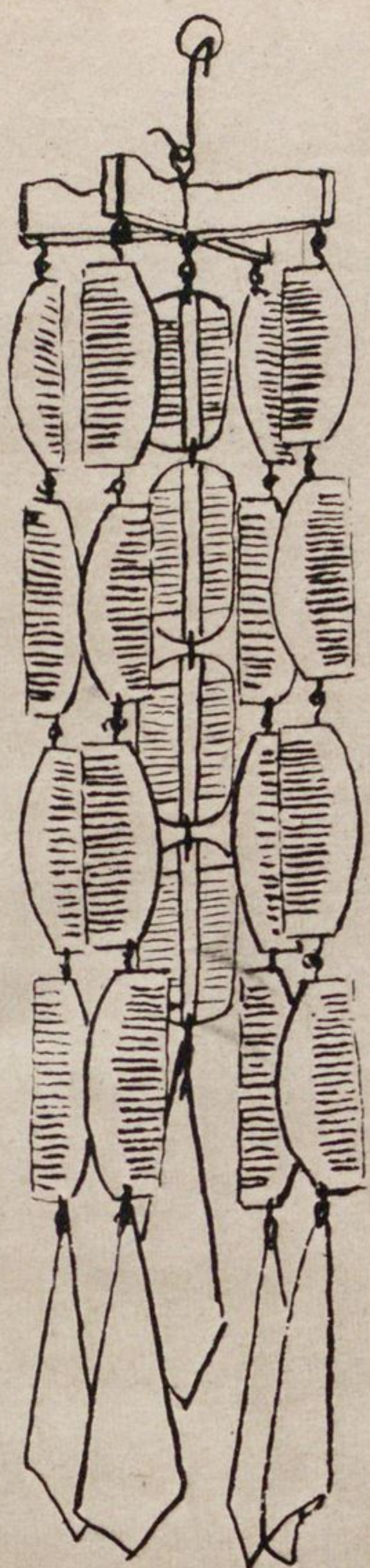
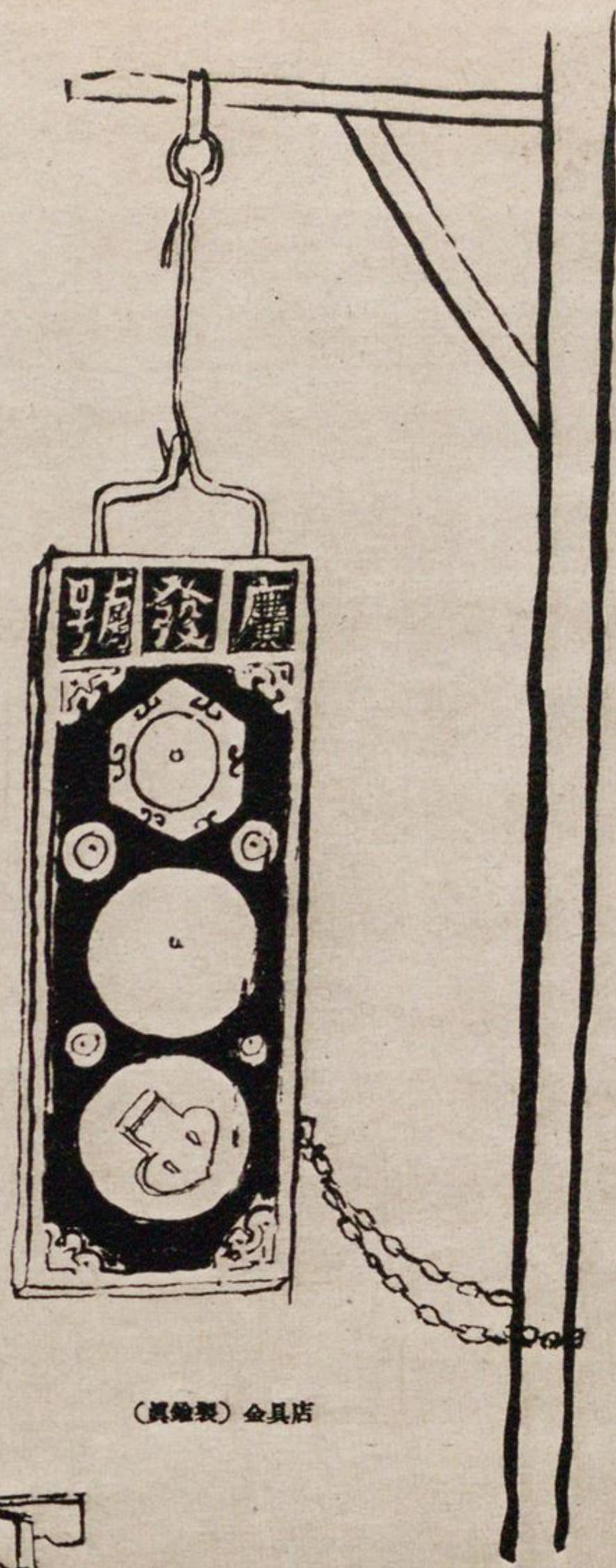
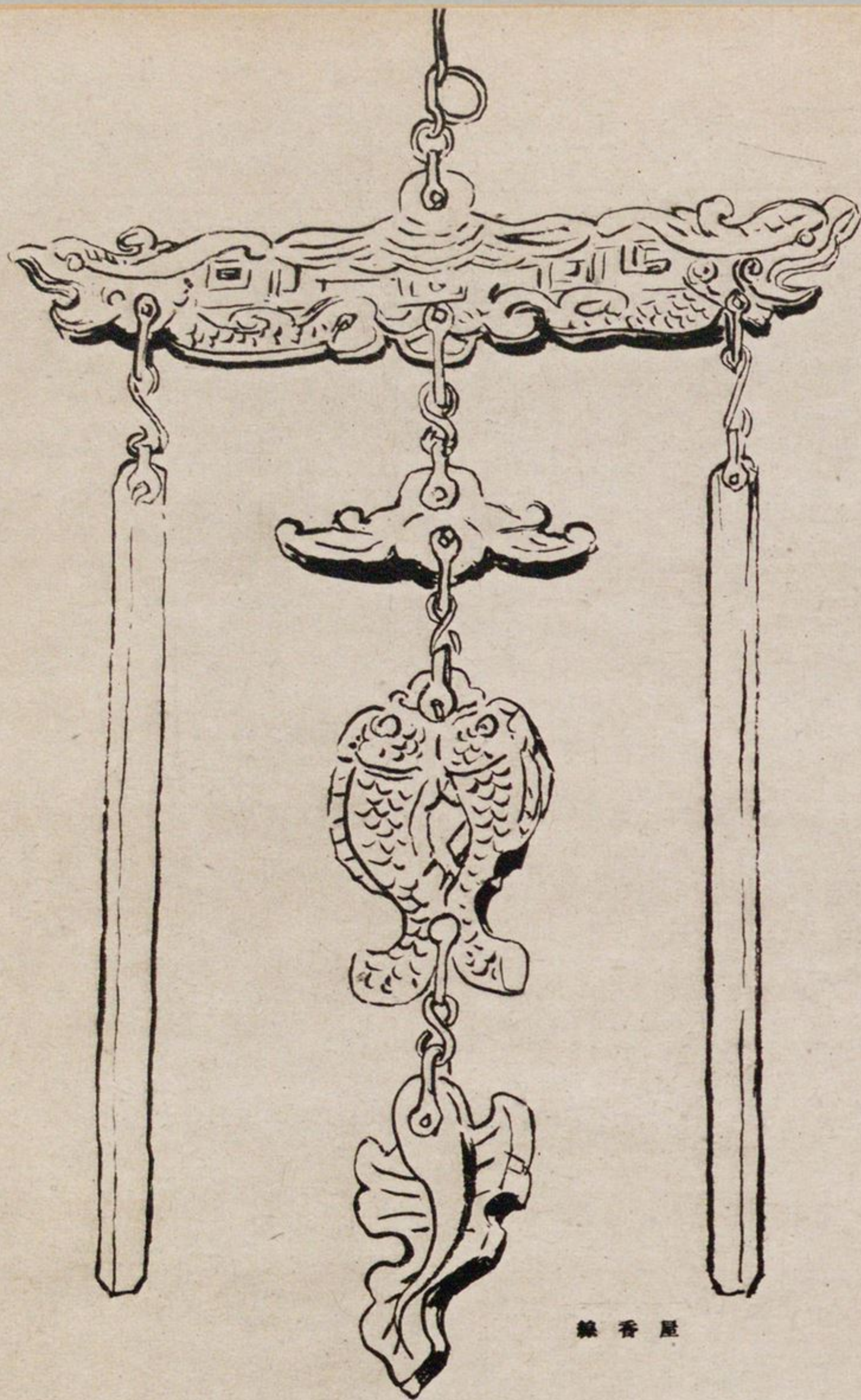
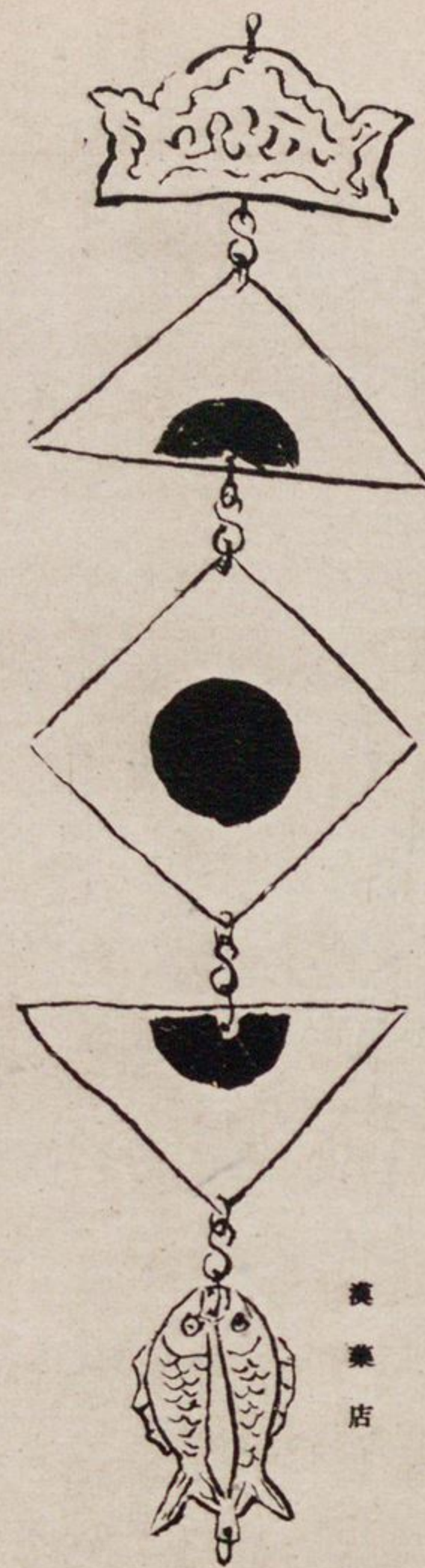
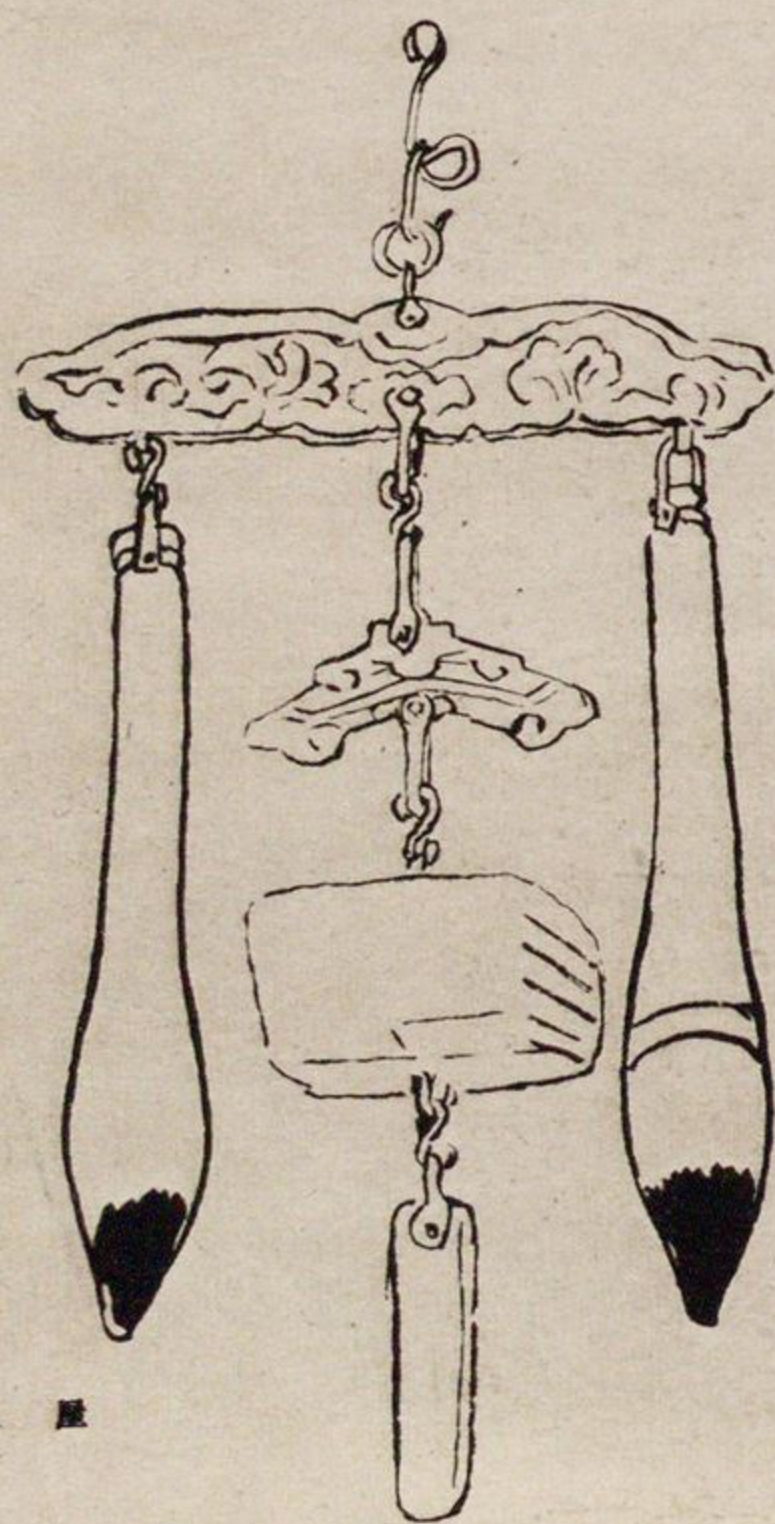
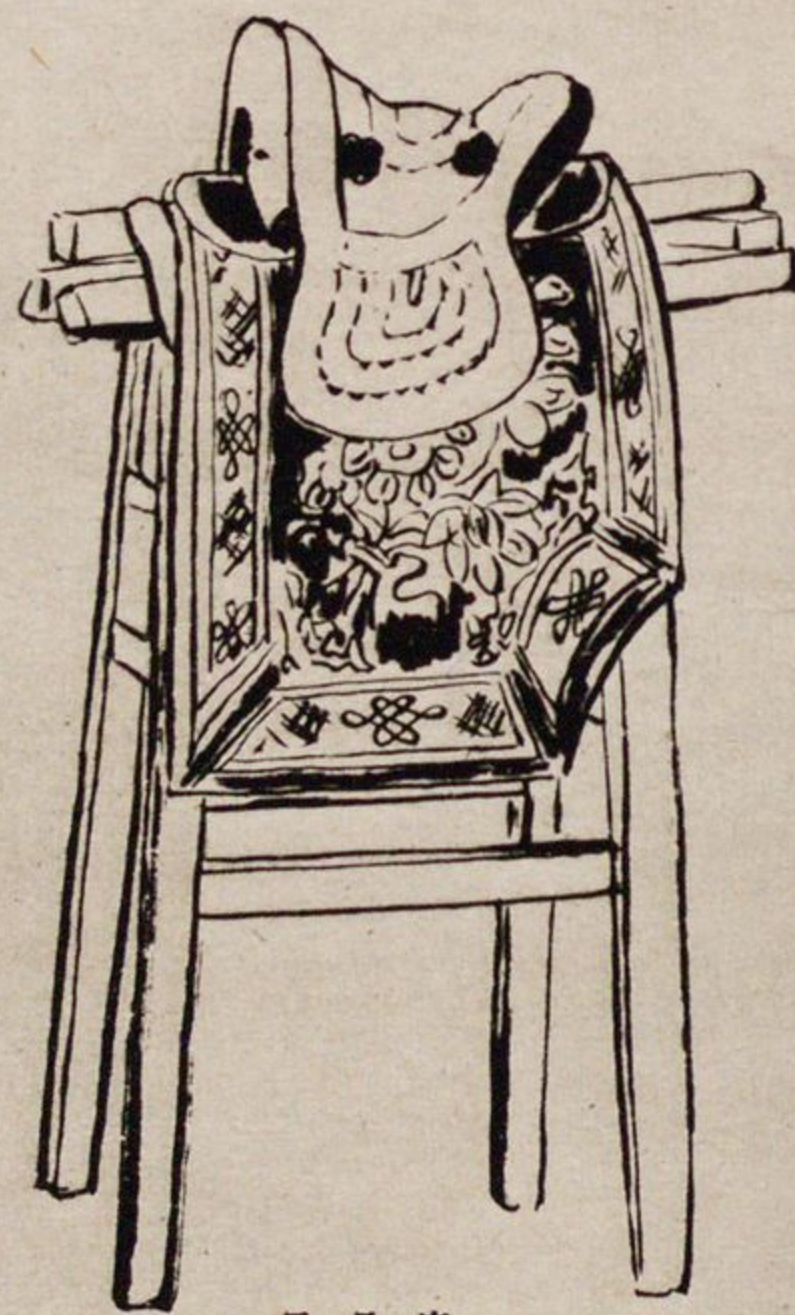
鞴屋

刄物屋

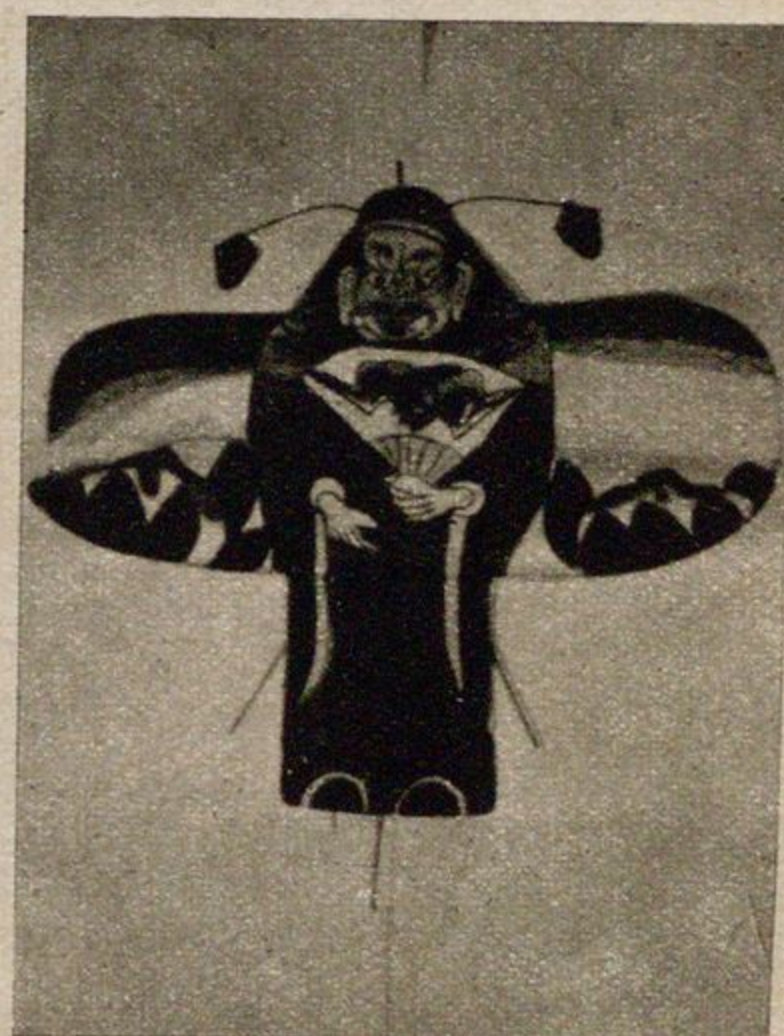
綿屋

線香屋
漢藥店
筆屋
馬具店

北京の凧うり

凧

凧は褪變色がひどいのでその生命は短い

型極めて自由で、種類多く、大小さまざまある

お粗末で無雑作につくられる不用意なものの中に、最も濃厚に民族の匂ひを感ずるものである。凧などはその尤なるものであらう

支那上代研究資料に就いて

——經典の性質と古器物研究——

池田末利

支那上代社會（今暫らく上代を先秦時代に限定する）の政治・經濟・文化・宗教等の解明は從前經典を中心とする文獻を通して主に行はれて來たかの觀がある。しかし現存の經典なるものが絕對的に信用の出來るものでないことは、淸朝考證學者に依つて行はれた經典批判の成果に徵するも明らかな事である。由來支那に於ては、漢代に儒教が國教となり、凡て社會上の規律が儒教の經典に基く事となつてから、其の經典を尊重するの餘り、其內容に疑を挿むが如きは一種の冒瀆であるとして之を禁じた爲め、經典は二千年來絕對不可侵のものとされて來た。併し淸朝以來の支那學術史上嘗て見ざる科學的な考證學の異常な發展に伴ひ、經典の內容が爬羅剔抉せらるるに及び、所謂『聖賢の書』として、多分に宗教的信仰のヴェールの下に置かれて來た經典の內容が漸く疑問視されその尊嚴性を失墜し、所謂『聖賢』の手にのみ成るに非ずして後世の筆の大いに加はつてゐる事が明らかにせられた。僞古文尙書の如きはその最も顯著なもので二千年來眞と信ぜられてゐたものが閻若璩を始め、多くの尙書經學者によつて後人の僞作なる事が精密に考證せられ、その學說は確固不動のものとなつた。しかし淸朝學者の研究も經典を總括的に、平面的に取扱つた點に於てまだ徹底を缺く嫌ひがある。卽ち彼等は彼等の眞なりと斷定した部分を再分析して此を立體的に檢討して見る事を忘れてゐたのである。言はば彼等は未だ古典成立の經過を知らなかつたのである。

凡そ何れの國の古典に於てもその凡ての部分が一人一日によつて作られたものではない。長年に亙り、多數の人の手が加はつて、一回乃至數回の結集が行はれた結果、終に今日見る如き形に作り上げられたものと考へられる。少くとも支那上代に於てはその通りである。支那に於て始めて從來の記錄の整理、卽ち結集の行はれた事の明らかなのは普通孔子の時であるとされてゐる。併し今日の尙書や詩經が孔子の整理したものであると考へるならば、それは早計である。孔子以後、孔子の學問を祖述する儒家の間に繼承せられるうちに、種々の材料が附け加へられ、又、一回乃至數回の結集が行はれた事は、此等の書物の內容を十分に吟味することに依つて明らかにする事が出來る。尙書・詩經は上代社會研究の文獻資料として第一次的のものであるが、此等も孔子以後漢初に到るまでに種々の變化を內容的に受けたもので、卽ち其處には幾多の追加が行はれてゐると見なければならぬ。今尙書に就いて見ると、淸朝尙書學者の均しく眞と認める今文尙書二十九篇中に於て、先づ周代の王室記錄とも見るべき周書に屬する各篇はその文體・內容から推して大體信ずべきものであるやうに思はれるが、最近の學者間に種々異論がある。仔細に觀察すれば、周書の終りの方の呂刑・文侯之命・秦誓等の各篇は戰國頃に夫々政治的意味から附加されたものと見るべきであり、初めの洪範篇は多分に漢代的色彩を帶びて居り、周代のものとはどうしても斷じ得ない事は明らかである。更に尙書の前部の堯典・

内容 第五巻 二月號

皐陶謨・禹貢の各篇は一讀してその文體・內容が周書のそれと同時代のものではなく、ずつと後世のものである事が分るであらう。——此處から堯・舜・禹といつた人物に就いての傳說的存在論が可能となるが今は言及しない。

殷代の事を書いた商書に屬する各篇もその文章の難澁、記事內容の素朴性等から見て堯典等よりは古いものであらうと思はれるが、やはり疑問を抱く學者も無いではない。そこで尙書中確實に信用出來る部分は、前揭諸篇を除いた十六篇位に止まることとなる。尙書は昔から最も議論の多い經典であるが、詩經其他にも多かれ少かれ、疑點を挿む餘地の存しないものは無いのである。

さり乍らそれかと云つて經典の存在を根本的に否定するのは羹に懲りて膾を吹くものであらうし、學者の取るべからざる態度であるが、上來述べる如く、古典に盛られた內容を悉く信用して、それがそのまま上代社會の事實描寫であると考へる如きは危險極まる事である。例へば、夏代の書とされてゐる甘誓篇に『五行』なる言葉が出てゐるからと云ふので夏代既に『五行說』が行はれてゐた等と說くのは時代錯誤も甚しいもので、これは寧ろ逆に甘誓篇が『五行說』の盛んであつた漢代に書かれたものである事を自ら暴露してゐるものと見るべきであると思ふ。

加之、かかる經典は、結集されて以來、傳承されて行く間に、文字の變遷或ひは政治的な意味等の爲めに、何回となく書き改められ、その間に錯誤・脫落・加添等を來して經典本來の姿態を頗る變へてゐるものである事を見逭してはならない。段玉裁の所謂『書の七厄』——尙書にとつての災厄七回——に見える唐代に衛包が改字した事などはその例である。そこで吾々は經典を構成する各篇の時代性を內容的に闡明すると同時に、篇中の各文・各句に就いてもその結集以來の形式的變化を跡づけなくてはならぬ。此の手續を怠つては上代社會の眞の姿を究める事は出來ない。

しかし、かかる準備工作の如何に面倒なものであるかは研究に携る者の均しく痛感する所であるが、それと共に文獻に由る研究が如何にも隔靴搔痒の感あり、他にもつと直接的な資料あらばと希求するものである。吾々は其處に古器物の存するを幸とするものである。經典が間接的資料であるとすれば此は直接的實物資料である點に於て多分に强味を有するものである。

古器物研究の目的が上代社會諸現象の解明にあるとする吾々にとつては、古器物の形態・資料・彩色等と云ふ外面的事象も當然上代の文化階段を示すものとして研究の對象となるが、器物に表れてゐる文字・文章は直接古代社會事實を物語るものであり、古代人の聲を傳へるものとして最も貴重な資料である。それは孔子の『文獻足らざる』歎きを補足し、經典の後世的歪曲と是正を吾々に訴へるものであつて、吾々は二千年の後に於て二千年前の世界に遊ぶ事が出來るものである。とは云ふものの玆に最も注意すべき事は何れの國に於てもさうであるが、支那に於ては古器物の僞造が殊に多いと云ふ事である。これは支那民族の保守的崇古性に由る古玩趣味に乘ずる事に歸因するものであらうが、吾々は古器物に對する動かざる眼識を以て、凡ゆる角度から、その眞僞を精密に鑑別せねばならぬ。羅福頤の三代秦漢金文著錄表に著錄されてゐる僞器の數だけでも相當多數にのぼつてゐるし、鄒安の周金文存の如き、最も僞器が多いと云はれてゐる。玆に古器物研究の準備工作が必要となるのである。

支那に於ける古器物研究は宋以前にも全然無かつた譯ではないが、纏つた研究が出たのは宋代からである。歐陽修の集古錄は、古器物研究の先驅を爲すものである。呂大臨の考古圖や王黼等が宋徽宗の命によつて作つた宣和博古圖は著錄の器物にも眞僞雜出し、辨證にも疎謬が多いし、考古學的資料としては、極めて不十分なものではあるが、兎も角先鞭をつけたものとしてその功績は偉とすべきである。其他薛尙功の歷代鐘鼎彝器欵識や王厚之の復齋鐘鼎欵識（青銅器の表面に記された文字を銘文と總稱するが、その文字の凹んだものを欵文又は陰文と云ひ、凸起したものを識文又は陽文と云ふ）等何れも初期のもの丈けに文字の模寫も精密でなく、內容にも幾多の缺點が存するが、古器物研究史上その名を沒する事は出來ないものである。

ところが元・明兩代は古器物研究に甚だ疎遠で、器物の發現を見ても注意する人が無かつた。降つて淸朝に入ると、再び勃興し、乾隆帝の敕撰になる西淸古鑑・同續鑑や寧壽鑑古——何れも當時の宮廷所藏のものを印行したものである——は未だ宋代の舊套を脫し得てゐないが考證學の發展に隨つて模寫も精密に、考證も亦一段の進步を示すに到つた。嘉慶年間の阮元の積古齋鐘鼎彝器欵識は前揭薛尙功の欵識の體

例に倣ふものであるが、兩者の間には格段の差がある。爾後呉雲の兩罍軒彝器圖釋、潘祖蔭の攀古樓彝器欵識、呉榮光の筠清館金文、呉式芬の攈古錄金文、徐同柏の從古堂欵識學等が相繼いで刊行された。けれども模寫は精密であるが、皆毛筆を用ひた爲め、稍もすれば誤謬を來す患ひ無しとしなかつたが近時寫眞術を應用するに到つて、劉心源の奇觚室吉金文述、呉大澂の愙齋集古錄、陳介祺の簠齋吉金錄、羅振玉の殷文存、鄒安の周金文存、更に欵識の集大成とも云ふべき羅振玉の三代吉金文存等皆之に據り、頗る緻密なものとなつた。

古器物學の進展につれて、從來、爾雅・説文等を中心とした文獻文字學者も次第に此方面に目を向ける樣になつた。説文學の最高峰段玉裁が僅か一個所ではあるが、金文を以て詩經の字句を解釋してゐるのは此間の消息を物語るもので『三代の彝器を研究したら、六經解釋の輔翼とする事が出來るであらう』と說いてゐるのは蓋し卓見である。相前後して莊述祖は彝器文字を利用して一つの古籀文系統を建設し、以て説文の小篆系統に替へようとして説文古籀疏證を作り、稍遲れて嚴可均は説文翼を作つて金文を以て説文を補はんとした。其他汪立名・許瀚・王筠等も皆かかる傾向を帶びた文字學者である。併し彼等の研究は未だ漢唐人の傳統的注疏觀念から脫却し得なかつた爲め結局さほどの成功を見なかつたのであるが、古器物研究發展への過渡的意義を有するものであり、その眼識は敬服に値するものである。

清末に呉大澂が彝器文字を捜佚して説文古籀補を著したが、名は説文と云ふものの內容は説文より溯つた古籀文であつて、彼の別著字說等と併せ考へて見ると、彝器研究に始めて獨自の領域を與へたものであり、近世古文字學の開祖とすべきものである。尤も彼の所說には唐蘭も指摘してゐる通り、多少行き過ぎの所もあり、此點續いて現れた孫詒讓に一籌を輸するものではあるがその爲めに彼の近代文學史上に於ける地位が動搖するものでは無論ない。

孫詒讓は古籀拾遺・古籀餘論・札迻・名原等を公にしたが、彼の方法は往時の金文學者がともすれば謎を當てる樣な極めて粗雜奔放な推測を逞しくする傾向から離脫して偏旁を分析すると云つた頗る科學的なものであつた。加へて當時既に甲骨文字が發現して居たので、彼は劉鶚の鐵雲藏龜に解釋を試みて契文擧例を著したが、此が甲骨文字解說の嚆矢である。（甲骨文字とは龜甲獸骨に契刻した文字で殷代のもの、後文に述べる）尤もその當時は甲骨の材料は餘り多く無かつたので、錯誤を免れなかつたけれども、彼の揭げた『殷周文字變遷の跡から文字の淵源を究める』と云ふ目標は一部成功を收めてゐると云へよう。これより後、説文（或は爾雅等）↓金文↓甲骨と溯つて文字の史的變遷を迹づける事が研究上の定石となつた。彼は此の研究を單に文字學の範圍にのみ止めず更に此を經典解釋に應用して浩瀚な周禮正義及び墨子間詁を出したが何れも經典解說の決定版とも稱すべく、學術史上に於ける彼の地位は唐蘭の云ふ通り正に許愼以後第一人と云ふも敢て過賞ではあるまい。

孫詒讓に繼いで清末から民國にかけて甲骨・金文の收藏に、解說に不朽の足跡を印したものは羅振玉と王國維とである。羅振玉の豐富な古器收藏と文字通り等身に及ぶその著述とには全く驚嘆の外は無い。彼の功績は金文に於けるより寧ろ殷虛書契前・後篇を中心とする甲骨の捜集・影印に存すると思はれる。が、その甲骨文字解釋に到つては好んで推測を用ひ、後來葉玉森輩の妄りに文字を說く惡例を啓いた點に於て甚だ物足りないが、此點は其の弟子の王國維の謹愼さに及ばなかつた。羅振玉の慧眼よく王國維を見出し之を指導した事に對して吾々は敬意を表するものである。

王國維は若年西洋哲學・文學・美術や、支那戲曲等を研究し造詣深かつたが、後師の勸告に從つて古器物・古史學の研究に進み、その非凡な頭腦と倦まざる努力とに依つて、快刀亂麻を斷つ如く二千年來の懸案を解決し、清朝二百年の考證學を總結束したかの觀があり、彼一人の手によつて上代社會の暗黑に黎明が齎されたとも云へるであらう。その業績は總て歿後編輯された王忠愨公遺書（最近再び商務印書館から増補出版された）に收められてゐるが、中でも殷周制度論・殷卜辭所見先公先王考・觀堂（その號）古金文考釋等は全く古今獨歩、學者の必讀の書として一唱三嘆して措かざる所である。惜しい哉、天才遂に俗に生きるを潔しとせず、昭和二年六月二日一詩を遺して頤和園昆明湖に投じて殉節した。嘗て彼は師に隨つて我京都に寓し研究に從事した事がある。羅振玉―滿洲國參議を勸め、數年前歿した―と共に古器物學界の双璧が共に我國と密接なる關係を有してゐた事は、吾々にとつて頗る興味ある事だが詳細は省略する。

光緒二十五年偶然の機會から劉鶚・王懿榮によつて發見された龜甲獸骨文（青銅器文を金文・鐘鼎文と云ふに對して、契文・甲骨文又卜（うらなひ）に用ひたところから卜辭等と云ふ）の刊行は光緒二十九年石印の劉鶚の鐵雲藏龜を以て最初とするが、其後龜版の發現、搜集せられるに及び陸續印行された。茲でも羅振玉の收藏が最も多く五萬片に及び、その殷虛書契前・後篇・殷虛書契菁華・鐵雲藏龜之餘は契文研究の底本となつた。我が林泰輔博士もその蒐集五百餘片を收めて龜甲獸骨文字二卷を出された。而して甲骨文の讀解に着手したのは前にも述べた如く、孫詒讓に始まる。續いて羅振玉の殷商貞卜文字考・殷虛書契考釋、商承祚の殷虛文字類篇・殷契佚存、王襄の簠室殷契類纂・簠室殷契徵文考釋等が現れた。尤も、甲骨文を以て殷代のものに非ずと根本的に否定する說も無い譯では無く、數年前歿した章炳麟や我國の飯島忠夫博士等がそれであるが、①發現地の殷虛と推斷して誤なく、②金文との文字上の相違、③『祖乙』と云つた具合に、十干を以て名とするもの多く、④卜法周官と異る等の諸點より考察して殷代のものと斷定された林博士の說は頗る妥當なものであると思はれるのであつて、吾々は甲骨文の記事に據つて、殷代の天文・地理・牧畜・田獵・祭祀・人倫・卜法等、相當多方面に亙る當時の社會事實を描く事が出來るものである。

民國十七年十月から二十一年十二月まで、前後七回に亙つて北京の國立中央研究院歷史語言研究所考古組が始めて目的的、組織的に殷虛を發掘した事は、支那學界としては珍らしい事で、その報告なる安陽發掘報告四册は甲骨研究に必讀のものである。

かくて甲骨學の進展は上代社會研究に一層の光明を添へ、民國以後の考古學・古史學界は俄然嘗て見ざる盛況を呈するに到つた。

而して羅振玉・王國維は依然として學界の中心であり、その正統を繼ぐ馬衡・容庚（昨年十二月まで燕京大學教授だつたが今年九月新たに北京大學教授に就任）は固より、最近活躍してゐる古器物學者にして兩氏の影響を多かれ少かれ受けてゐないものは無いと云つてもいいであらう。殊に容庚は前にも一寸觸れたが、殷契卜辭・寶蘊樓・武英殿・海外・頌齋・善齋各彝器圖錄等の外に古文字研究に關する論文も多く、羅・王二氏亡後の最近學界の柱石たるを失はない。而して、彼の金文編は彝器文字の系統的分類を試みたもので、吳大澂の說文古籀補などよりは更に正確なもので、その弟子孫海波（現在北京に居住）の同じ趣旨に基く甲骨文編と共に古文字研究者には缺くべからざるものである。

民國二十三年九月、容庚を中心に北京をはじめ、全國の考古學者に呼びかけ、古器物を『古玩趣味』から『學問の對象』に高めるべく、その科學的研究、纂輯、重要材料の流通を主旨として考古學社が組織された事は從前免角個別的斷片的になり勝ちだつた研究を體系的に纏め、學者間の密接な連絡を企圖したもので、學界の爲め誠に慶賀すべき事であつた。社員の顏觸は主なるものだけでも、魏建功・顧頡剛・羅常培・劉盼遂・楊樹達・周進・于省吾・唐蘭・張世祿・商承祚・趙萬里（現北京圖書館善本組主任）沈兼士（現輔仁大學教授）孫海波・關百益・胡樸安・徐仲舒・董作賓・聞宥・聞一多・鮑鼎等々殆ど全國の考古學者・文字學者乃至經學者を網羅したもので正に嘗て見ざる偉觀であつた。その業績は社刊『考古』一——六期によつて窺ふ事が出來るが、又多數の社員の著作を刊行してゐる。前に記した容庚著作中の一部や孫海波の吉文聲系・甲骨文編、王辰の續殷文存、商承祚の十二家吉金圖錄・殷契佚存、于省吾の雙劍誃吉金圖錄及び吉金文選、邵子風の甲骨書錄解題等はその主なるものである。

以上甲骨・金文を中心として古器物研究を史的に極く簡單に述べたが、要するに此方面の研究が清朝經學の影響による經典依存主義から脫胎して、漸く古器學獨自の立場を開拓し、且つ古器物を通した經典批判主義へと進展し漢唐人の繁煩經學を打破して經典そのものの可能根據を突かんとする傾向にある事は極めて注目すべき事である。併し乍ら、研究の時日猶淺く、又研究對象の古いものであるが爲めに、未解決の問題が多く、甲論乙駁歸する所を知らざる現況であつて今後の努力に俟つべき所が多い。

附言　一般古器物資料は此等より古くアンダーソン博士等の甘肅考古記等に記されてゐるもの等、又新しくは泉幣・璽印・兵器・權量・陶器・石刻等があるが、殷・周代よりは概して外れるものであるから省略した。又古器物學と古文字學とは現在では各領域を異にするが、茲では便宜上同範圍のものとして取扱つた事を斷つて置く。

（筆者は北京外國語學校講師）

山東、山西に於ける佛教史蹟

道端良秀

支那に來て誰でもすぐ目につくことは、畠の中に所きらはず立て並べてある墓碑と、その土饅頭、その他の墓の多いことと、各村々に一際目立つて建つ大きな寺廟のあることとである。

支那は、日本と共に矢張り佛教國である。現今の佛教が非常に形體の異つたものになつてゐるとは云へ、矢張り佛教であるのである。八割が佛教徒なりと云つてゐるのも、別に誇張ではないだらう。

今日の廟そのものは、關帝廟とか、娘々廟とか、觀音廟とか、泰山廟とか八蜡廟とか種々雜多なもので、道教的色彩の多いものであるが、その根底をなすものは、善因善果、惡因惡果の因果應報思想三世に亙る輪廻轉生の思想で、これ全く佛教の因果思想を取り入れてゐるものである。

民國になつてから新生活運動による迷信打破の餘波を受けて、廢佛毀釋的な事件が起り、廟は多く學校となり、役所となり、兵舍となつたが、二千有餘年に亙る佛教の傳統の力は恐ろしいもので、內心深くこの思想は入り込んでゐて、平面壓迫を受ければ、そのまま壓迫されてはゐるが、彼等民衆の佛教に對する信仰は何ら忘れ去られたのではない。

例へば昨秋、即ち昭和十七年九月から十月にかけて凡そ四十日間、北京市廣濟寺に行はれた圓瑛法師の阿彌陀經の講經に際して、日々千有餘人の大衆が集まつたと云ふことは、この事を有力に物語つてゐるものである。然かもその聽衆は決して、日本の田舍寺院に於けるが如き、老人のみの相手ではなく、潑剌たる青年男女を初めとして、あらゆる階級を集めてゐる事である。而も四十日間、熱心に肅然としてこの相當難かしい講經を、二時間もの間靜肅に聞いてゐることである。

全く支那は佛教國なのである。荒れ果てた伽藍のみを見て、支那の佛教は語るに足らずと一蹴し去る人が若しあるとすれば、ここに更に再考すべき事例を示して居るものと云ふことが出來る。

このやうに、支那は正しく佛教國なりと云ふべきである。二千有餘年の父祖傳來の永き歴史が、またこの事を有力に物語つてゐるものである。

佛教の史蹟は、かかる意味に於て、今日吾々に重大な役割を示してゐるものである。一體、史蹟調査と云ふが如き、或は古蹟古物研究と云ふが如きものは、全く閑人のひまつぶしの如く考へられ、不急不用のものと考へられ勝ちのものであるが、これこそ大なる誤りであつて、大東亞建設に際して、文化戰、思想戰が如何に重大なるか、多言を要する迄もない。從つて、これが根底をなす過去の史蹟遺物の調査とか研究とか、巡禮とか云ふ事が、如何なる役割を持つてゐるものかは、ここに喋々する迄もないことである。

過去の遺蹟は、單なる死物ではなく脈々たる生ける活動體である。文化の遺蹟は、過去の文化を知らせると共に今日の吾々の生活に對する指導となり將來の生活に對する重要なる參考となり、指導方針たり得るものである。かかる意味に於て、過去の文化史蹟を尋ねることは、頗る重大なる意義を持つものと云はねばならない。

今、ここに述べんとする佛教の史蹟も亦、このやうな意味の下に、支那に於ける過去の輝かしき佛教文化の跡を尋ねて、これを現實の問題とし、將來への指導精神たらしめんとするものである。

尙、北支に於ける佛教の史蹟は頗る多い。今ここに各箇に詳述することは許されないが故に、私が昭和十六年の秋から、昨年の秋迄凡そ一個年間に亙つて山東、山西の各地を調査した範圍を中心として、その內主な史蹟を述べることとしよう。

それには先づ北支に於ける全般的な佛教史概觀と云ふやうなものを、一應頭に入れて置くことが、最も便利であらうし、理解し易いと思はれるから、總說として佛教史概說を述べ、次に各說として、山東省、山西省の史蹟を述べることとする。

華北に於ける佛教史概觀

支那に佛教が傳來されたのは凡そ二千年前のことで、前漢の時代である。然かもそれは洛陽、長安を中心とした地方であつて、都を遠く離れた地方はずうつとそれ以後の事である。然しこの頃、今の徐州を中心とした地方にも相當佛教が盛んに行はれてゐたことが

文獻に出てゐる。

が、然し今の北支全般に亙つて、佛教の流布を見たのは何と云つても、北支を統一した北魏からである。

勿論、三國時代に北は魏の天下になつて、佛教僧侶も出で來り、譯經も澤山出來たし、次の西晋東晋時代、特に北支全體が異民族の手に渡つた東晋時代、即ち五胡十六國時代には、一世に冠たる多くの高僧もあつた爲に、佛教の勃興は實に、すばらしいものがあつた。例へば北支を統一した後趙には、佛圖澄が居り、前秦には釋道安が居り後秦には羅什、僧朗が居る。各〻教團を持つて佛教の宣布に努力したから、その勢は非常なものであつた。

この中、佛圖澄は鄴、即ち今の彰德附近の都に在つて活躍し、道安、僧朗等の有名なる弟子を養成した。道安は北支河北省の生れであり、僧朗は泰山を中心として教線を張つたもので、山東佛教の開祖とも稱せられてゐる人である。現在神通寺は彼の所住寺院であり、靈巖寺は說法の地で、當時の朗公塔や、その他の遺蹟がある。

又、この時代即ち五胡十六國時代、南方は東晋であるが、この北方後秦の羅什や僧朗に對して、南方佛教の中心をなした彼の有名な廬山の慧遠は、これまた、山西省の崞縣に生れた人である。從つて北支の佛教は正しくこの五胡十六國時代、即ち東晋時代からと云ふべきである。

然し、この時代は都は洛陽、長安であつたが、次の時代、北魏が北支を統一して南方宋と對立した南北朝と云はれる時代に入ると、佛教も急激な發展を遂げて、民衆深く、北支全般に浸潤して行つた。それは北魏の都が今の大同に在つて、ここに華々しい佛教文化を展開せしめたからである。

彼の世界的な雲岡の大石窟佛は餘りにも有名である。この他特に山西省にはこの時代の遺物が非常に多い。北魏は後には大同から洛陽に都を遷したが文化政策、特に佛教による文化政策に力を盡したがために、北魏の佛教は、正しく旭日昇天と云ふべきであつた。

支那佛教史の上に於て、唐代がその黃金期と云はれるが、然しその熱と力と迫力とは、唐代を遙かに越ゆるものがあると云つてよい。それ程北魏佛教は華々しいものであつた。

北魏は凡そ百年間、次に東魏、西魏北齊、北周と、凡そ五十年程續いて次の隋の統一となるが、北齊は山西省太原がその發祥の地であり、その首都を今の彰德附近に定めたがために、且つ北齊文宣帝の佛教保護政策のために、佛教の隆盛、また見るべきものがあつた。

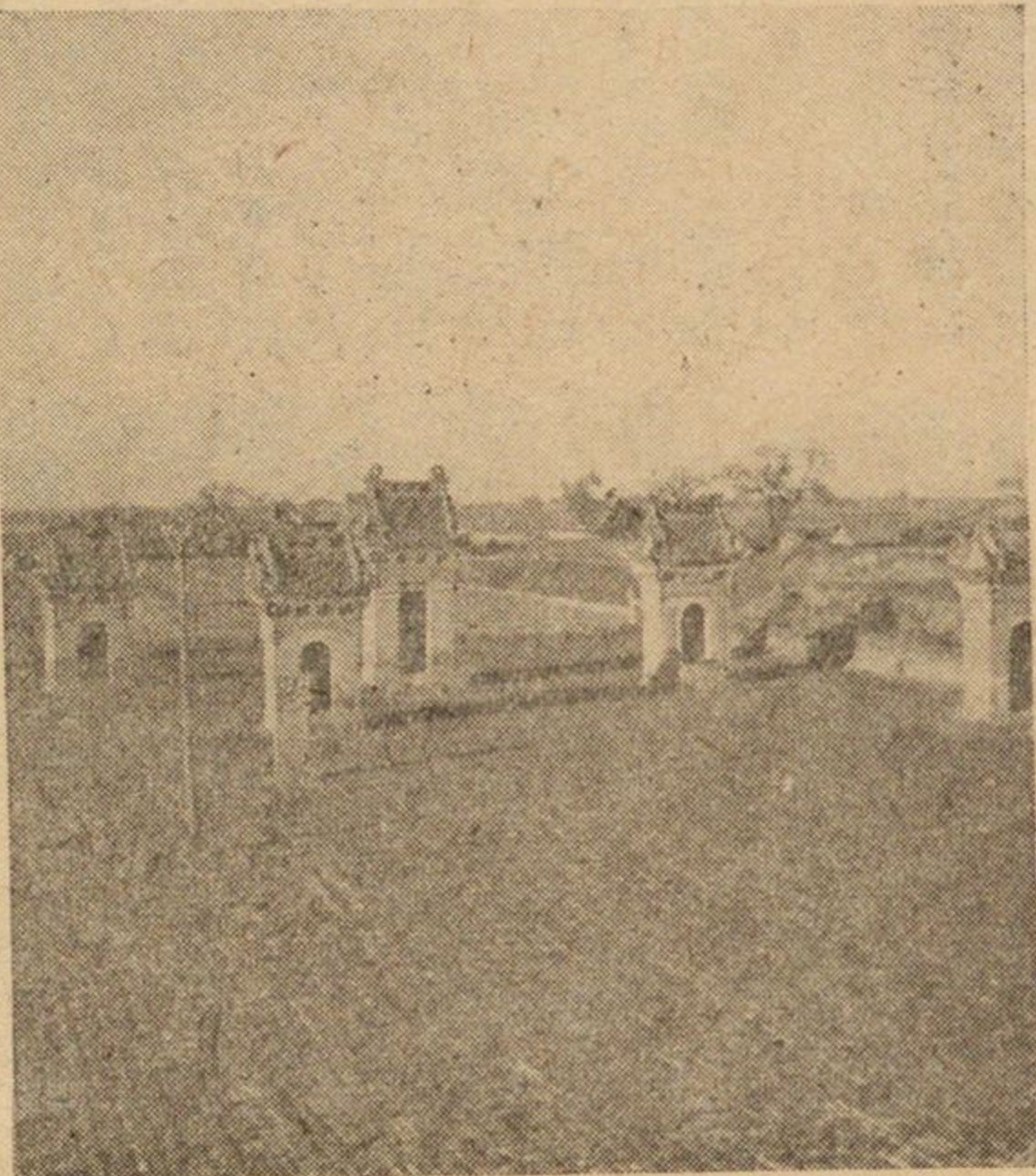
文宣帝の佛教信仰は、南方梁の武帝と相對するものであり、後の淸朝雍正帝と共に、支那歷代帝王中、稀に見るものがある。當時の僧界の長官たる高僧法上に對して、信者が釋尊に對する最上の敬禮たる布髮の禮、即ち濕地に己の頭髮を布いて、それを踏んで遊行されたと云ふ古事より來た、最大の禮を、文宣帝は行つてゐるのである。この一事が佛教に對する帝の態度をよく物語つてゐると思ふ。

現在、特に山西省、河南部に多くの佛教遺蹟を殘してゐるのは當然で、この時代の石佛が續々と發見されつつある。今回の調査だけでも、山西省に於て相當多くの、この時代の石佛群を發見するを得た。この北齊の石佛は、北魏とは又異つた形式を備へたもので、北齊獨特の藝術を形成してゐる。これは僅か暫くの歲月でしかなかつた北齊としては、實に驚くべきことである。北齊佛教文化と云ふものは充分研究さるべきものである。

北齊は、北周に亡ぼされて、ここに北支は北周武帝の廢佛事件に遭遇することとなつた。一體佛教の遺蹟中には

廢佛事件に關聯して居るものが頗る多い。彼の大同の大石佛は、北魏武帝の廢佛の後を受けて、その滅罪のためと佛法護持のためとに起されたものであり、また支那に於ける第一の石經たる房山の石經事業とか、寶山の石佛とかは、かかる廢佛に備へて佛法の永遠に傳はらんことを念願したものに他ならないのである。

大體に於て石佛とか石經とか云ふものは、他にもその理由はあるが、その根本的なものは、佛法を永く後世に傳へたいと云ふ念願からで、廢佛に遭つても容易に破却されない石を選んだものである。鄒縣にある鐵山、岡山、尖山、葛山、嶧山等の磨崖石經は、何れもこの北周廢佛の前後に於てなつたもので、護法運動の一つの現れである。

隋が天下を統一して、廢佛後の復興運動に力を盡し、特に佛教による國家統治策を立て、天下各州の舍利塔を建てて、精神文化の中心たらしめた。これは仁壽年間に建てられたので、普通隋の仁壽塔と稱せられてゐるが、北支の各地にこの塔と稱するものがある。勿論それは後代に重建せられたものであるが、その遺蹟に間違ひはない。

山東、山西地方の墓地

唐三百年は、支那文化の黄金期であり、佛教の全盛時代で、從つてその遺蹟は頗る多い。特に山西省太原は唐朝發祥の地であるがために、山西省と唐とは密接な關係にある。彼の女帝にして名高い則天武后は、汶水縣の生れであり、また楊貴妃は蒲州の生れと云はれてゐる。愈〻山西省は唐と緣が深く太原即ち今の晉泉縣は、當時長安、洛陽と共に、天下の三都として重要視され、太原の北京北都は、唐代文化の中心をなしてゐたものであつた。

從つて、北都太原を中心としての佛教も頗る盛んで、今日に於ても石壁山玄中寺や、風洞の華嚴經の石經、さては天龍山の石佛など、當時の華やかな佛教を物語る貴重な遺蹟が頗る多い。

又、五臺山佛教は、この時代より急速の發展を遂げ、世界の佛教信仰の中心地として、遠く諸外國よりも陸續として參拜者を出した程であつた。我が叡山の慈覺大師圓仁の詳細なる參拜旅行記が殘つて居て、當時の北支佛教の情勢を知ることが出來る。

五代は戰亂の巷で何ら佛教として見るべきものなく、次の宋代に於て唐代佛教の再現に努めた跡が見える。然もこの時代からは餘り石窟造像と云ふことをしなくなつた爲に、北魏、北齊或は唐代の遺蹟としての石佛に對して宋代の石佛は頗る寥々たるものであると云はれてゐる。然しそれでも今回山西省や山東省に於て頗る立派な宋代の石窟佛を發見した。これによつてもこの時代尚前代の遺風を繼いで、石窟造營が行はれたことを物語つてゐる。又この時代の佛塔や鐘などが殘つてゐる。

この時代に今の北京、大同は既に滿洲方面に興つた遼の領土となつてゐたし、やがて遼を亡ぼして興つた金の國家によつて北支那は全部支配さるることになつた。宋は南方に遁れて杭州を都として謂ゆる南宋を建てた。この金の支配下に於ける北支は、佛敎による統治策を取れるために、寺院の創立、增營、佛塔の建立など、目覺しいものがあつた。現在大同華嚴寺に殘るこの時代の建築、更に各地に天空高く聳ゆる佛塔、或は大鐘等に、この時代のものが頗る多い。而も想像以上の立派な文化を持つてゐたことを、かかる遺蹟の上から知ることが出來る。

次の蒙古民族、元の國家は、東洋民族として、これ以上の大帝國を打立てたことがないと云はれる程の、歐亞に亙る大國家を建立し、佛敎の一派たる喇嘛敎を國敎と云はれる程に保護奬勵した。北京を大都として、ここに中心を置いたために北支が文化の中心となつた。從つて佛敎も亦これを中心としたが、この時代の喇嘛敎の遺蹟は餘りない。然し、各地の古刹に殘る成吉思汗配下の寺領保護制旨の碑は、元の宗敎政策を物語つてゐるものである。

次の明朝三百年、淸朝凡そ三百年は何れも北京を首都とせるもので、北支の文化が如何なるものか、北支の佛敎が如何なる狀態に置かれたかは、大體想像することが出來よう。

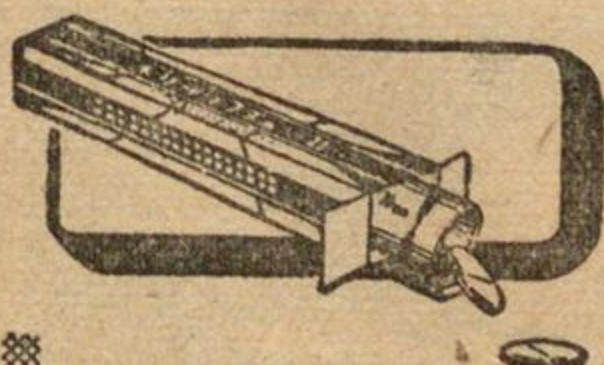
明朝に於ける佛敎が、異常なる發展復興の氣運を示して、袾宏、智旭、德淸などの高僧を輩出して、敎學の發展見るべきものがあるが、現存する遺物に於ても亦、頗るその氣運を感ずるものが多い。

淸朝の對漢人政策には、佛敎による文化政策が大なる役割を持つてゐると見てよい。現在如何なる小さな支庙と云つても、康熙、乾隆以後の重修碑のない處はない。寺廟の修復には非常な努力を拂つたやうである。然し乍ら、全般から見て、次第に佛敎の低調を來し、單なる形骸の宗敎と墮して行つたことは、何人と雖も否定し去ることは出來ない。

かくして、中華民國となつたが、革命の新文化運動の餘波として、廢佛毀釋の如き事件が起つて居る。それは民國十七、八年の事であるが、迷信打破として、從來の城煌庙を初め、もろもろの雜多な廟を打ち毀し、これを學校或は官衙とし、或は兵營や訓練所に當てたのである。今日多くの寺廟が、かかる方面に使用されてゐるのは、この時からである。この時に迷信ならざる立派な寺も亦、この厄を蒙つたものが多かつた。更に、孔子を祀る縣城內の文廟さへも破却さるると云ふ、厄を蒙つたところもあつたやうである。

かくして、この事變へと進展して行つたのであるが、現在偶〻皇軍が駐してゐる寺廟の多くは前述の民國に於ける寺廟破却の際に於て、既に學校となり又は兵舍となつたところのものである。

皇軍に於ては、却つて寺廟保護を宣言し、古蹟保存に力を盡し、寺廟の復興に餘力を割いてゐる程である。五臺山の佛敎の復興とか、大同の石佛保護とか、小さくは潞安に於ける廣胤庙の修復とかは、僅かにその一例である。

（未完）（筆者・大谷大學敎授）

蝗

倉田勇治

古來、支那では蝗の被害は水害、旱害と共に三大災害と稱せられ、過去幾千年の間に何千回の蝗の發生が繰返され、幾多の悲劇の原因をなしてゐる。

比較的近年に於ける大發生は、民國二十二年（昭和八年）より二十四年に至る三個年連續發生であつて、その地域は支那全平野に渉つてゐる。その他の年も蝗の發生は、絶無の譯ではないが比較的局部發生で終つてゐるのである。

北支では、時恰も食糧增産に官民一致大童の奮闘を續けてゐるところへ突如、河南省豫東道管内に蝗の大發生が傳へられ、業務擔當者を驚倒せしめ、その被害面積は漸次擴大の一路を辿つてゐる。開封附近に發生した蝗について見るに、昨春五月二十日頃、新黃河沿岸開封縣下の朱仙鎭に第一回の蝗の發生を見た。此の蝗の卵は一昨年民權縣内の荒蕪地に發生し、開封市上空を南西に向け飛んだものであるらしい。

尤も、開封附近の農民に云はせると「魚子變蝗」と稱して、魚類の卵が蝗になると信じてゐる。これは、古代の「蝦子變蝗」と同一思想に基づくものである。また今日河南の農民中には蝗を以て「神の蟲」と崇め、香をたき拜禮してゐるものが少くない。勿論かうした農民は蝗を殺すことを罪惡視してゐる。

酷暑の下、孜々として勵み、育て、今一歩で收穫の時期に達した粟、黍、或は豆類に至る迄、蝗群に一葉を殘さず喰ひ盡されても、これ神の我に下せし鞭なりとして甘受してゐる。其のやうな支那人ならではの感深きものがある。然し一面かうしたことこそ毎年、何處かで蝗害の發生する主因でもある。

昨年第一回に發生した蝗は、發生地附近で成蟲となり産卵した。その卵が七月二十日頃になり孵化を初め、漸次異動し始めた。その進路は明確でないが、大體三方面に進んだものと見られてゐる。一は進路を北にとつて開封市方面へ、一は進路を東北にとつて陳留縣へ、一は新黃河沿ひに北上して中牟縣へ出てゐるらしい。

蝗賣り

農民の敵——蝗も一方では中國人の蛋白質供給源として、食糧問題の解決に役立つてゐるから皮肉である。

*

幼齢時より行動を開始した幼蟲（支那では蝻と呼んでゐる）群は、途中大豆畑の中或は樹木の下等の日蔭を選んで脱皮しながら進んで來て、開封附近

に到着した時は既に三回の脱皮を終つたものであつた。

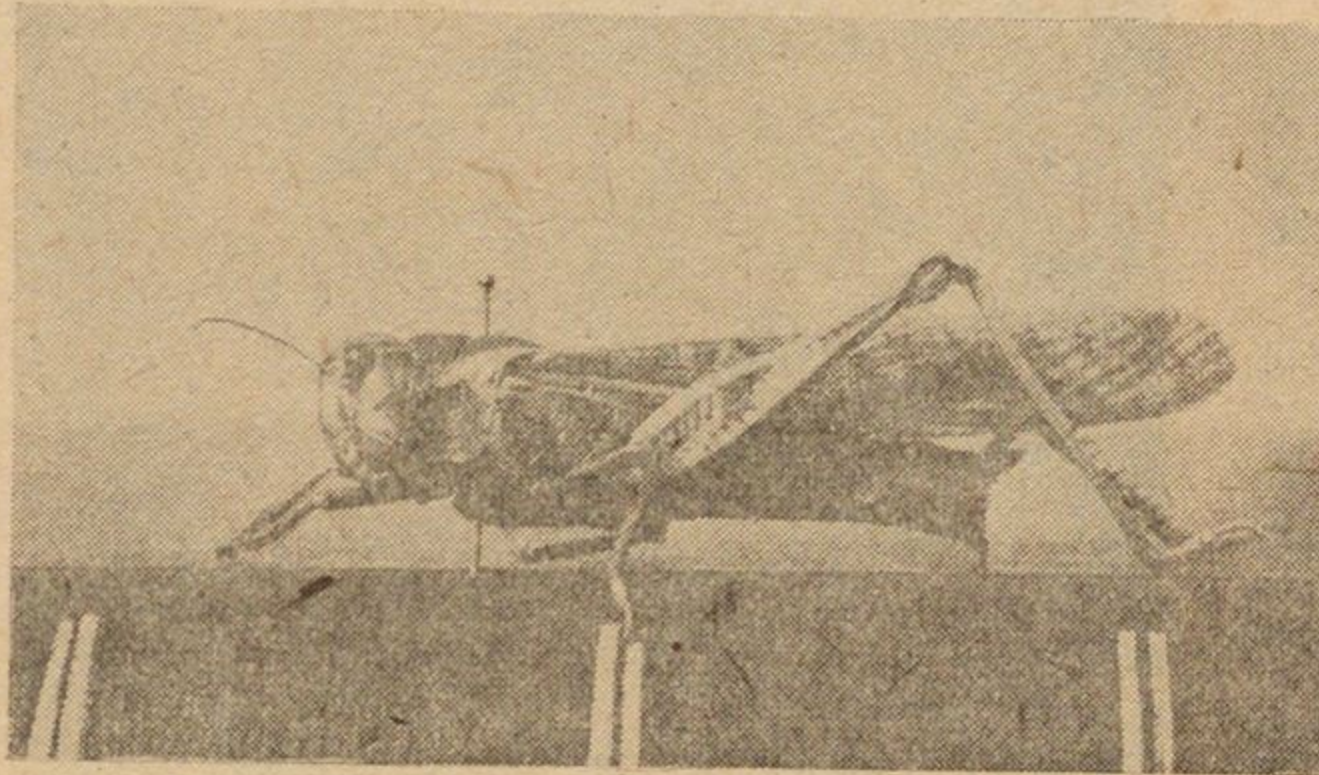
開封に到着した蝗群は、省城内の見物をしたいにも城壁が幼蟲の力では乘り越せない。止むを得ず城壁に沿ひ西と東とに分れて進んだ。

＊

此の樣に行動してゐる蝗の群の大きさはと、試みに開封を東へ進んだ群を見ると、幅約三、四粁、最前線を進むものと最後尾との距離はまた四、五粁に及んでゐる。彼等には常に先頭に進むリーダー格のものがあつて、此のリーダーの進む方向に常に前進する。一匹と雖も逆に進むものはない。實に統率のとれた大軍である。數は勿論千や萬ではない、此の群の數を數へたら億以上であらう。

蝗は元來禾本科植物を好食する昆蟲であるが、此の大群の通過した跡は總ての作物が荒されてゐる。作物許りではない。適當な餌がなければ樹木の葉まで喰害する。作物を喰害するのは午前中と夕方近くが主で、日中は暑さが強く活動もあまり活潑でない。一本の粟に何十の蝗がとまり喰ふ樣は、蝗の實つた形といふか、そのすさまじい樣は到底拙いペンでは表現出來ない。

喰ふには彼等は頑丈な歯を持つてゐる。恰も蠶の桑葉を喰ふ如くサクサクと音をたてて喰ふ樣は、實に壯觀である。

一群が一圃場に入ると、一時間餘りで立つてゐるのは地上一尺許りの莖のみ。老婆は泣き、百姓は默然としてただこれを見守る。他人の門前の雪を拂はぬ個人主義的な團體行動をとることの嫌ひな支那人には、到底手がつけられない。神とし祟め、「沒法子」と嘯く。

斯くして喰ひ荒した畑には鼠の糞より稍小さな糞を地面も見えない程殘して漸次肥大成長し、開封附近で最後の脱皮をした。愈々成蟲である。翅は急速に伸びた。行動は益々速かになる。彼等は愈々御得意の極を發揮する。パールバックの『大地』で御馴染の飛蝗となつて遠く餌を求めて飛び去る。

開封より飛び去つたのは目撃したもの二回、何れも黄昏時の夕方九時であつた。飛ぶ時期が黄昏時であつたため天日爲に暗しの感は起らなかつたが、群をなして大雲の如く空を飛び去るその樣は實に一大驚異である。

＊

然し我々は唯これを見てゐる譯にはゆかぬ。これによりて起る災を除かねばならぬ。飛蝗となつては手がつけられぬ。幼蟲時代に策を施し、撲滅しなければならぬ。撲滅は決して至難ではない。我々は今回の發生を見て自信を得た。要は指導機關の緊密な連繫と、農民の動員にある。手を拱いて見てゐてはならぬ。

一回發生すれば更に翌年は大發生を見るのが從前の例である。本年より農民の啓蒙につとめ、併せて指導機關の活潑なる活動によつて今後再び斯かる大發生、大被害のないやうに未然に防止しなければならないのである。

（筆者・華北交通開封鐵路局旅業科員）

傀儡戲

多田貞一

人形芝居卽ち操人形は日本は勿論、朝鮮、臺灣、爪哇、其の他南洋諸國、トルコ等にもあるさうであるが此等相互の關係はまだはつきりしてゐない。日本の操は慶長年間、目貫屋甚三郎が淨瑠璃を語り、西宮傀儡子引田某に人形を舞はせ、後陽成天皇の叡覽に供した時を起原とする（註一）と云ふが、これは相當高度の音樂藝術の域に達したものを指して言ふので人形を箱に入れて首から提げ、歌を唱ひながら人形を踊らせる傀儡子「くぐつまはし（註二）」は已に奈良朝にもあつたらしい。

中國に於ける傀儡戲の歷史は更に古く、その起原を明らかにすることは出來ないが、宋代に於て最も盛行し、その種類も雜多であつた。天咫偶聞に、水の上で舞はす宮戲のことが出てゐる（註三）。私達が最近北京で見たのは提戲と扁擔戲（小臺宮戲）の二つであるが、この外に大臺宮戲と言ふものがあると云ふ。現在傀儡の中心地は南方では福建の泉州らしいが、華北では河北省寧津、呉橋の一帶である。又河南省靈皮縣にもあるが、幼稚で寧津のものには遠く及ばぬと言はれて居る。

昨年の夏、北京に來た親子連れの提戲は呉橋のものであつた。その話によると遠く山西、四川、廣東各地を巡業して歩くと云ふ。今度北京に來たのは二年目で此の次は何時來るか解らない。

本業は百姓で農閑期に出稼ぎに巡るわけである。夏は主に涼しい北方を廻り、多は溫い南方を廻ると云ふ。收入はやつと旅費と食ふだけで、比較的南の方が貰け高が多い。こんなことは此の人達の通性としてあまり語ることを好まない樣子であつたが、この技術は大體世襲で、親は遣らないが兄は出來る。村には同職の家が一、二しかなく、それも今は殆んど遣らないと言ふ。連れてゐた子供に聞くと、この仕事は面白いと言つて居た。彼等の信仰してゐるのは例の呂祖である。

提戲は日本では江戸時代に流行し、絲操又は南京操と云つた。石割松太郎氏の說では南京は單に可愛らしいとか小さいとかを意味し、中國とは關係がないと言はれるが、私は深い根據がある譯ではないが、實物を見た感じ等から矢張り、中國傳來ではないかと思ふ。

その遣り方は先づ黑い布で、やつと一人入れる位の天幕を張る。幕には順天府第一班、賢者樂此と言ふ赤い看板を揭げてゐた。次に入口の內側に胸の高さ程の、同じ黑い布の衝立を作る。その衝立の前が舞臺で、地上には簡單に板が一枚置いてある。操り手はこの衝立の後に胸から下を隱し、上から人形を操るのであるが、上半身も天幕に隱れて見物の方からは見えない。

人形は主として布製で、人間の外に獅子、大蛇、鶴、鱗等いろ／＼の動物が出て來る。人形の手、足、胴、首、尾の各要所に絲を結びつけ、それが上の枠に繫つて居る。人形一つに枠が一つあるわけで、これを左右兩手に持つて巧みに操る。人形は衝立の左右から出入するが、上から吊した絲も黑い爲に、遠くから見れば恰も人形だけが動いて居る樣に見える。

劇は全部で十六齣あり、王小趕驢、麒麟送子、天官賜福、獅子戰球、老販推車等、概して單純なものばかりであるが、中には鶴の背に人が乘つてゐて敵（鮫らしいもの）を見ると、すつぼり隱れ、又時々頭を出して樣子を覗つたりする。結局相手に食ひ殺されると云つた風の稍複雜なものもあつた。

歌は唄はない。始めに劇の題名を叫び、時々一言二言說明を加へるだけで演戲中、大鼓、銅鑼で騷がしく囃し立てる。數齣續けると錢を集めに廻るのは他の大道藝人と同じである。又時に氣分の轉換をはかる爲か、槍、鎖、刀等を使つて見せ、曲藝の樣なこともする。

大江匡房傀儡子記に「定居なく、當家なく、水草を逐うて移徙し、男は狩獵を以て事となし、或は雙劍七九を弄し、或は木人を舞はす」とあるが、時と所を異にするけれども、彼等の生活の共通性が窺はれると同時に、何だか此處にも大陸の匂ひがする。

傀儡戲には實に多くの別名があり、手で操る所から扒戲或は天秤棒で擔つて來るから扁擔戲と言つたりする。北京では傀儡師のことを耍傀儡子的と言つて居る。手の上に載せて使ふ操りは宮戲と言ひ、元宮中で遣つたものが民間に出たから宮戲といふとの俗說がある。これに大小の二種があり（註四）大臺宮戲、小臺宮戲と言つて居る。

彼等自身は小臺宮戲を正名古立戲と唱へ、傀儡と言へば、人形のことである。又人形を數へる時は一人、二人と言うて居るのは注意すべきだと思ふ。

以前は北京でも相當盛んであつたら

しいが、今は影をひそめて居る。併し彼等の郷里には尙相當多くの人形使ひが居つて、毎年農閑期になると北は滿洲朝鮮から南は遠く中支南支方面まで巡業に出ると言ふ。

現在北京に常住してゐるのは閻殿臣と黃玉琴の二人で、共に寧津縣の者、閻君は四年前に、黃君は二年前に北京に來た。閻は少しく文字を解し、開演中、時時日本語を混ぜて人を笑はせる程の頓智がある。閻の話では自分等の人形使ひの元祖は盤古氏よりも一代前の洪君老祖で、同じ操りでも提戲が呂祖を奉じてゐるのとは異ふと。但し出先では財神を祀つて居る。

華北に於ては寧津、吳橋以外には同業者が居ないと言ふわけは、自分等の土地は、耕地が少くて人間が多い爲だと言ふ。又巡業する者は皆相互に連絡がある。北京では種々の宴會、殊に賀壽、誕生祝等に招ばれて演る以外は遣らぬが、他處では勿論大道でも操る。

傀儡戲は彼等の故鄕では扁擔戲とも言ふが、土語で一人忙、二人班、三人班の名がある。一人忙と云ふのは、一人で人形を操り(左手)銅鑼を打ち（右手）歌を唱ふ。文字通り一人が忙しいのである。二人班以上の時、胡琴を彈くもの、大鼓を打つもの等の分業が出來る。因に胡琴は檳榔木の胴に桐の薄板を張つたもの、大鼓は牛の皮以外は駄目と云ふ。

彼等は商賣道具の一切を天秤棒に擔つて來るが、片荷は三尺に二尺ぐらゐの家形をした箱で、他の一方は人形を詰め込んだ曲物である。

天秤棒を眞すぐに打立て、その上に箱を突き差し、前を開き、一寸柱を組立てると、それで舞臺は簡單に出來上る。舞臺正面の對聯は次の通り、彼等の願望を端的に言ひ現して妙である。

生意興隆通肆海
財源茂盛達參江

（商賣は繁昌して四海に通じ、財源は豐富で三江に達する）

この中で注意すべきは海、江の二字で彼等は好んでこの二字を用ひるらしい。橋川時雄氏が青帮と江湖の二字が密接な關係があると言はれたことなど思ひ合はせて何か意味がありさうだ。

それは兎に角、舞臺の下は長く黑い幕を垂れ、操り手はその中に隱れて人形を使ふ。人形の大きさは一尺ぐらゐで、その種類は京劇と同じく花臉、花旦、老生、小生、淨、丑等があり、皆相當な衣裳を着せて居る。

寧津には專門の人形師が居り、人形市が立つ。彼等は人形の首だけ買つて來て、衣裳は自分で作る。精巧なものは目、鼻、口が動き、滑稽なものは目と舌が五寸程飛び出たりする。普通手足はない。これを五六本の支へ棒で操るのであるが、特種のものは傀儡師の手が人形の手で、皿を廻したり、槍を投げたりする。

劇は全て四十五齣あるさうであるがその數例を擧げて見ると次の通り。

唐僧取經　西遊記に同じ。
要盤子　皿廻しの輕業。
王小打虎　虎に呑まれた人間を引出し、人工呼吸を施す笑劇。
王小喝酒　王小が酒をたらふく飲んで、酒代を拂はず、あげくの果て大いに亂暴を働く。
拿劉氏　劉氏陽間に於て姑舅を苦めし罰として陰世の報いを受く。
武大顯魂代殺嫂　京劇に同じ。
玉堂春女起解　同
小姑賢　小姑が姑と嫁の間を和解させる。一名、王登雲休妻とも言ふ。

大臺宮戲は又大抱戲とも言ひ、七人乃至十人で演出するが、費用がかかる爲に滅多に遣らない。三月に一度位大きな宴會等に呼ばれることがあると言ふ。此の時に使ふ人形は三尺から四尺ぐらゐあり、手足もあり、中には二人使ひのものもあると言ふ。舞臺の大きさも高さ、幅共に約一間程ある。その他は小臺宮戲と大差はないらしい。

註一、國民百科辭典、操

註二、くぐつの語源に就いて(イ)、くぐつと云ふ草を編んで作つた袋を持つてゐた爲とか、(ロ)くぐは莖卽ち草木の幹で、つはち（智）の通音、木で作つた人形を舞はす時は神あるが如くなる故とか、苦しい說しかないが、私は簡單に傀儡子の音の變化に過ぎないのではあるまいかと思ふ。傀儡は又窟礧(クレツ)子に作るから、くぐつとくれつとではその音が極めて近い。

註三、明代宮中に過錦の戲あり、その制、木人を水上に浮べ、旁人代つて歌詞を爲す。此疑ふらくは卽ち今の宮戲の濫觴ならむ(天咫偶聞)

註四、今大小二種あり、木偶の大なる者は長さ三四尺、小なる者は長さ尺餘、文繡を着せ、口目能く翕張し、手足能く舞蹈す。蓋し其身機捩あり、演出の時、木偶臺に出で、人幕中に隱れて之を牽いて動かすなり。唱曲道白は皆人が之を爲し、之を佐くるに樂器を以てす（清稗類鈔）

（筆者・北京大學醫學院講師）

猴娃娘

――中國民譚覺書――

直江廣治

長江流域安徽省の廬江に大要次のやうな昔話が傳つてゐる。

「昔或る娘が山へ桑を摘みに行つたまゝ歸らない。家の者があちこち探したが遂に分らなかつた。數年たつて兄がその山へ柴刈りに行つて平たい石を見付ける。持ち上げて見ると、下が洞窟になつてゐるので入つて行く。すると妹が無事にゐる。實は猴子（猿）に掠はれて來たので、既に人間と猿に半分宛似た子供を一人生んでゐた。夫の猿は不在で、一匹の盲の猿に妹の着物の端をしつかり握らせて、番をさせてゐた。妹は逃げ出す良い機會と、そつと鋏で着物の端を切つて洞内の寶物を持つて、子供は置いたまゝ兄と逃げる。盲の猿が歸つて來てこの事を知り、盲の猿を一打ちに殺して、子供を抱いて洞外に出て悲凄な叫び聲を上げた。其後子供は成長して半分は人間、半分は猿に似た人猴になつた。」（鄭辜生「中國民間傳說集」――人猴的來歷）

この筋の話を猴娃娘說話（猴娃は猿の子供、娘は母親の意）と假りに名付け、これを第一例とする。

今農民の間に廣く語り傳へられてゐる此の種の昔話を考察して見たいのであるが、詳しく論ずる餘裕を持たないので、手許にある資料を左に列記して重要な點についてのみ若干の比較を試みる事にする。

第二例　北京大學國學門月刊第四號、湫辯「老猴精」採集地――河南唐河

第三例　中山大學民俗週刊第一〇九號招勉之「爲什麼猴子紅屁股」採集地――河南

第四例　杭州民間月刊第二卷第五集、徐虔梅「猴子屁股的紅」採集地――河南鄭州

第五例　林蘭編、鬼哥哥孫佳訊「江蘇灌雲底猴娃娘」採集地――江蘇灌雲

第六例　同右、孫佳訊「猴娃娘後記」採集地――江蘇灌雲

第七例　杭州民俗週刊第四期鄭楚喜「猴娃娘的故事」採集地――浙江長安鎭

第八例　淸野編、中國民間趣事集第一卷（上虞傳說）「猴精」採集地――浙江江山

第九例　林蘭編、金田雞李元化、崔允竹述「殉情的妖精」採集地――陝西三原

第十例　林蘭編、三個願望邵天眞「大猴的悲哀」採集地――四川重慶

第十一例　林蘭編、漁夫的情人張源「猴屁股何以沒毛」

第十二例　米星如編、吹簫人「不要花大姐」

第十三例　晉、張華「博物志」卷三

第十四例　剪燈新語、卷三

第十五例　明、陵粲「說聽」卷上

さて第一例では物語りの發端は娘が猿に掠はれる事になつてゐる。此の點第四、五、六、十、十四例何れも略同樣である。異類との緣組が此の樣に略奪の形で說かれるやうになつたのは、實は新たなる變化であつて、古くはさうは語られてゐなかつたのである。

卽ち第十二例では次の樣に語られてゐる。

「母と娘の二人暮して、母は常に山神に、娘が早く嫁に行つて立派な人を夫とするやうに祈願してゐた。或日一匹の喜鵲が紅箋を啣へて來て媒人となり老猴精に嫁する。……」

とあり、浙江長安鎭の第七例も略同樣で、略奪の形ではない。古くはかかる異類との婚姻は忌まるべきものではなく、寧ろ人間の側から望ましくさへ考へられてゐたものと想像されるのである。更に河南唐河の第二例では、

「老母の許に娘と嫁が暮してゐた。此の二人は朝早く起きて、米を搗く競爭を約束する。老猴がそれを盜み聞いて翌朝早く來て米を搗く眞似をする。娘は其の音を聞いて、嫁に負けたかと思つて急いで起きて來た。そこを猿に掠はれて……」

とある。河南の第三例、第十一例にも同樣に米搗き、舂米の個條がある。又浙江の第七例にも、

「或る家の娘が溪邊で米を淘いでゐると、一匹の黄蜂が飛んで來て媒人となり、翌日美しい花轎が彼女を迎へに來た。……」

と語られてゐる。

この第二例と第七例の橋渡しをするものが浙江江山の第八例であつて、

「老母の許に二人の娘が住んでゐた。二人は每朝早く競爭で溪邊へ米を淘ぎに行つてゐた。山の猴精がこれを知つて、或る朝暗い中に門の所で待つてゐる。そして姉娘の出て來たのを掠つて行く。」となつてゐる。ごく接近した三地方で採集された說話も、これだけ少し宛異つてゐるのであつて、此の異つ

てゐる點が我々には重要なのであり、比較する事によつて、同じ型の説話の變化して行く姿が良く分るのである。それは兎も角として、此の溪邊の淘米といふ事も、前の搗米、舂米と同じ意味を持つものと思はれる。此の個條は偶然の挿入とはおもはれないのであつて、今日でも神祭に於けるお供物の重要性を、我々は廣く各地の民俗に認める事が出來るのである。古くは憑り來る神靈に奉仕する神妻―巫女―の最も大切な仕事の一つは神靈の御食を調理する事であつた。我々は神靈の御食を調理する神妻としての姿を、この猴娃娘に於て認める事が出來るのである。私などは此の點を可成り重要視してゐるのであつて、娘が猿に掠はれてと語られるやうになつた前の古い信仰が、かうした形で殘存してゐるものと考へてゐる。そして此の猿も神妻に奉仕さるべき神靈の落ちぶれた姿であると見るのは私だけの思ひ過しであらうか。

此の事は、又次の點からも考察される。即ち此の猴娃娘の説話で、娘が洞中で猿に奇しき緣を結び、子供を生んだと云ふ點は、不思議とどの例も落してゐないのである。互ひに遠く離れた各地で採集された此等の昔話が、何れも此の個條を落してゐない事は、實は此の個條が極めて重要であり、且極めて古い起源を持つものである事を示してゐる。

第二例では、

「二匹の子猿を生むが、後に母親が喜鵲の導きで洞中に至り、膠を猿の眼に塗つて欺いて太陽に晒させ、猿を一時盲目にさせて、その間に娘と共に寶物を持つて逃げ歸つた。」

となつてゐる。河南の第三例、鄭州の第四例も略同樣である。陝西三原の第九例は猿でなしに妖精であるが、筋は全く同じで、矢張り二匹の小妖精を生んでゐる。第十一例でも三匹の子猿を生んでゐる。第一例では人猴の由來として語り傳へてゐるが、重慶の第十例でも子供は半面が猿に似てゐたとある。此等の例は何れも、猴娃娘が逃げて來る時に、子供は洞窟に置いて來る事になつてゐるが、江蘇灌雲の第五例では子供は逃げる時に一緒に人界に伴ひ來つたと語つてゐる。

更に第十五例では、

「明の孝宗弘治年間、洛陽の民婦阿母なる者が、山で群猴に會ひ、洞中に連れて行かれる。一匹の老猴がこれを妻とする。後に子供を生むが、人面猴身で毛が生えてゐた。老猴が眼を病んだ時欺いて毒藥を塗つて盲にし、子供を連れて逃げ歸つた。」

とあり親しく母子を見た者があると附記してゐる。これは事實と見るよりも、上述し來つた説話を背景に考ふべきであらうが、子供を連れ歸つてゐる點は注意すべきである。

更に第十三例の博物志には、

「蜀の西南高山の上に猴に似た物がゐた。長さ七尺で能く人形をなした。これが屢〻女を奪つて妻としたが、生れた子供は人と異る事なく皆楊姓を名乘つて蜀の西界に住んでゐた。」

と記してゐる。これは事實よりも氏族の祖先譚と見るべきであるが、それにしても「子孫に時に攫爪のある者が現れた。」とあるのは興味深い。かかる異類との婚姻によつて生れた子供は異狀なる子供であり、その身體には何等かの痕跡が殘るものと信じ、又それを一族の記念として誇りとして語り傳へた時代が、かつて有つたのである。

かかる異狀なる兒童の出現譚が文藝化されて來ると、唐代初期に補江總の手になると云はれる白猿傳（太平廣記卷四四四）の如きものになる。

これは、女と白猿の間に生れた子供は白猿に似てゐたが、後に歐陽詢と呼ばれ文名大いに擧つたと說くものである。この白猿傳が一個の文筆を業とする者の創意に出たものでない事、又此の白猿傳が上述し來れる猴娃娘の民間説話を生ぜしめたものでない事は、文獻ばかりを頼りにしてゐる人はいざ知らず、民間説話の性質に注意を拂つてゐる程の人なら等しく認めるところであらう。白猿傳其他の記錄以前に常民の白猿傳即ち猴娃娘の民間説話のあつた事を私は信じてゐる。

此の所謂白猿傳の系統を引くものに清平山堂話本とか、古今小說等が現れて來るのであつて、我々はそこに文藝と民間説話、更にその背後の民間信仰との深い關聯を見出す事が出來るのである。文藝と民譚と信仰との關係が此の方面から證明される時期が來なければならないと私などは考へてゐる。さてこの猴娃娘説話の重點が奇しき婚姻の結果、優れた異狀子の出現する事を說くにあつた事は、今ではすつかり形の崩れてしまつた上述の例からも、かすかながら跡付ける事が出來るのである。此の事は同じく異類との婚姻を物語る、各地で採集された説話群からも推定される事であつて、他日改めて論じて見たいと思つてゐるが、他の説話群では、此の個條がまだ新鮮に保存されてゐて、古くは此の個條を中心として話が展開された事を察する事が出來

るのである。そして今はまだ豫想の程度であるが、此の信仰は中國古代傳承に於ける感生帝へと一連のつながりを持つてゐるものと私は考へてゐる。思へば猴娃娘說話はその背後に、此の國の常民の極めて古い信仰を背負つてゐるのであつて、此の說話が昔から現在採集されたままの姿であつた筈はないのである。信仰の變化に伴ひ、民間說話の側にも發展があつたのである。

さて次に蜜蜂の媒人とか、喜鵲の導きで洞窟にたどり着くとか、寶物を持つて逃げて來るとか、此等の各要素は夫夫考察すべき內容を含んでゐるが、ここでは省略して、最後に猿の末路について考へて見る事とする。

廬江の第一例では、「猿は子供を抱いて洞外に出て悲凄な叫び聲を上げた。」とだけしかないが、江蘇灌雲の第五例になると、

「娘は兄に助けられて、洞中の寶物を奪ひ、子供を連れて逃げ歸る。猿は每日娘の家にやつて來て石臼の上に坐つて叫ぶ。兄が臼の上に膠を塗つて置くと猿は知らずに、例の如く坐つてくつついてしまふ。たうとう尻の皮がはげてしまつた。」

とある。これが浙江江山の第八例になると洞窟內の出來事として、

「母が喜鵲の導きで洞中に至り、娘に敎へて大きな鐵を眞赤に熱して、その上に敷いて猿を坐らせる。猿は尻の皮がくつついて動けなくなる。その間に二人は逃げ歸る。猿はやつとの事で身を脫したが、旣に尾は焦げて無くなり尻の皮は赤くむけてゐた。」

今度はずつと離れた重慶の第十例では「娘は機を見て逃げ歸る。猿は子供を抱いて家の前の石に坐り、猴見的媽猴見的媽、猴見要黠乳猴嘗、と歌ふ。家人がその石を眞赤に燒いて置く。猿がうつかり腰を掛けて尾を失くする。」即ち最後の個條は、猿には何故尾が無いか或ひは何故尻が赤いかといふことを說く所謂「何故話」になつてゐる。これは第二、三、四、六、八、十、十二例に皆共通してゐる。浙江の第七例では、最後に門前に來て叫ぶまでは同樣であるが、家人に計られて井戸に落されて殺される事になつてゐる。これは笑話の一步手前で留つてゐる形で、この方が少しは古いのであらうが、併しここでも旣に人力の卓越さが說話を支配し、此の話をそれ以前の形から變化せしめてゐるのである。人間が自らの力を主張するやうになつて、說話は急に變化し始めざるを得なくなつたのである。

この燒け爛れた臼或ひは石に腰掛けて尾を燒失したり、尻の皮を赤く燒いてしまふ個條は、どんな子供が聞いても、笑ひ興ずるであらう。併しこの猴娃娘の昔話が、始めからこんな形で、笑ふためにのみ用意されたものでなかつた事は、特に私の强調したい點である。

即ち農村の子供達に今人氣のある此の說話も、他の幾多の異類求婚譚を橋渡しとして、遙かに古代傳承の世界に連つてゐるのである。それが猿の尻は何故赤いかといふ風に話されるやうになつたのは、說話の側から見れば發展であり、我々は其處に、極めて活潑な民間文藝の活動を見る事が出來るのであるが、それは亦一面から見れば、民間の信仰の衰頽をも物語つてゐるのである。そして此の國の民間信仰の變遷を跡付けるためには、村の子供達の笑ひそぞろぐこの猴娃娘の昔話にも耳を傾けなければならないと私などは考へてゐる。

附記　日本の昔話に「猿聟入」といふのがある。非常に人氣のある昔話で廣く各地に分布してゐる。そしてその要素の中には猴娃娘說話と可成り似た點もあることを附記する。

（筆者・北京輔仁大學文學院講師）

東城記 その六

加藤新吉

東城には、在住日本人の生活の中心と目すべきものが二つある。その一は北京神社。

北京神社は東單から東へごみごみした胡同を通り拔けて城壁に突き當つたところにある。由來、北京の東南部は日本人の古き、且、主たる居住地、從つて神社はたまたまその一角に建てられてゐる譯である。

神社の造營は支那事變以後のことに屬するのだ、境內はまだ完成してゐない。灰色の土の上に、黃塵の吹き卷く裡に、むき出しの神社が建つてゐる。それも大陸らしい、と見れば見られないこともないが、餘りに殺風景を極めてゐる。氏子は、神域の蔚葱を期せざるべからずといふので、松とか櫻とかを植ゑる。が、容易に活着しない。それはあたかも、祖國の生活や思想をその儘大陸に生かさうと努力してゐる日本人の現下の姿に似てゐる。

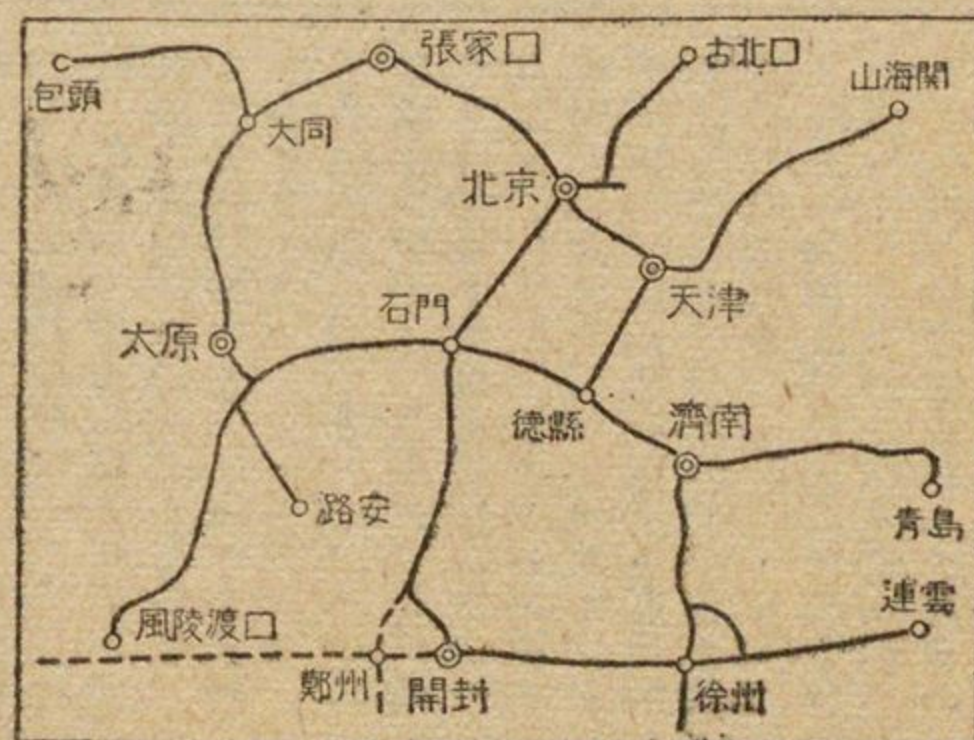
朔、十五日、祭日、大詔奉戴日、といつた日には、多數の同胞がここに參拜し祈願をこめる。神前結婚もかなりの數に上つてゐる。その意味に於て、北京神社は在留邦人の生活の一の中心をなしてゐる。また、大陸在住邦人の多くが、眞に日本人たるべく、その生活を神及 天皇に歸一し奉るべく、努力してゐることも事實である。しかし現在のところでは北京神社が在住邦人の精神生活と密接に結びついてゐるとはまだ謂へない。

この頃のことはよく知らないが、我我の子供の頃の日本の田舍の生活は、寺や神社ともつと密接に結びついてゐたやうである。幾つか幾十かの民家が敎會を中心に、而かもそれにすがりつくやうにして出來てゐる聚落を、我々は歐洲に於ても、滿洲に於ても、また支那に於ても見る。さうした結合、眞乎生活の中心としての神社は、まだ大陸では見られないやうである。

北京神社の境域は元の禮部の舊址、そのあとに建てられた明の貢院、それに續く淸の貢院の一部である。大正十年頃にわたくしは初めてここを見、その南に當る觀象臺を見た。その頃、既に貢院の建物は廢滅してゐたが、昔を偲ぶに足る瓦礫の山が城壁に續く廣場を埋めてゐたと記憶する。

貢院はいふ迄もなく舊王朝の官吏登用試驗場である。北京の貢院では直隸省の鄕試と、全國鄕試の及第者を集めての會試とが行はれた。靑雲の志ある靑年は、何百年かの間、悉くここをめざしたと云つても過言ではない。

北京神社の北端を走る東總布胡同には、門に解元と書いた大文字の扁額をかけた家がある。咸豐辛酉の年の鄕試の首席を表彰したものだ。北總布胡同のわたくしの家に突き當る露地には、泗州試館の額をかけた門がある。書は同鄕の李鴻章。家は既に無いが、會試に臨む泗州擧人の宿所であつたらう。

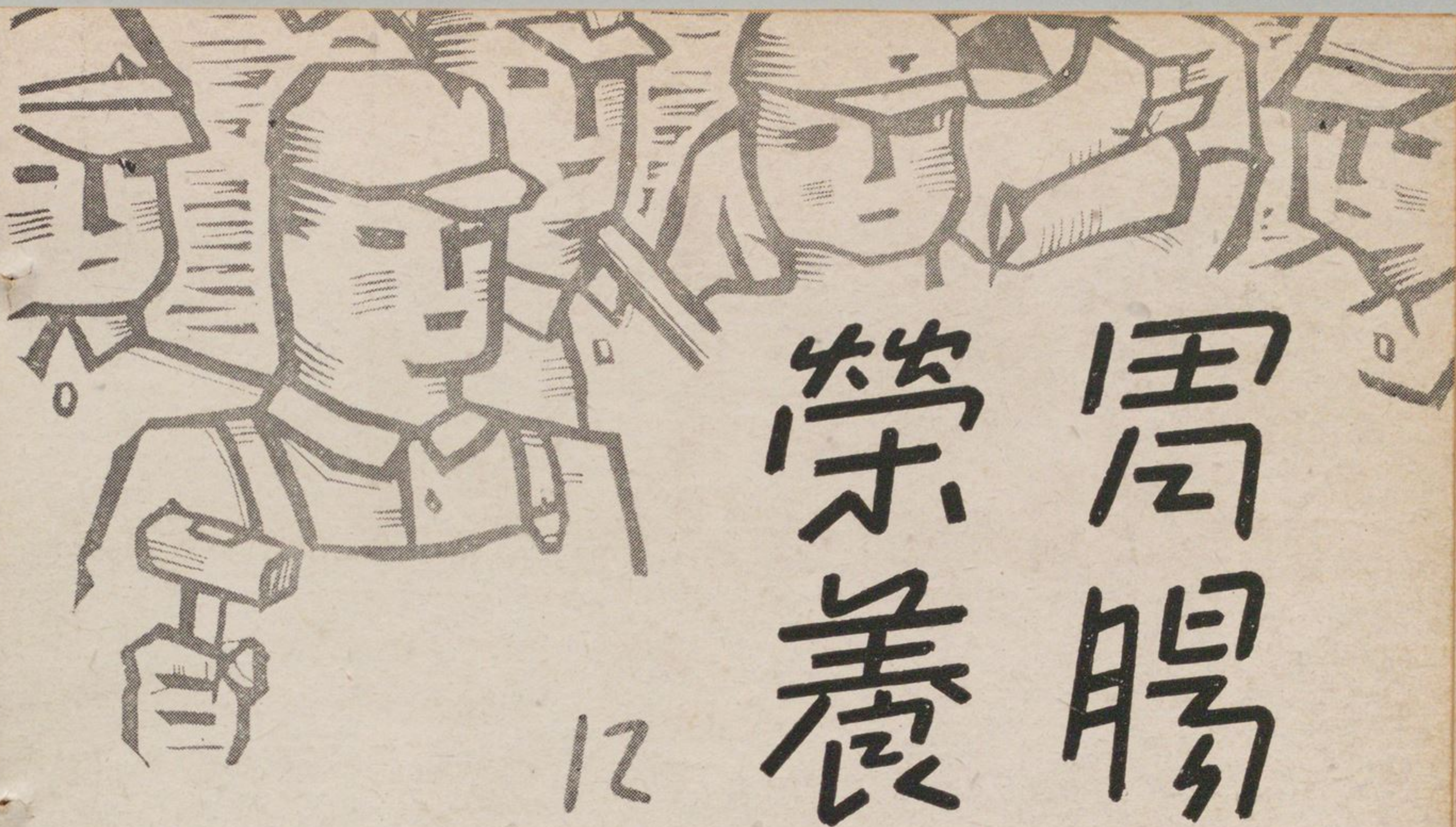
中江丑吉氏が書物と犬とを友に住んでゐたのが貢院、今の神社の西側である。大正の末か昭和の初かを最初にして、わたくしは何度かこの家を訪ね、可園に住んでゐた頃はこの人からも何度か訪ねられた。その孤高超俗の風格は北京特異の存在として人々の敬重するところであつたが、この人逝いて半歲、寂寞の感甚だ深い。その訃を聞いて訪ねた時、妻なく子なく生涯を終つたこの人の靈前に、先考兆民居士晚年の一絕がかかつてゐたことも、忘れられぬ印象である。

昭和十八年一月十五日印刷納本
昭和十八年二月一日發行

二月號
（每月一回一日發行）

編輯者 北京・華北交通株式會社資業局 加藤新吉
發行者 東京市麴町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 東京市小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社（東東二〇四） 古川一郎
發行所 東京市麴町區三番町一 第一書房
振替 東京六四二二三番
電話九段（33）一四一五番 三三四四番
會員登錄番號 一一六五〇八番

一册定價㊇三十錢（郵送料一錢五厘）
一ヶ年分 金三圓六十錢

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可 昭和十八年一月十五日印刷納本 昭和十八年二月一日發行（毎月一回一日發行）第四十五號

長期に亘る食慾不振、ビタミンB_1不足による胃酸減少、無酸、胃及び十二指腸潰瘍、胃及び腸の無力症、便秘、腸炎による下痢及び疝痛、結核・肋膜炎時及び妊・産・授乳時の榮養補給、疲勞の恢復、各型脚氣等に

高單位ビタミンB_1劑「强力」メタボリン錠の投與は、先づ根本的に胃腸組織を賦活し、筋肉の緊張を調整してその過勞を恢復し、消化液の分泌を亢めて食慾を旺盛ならしめ、榮養素の吸收を良好ならしめて所期の目的を達す

V・B_1含有量一錠中〇・五ミリグラム

☆ 一〇〇錠 三〇〇錠

高單位ビタミンB_1劑

强力 メタボリン錠

製造發賣元 株式會社 武田長兵衞商店 日本大阪市東區道修町

★天津出張所 天津日本租界旭街三 ★北京駐在所 北京宣武門内大街路二一三號

北支 ㊝ 定價 三十錢